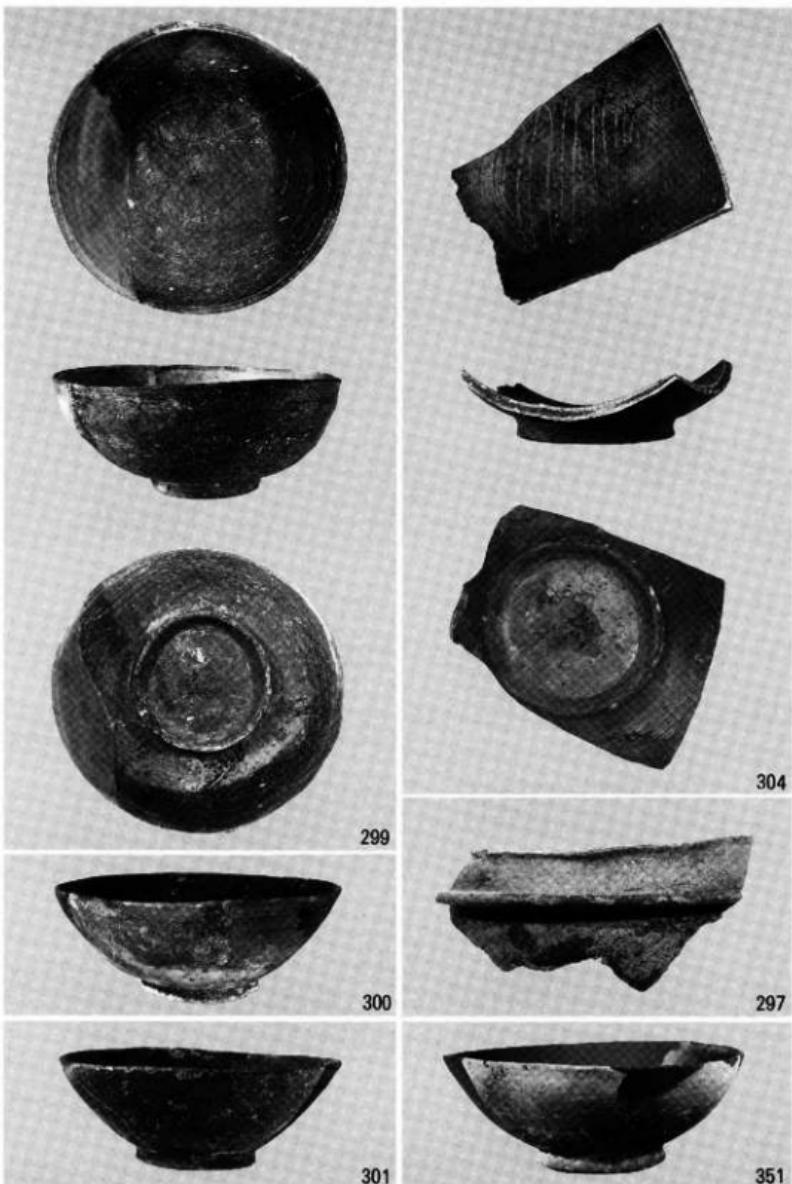


S E - 9 (219 • 222 • 225 • 232) • S K - 10出土遺物



S K - 10 (297 + 299~301 + 304) • S D - 11 (351) 出土遺物



408



418



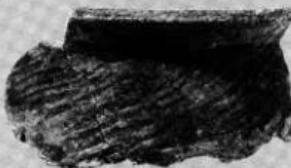
410



419



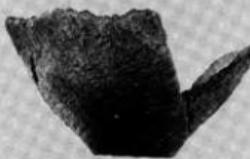
411



420



412



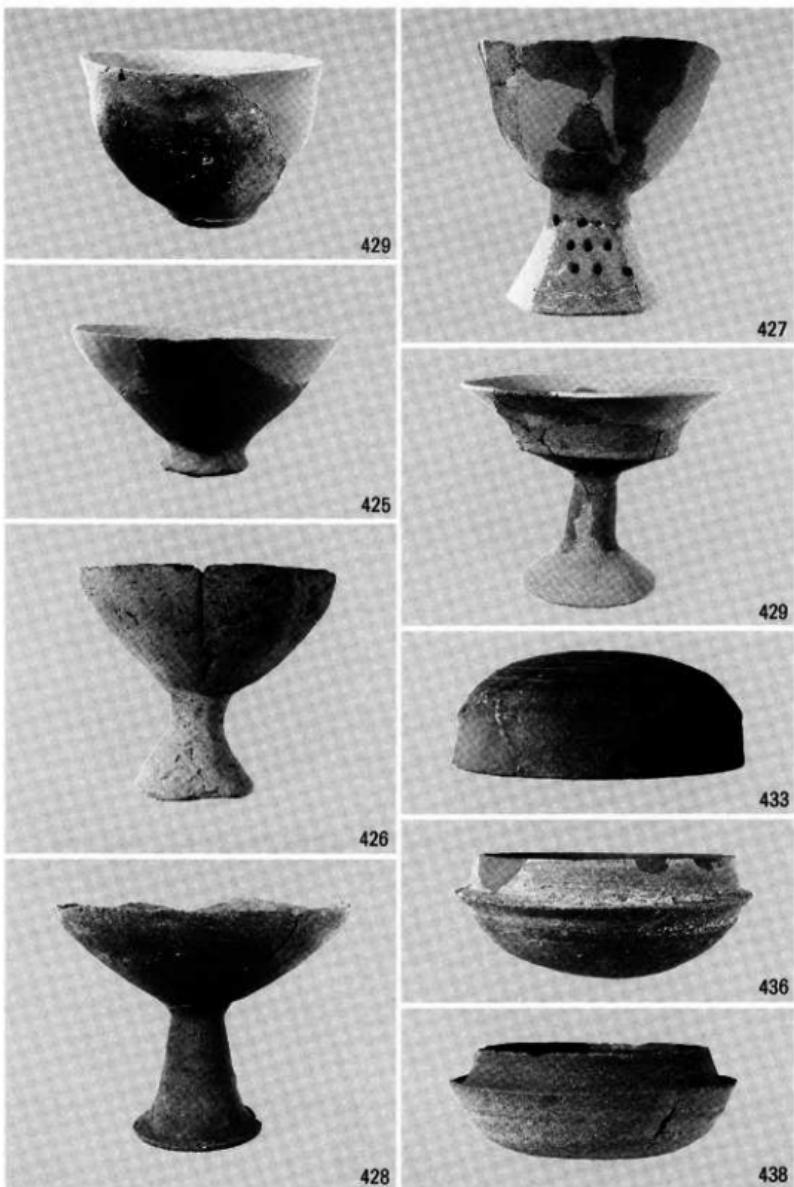
422



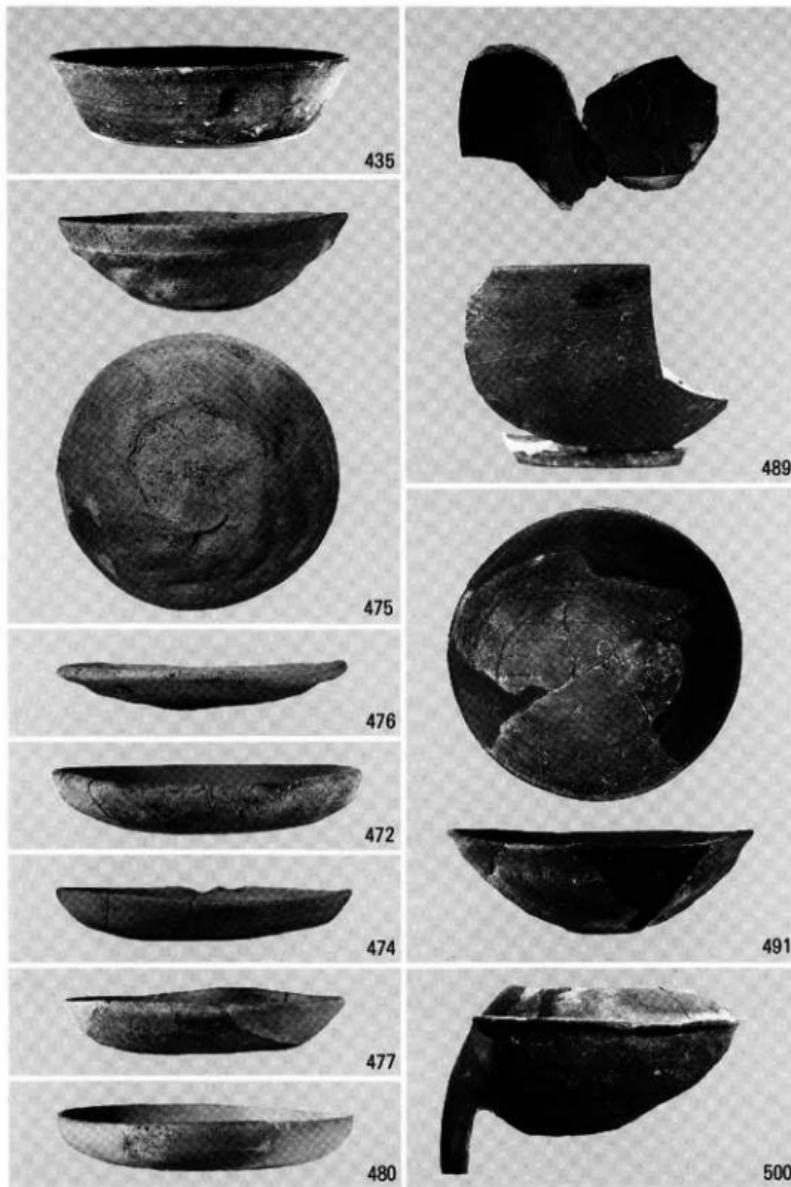
416

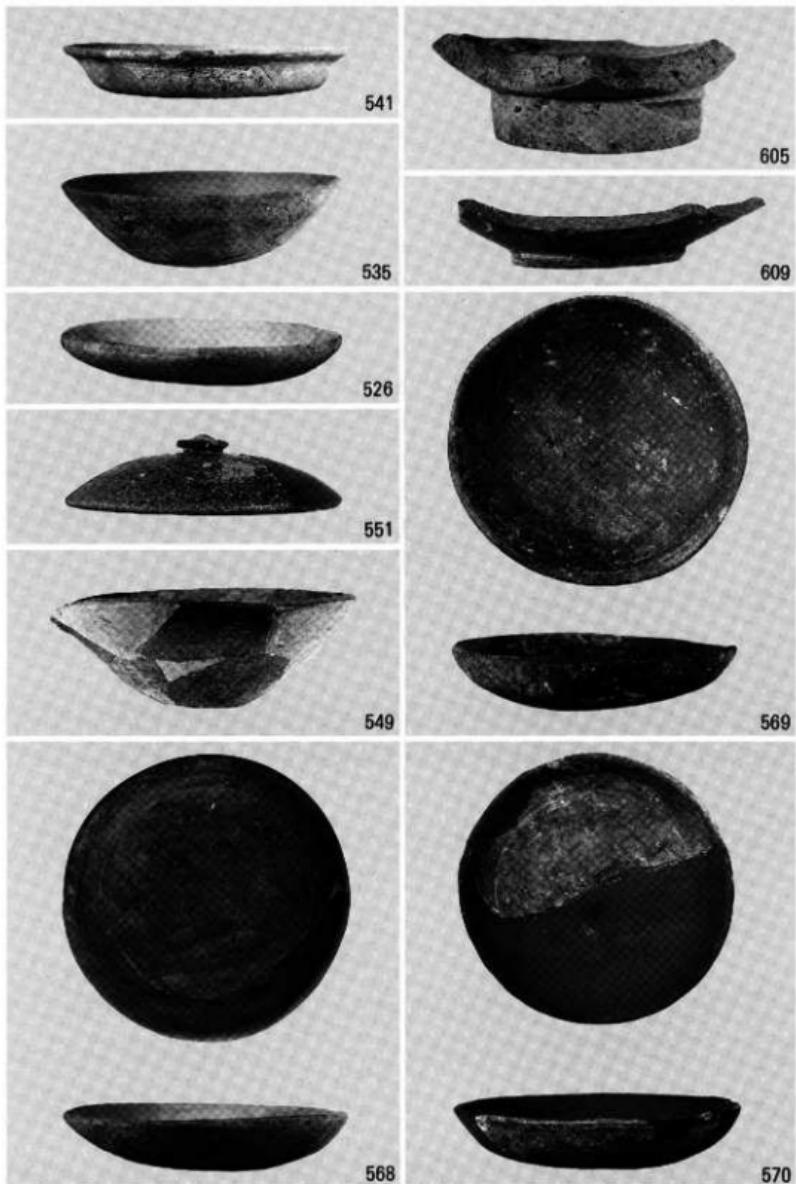


423



第IV層出土遺物





第三層出土遺物

II 老原遺跡(第2次調査) 発掘調査概要報告

## 例　　言

1. 本書は、八尾市東老原1丁目11番地・16番地他で実施した関西電力株式会社の架空送電線  
鉄塔新設に伴う老原遺跡（第2次）発掘調査の概要報告である。
1. 本調査業務は、財團法人八尾市文化財調査研究会が関西電力株式会社から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は原田昌則・成海佳子を担当者として、昭和60年8月19日から9月10日まで実施した。
1. 内業整理・本書作成業務は、現地調査終了後実施し、昭和62年3月31日をもって終了した。  
本書作成に係る業務は主に成海が行ったが、遺物写真撮影は原田が担当した。
1. 本文は、第1章・第2章・第5章を原田、第3章・第4章を成海が執筆した。
1. 現地調査・内業整理参加者は下記のとおりである。  
相松隆・麻田優・上辻よしえ・太田修司・岡崎英雄・柏本幸寿・龜村ゆかり・角　暉・大黒  
静子・中川曉・長野琢磨・南艸良彦・益本浩・松岡利行・松村一・山内千恵子・横山妙子・  
吉原早智子・和田孝（以上五十音順）

## 本文 目 次

第1章 調査に至る経過.....	155
第2章 地理・歴史的環境.....	157
第3章 調査概要.....	162
第1節 調査方法と経過.....	162
第2節 基本層序.....	162
第3節 検出遺構.....	165
・第1調査区.....	166
・第2調査区.....	170
・第3調査区.....	173
第4章 出土遺物観察表.....	198
第5章 まとめ.....	245

## 挿 図 目 次

第1図 調査地周辺図.....	155
第2図 調査区設定図および地区割図.....	163
第3図 基本層序模式図.....	164
第4図 SK-1 平断面図.....	165
第5図 SK-1 出土遺物実測図.....	167
第6図 第1調査区包含層出土遺物実測図.....	168
第7図 第1調査区平面図.....	169
第8図 SE-1 平断面図.....	170
第9図 SE-1・SD-1・SD-2・第2調査区包含層出土遺物実測図.....	171
第10図 第2調査区平面図.....	172
第11図 SE-2 平断面図.....	173

第12図	S E - 2 山土遺物実測図 1 .....	174
第13図	S E - 2 出土遺物実測図 2 .....	175
第14図	S E - 3 平断面図 .....	177
第15図	S E - 3 出土遺物実測図 .....	178
第16図	S K - 2 平断面図 .....	180
第17図	S K - 2 出土遺物実測図 1 .....	182
第18図	S K - 2 出土遺物実測図 2 .....	183
第19図	S K - 2 出土遺物実測図 3 .....	184
第20図	S K - 2 山土遺物実測図 4 .....	185
第21図	S K - 2 出土遺物実測図 5 .....	186
第22図	S K - 3 平断面図 .....	187
第23図	S K - 3 • S K - 4 • S K - 5 山土遺物実測図 .....	188
第24図	S K - 6 平断面図 .....	190
第25図	S K - 6 • S K - 7 出土遺物実測図 .....	191
第26図	S P - 2 • S P - 4 • S P - 5 出土遺物実測図 .....	193
第27図	第3 調査区包含層出土遺物実測図 1 .....	194
第28図	第3 調査区包含層出土遺物実測図 2 .....	195
第29図	第3 調査区包含層出土遺物実測図 3 .....	196
第30図	第3 調査区平面図 .....	197

## 図 版 目 次

図版一	第1調査区全景 S K - 1	図版六	S K - 2 • S K - 5 • S E - 2 S K - 2 土器集積
図版二	第2調査区全景 S E - 1	図版七	S K - 1 出土遺物
図版三	第3調査区全景 S K - 3	図版八	S E - 2 • S E - 3 出土遺物
図版四	S E - 2 同上 断面	図版九	S K - 2 出土遺物 1
図版五	S E - 3 同上 断面	図版一〇	S K - 2 出土遺物 2

図版一一 SK-2 出土遺物 3

図版一二 SK-2 出土遺物 4

図版一三 SK-3・SK-4・SP-2

第3調査区包含層出土遺物 1

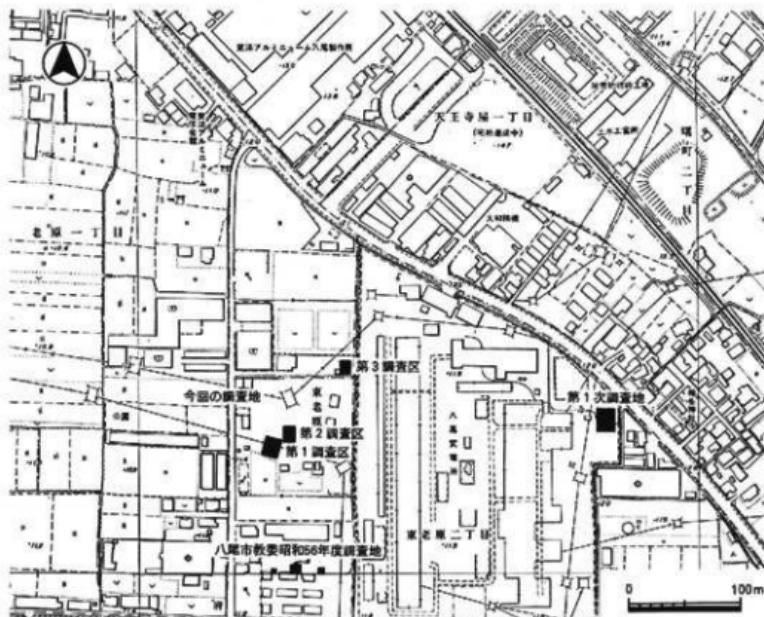
図版一四 第3調査区包含層出土遺物 2

## 第1章 調査に至る経過

老原遺跡は、八尾市南西部の老原1丁目・東老原1丁目に所在しており、地形的には長瀬川左岸の沖積地にあたる。

当地域が遺跡として認識される以前は、かつて奈良時代後期に比定される軒丸瓦の出土を見た老原1丁目の通称「五条の宮」付近を中心として、寺院に関連した遺構が存在していたものと考えられていた。ところが、昭和56年に東老原1丁目で八尾市教育委員会が関西電力株式会社社宅建設に先立って実施した発掘調査では、古墳時代後期と鎌倉時代前期に比定される二時期の遺構が検出され、老原遺跡が複合遺跡の性格を帯びた遺跡であることが判明した。<sup>註1</sup>

昭和60年に当調査研究会が東老原2丁目の関西電力株式会社八尾変電所内で実施した発掘調査（第1次調査）でも、鎌倉時代に比定される水田遺構を検出している。<sup>註2</sup>  
<sup>註3</sup>



第1図 調査地周辺図 (1 : 5,000)

このような情勢下、関西電力株式会社から、八尾市東老原1丁目11番地・16番地他に架空送電線鉄塔4基を新設する旨の計画書が八尾市教育委員会に提出された。これら一連の計画書を受けた八尾市教育委員会は、当該地が遺跡推定範囲であるため、八尾市文化財保存に係わる事務取扱い要則に基づき、試掘調査が必要であると判断し、事業者へその旨を通告した。昭和60年7月11日に、八尾市教育委員会が架空送電鉄塔新設予定地4箇所で試掘調査を実施した結果、3箇所から平安時代末期に比定される遺物の出土が確認された。以上の結果から、基礎工事によって遺構が破壊されることが予想される3箇所については、記録保存に必要な資料を作成する目的で、事前に発掘調査を実施することが、八尾市教育委員会・関西電力株式会社の二者間で了解された。

発掘調査は、当調査研究会が主体となって実施することが、八尾市教育委員会・関西電力株式会社・当調査研究会の三者間で決定され、契約締結後、現地調査に着手した。調査期間は昭和60年8月19日から9月10日で、調査面積は542m<sup>2</sup>を測る。

註1 八尾市史編纂委員会 「八尾市史」1958

註2 (財)八尾市文化財調査研究会 「老原遺跡発掘調査概要報告」「八尾市埋蔵文化財発掘調査概報1980・1981年度」;(財)八尾市文化財調査研究会報告2 1983

註3 (財)八尾市文化財調査研究会 「老原遺跡(第1次調査)」「昭和59年度事業概要報告」;(財)八尾市文化財調査研究会報告7 1985

## 第2章 地理・歴史的環境

八尾市の位置する河内平野南部周辺の地形は、東部に生駒山地とその裾から西側に広がる複合扇状地、南部は羽曳野丘陵、西部は上町台地から成る。さらに平野部を流れる河川には、大和盆地の水を集めて、生駒山地と松岳山丘陵間を流下する大和川がある。大和川は河内平野と融合する藤井寺市船橋付近で河南盆地を北流する石川と合流していた。宝永元年（1704）に付け替えられた新大和川はこの合流点から西流しているが、古大和川はこの地点で流路を北西に変え、さらに八尾市二俣付近で下串川と長瀬川に分流して河内平野内を流下していた。このほか、生駒西麓部に恩智川、玉串川と長瀬川の間には楠根川、さらに南部には人乗川・東除川・西除川の水を集めて西流する平野川が存在していた。河内平野はこれらの諸河川の永年に亘たる沖積作用により形成してきた。このように河内平野南部は、地形的に多様な様相を示す地域であったばかりでなく、古墳時代以降は大和と難波をつなぐ中継点として政治・経済的にも卓越した地域であったと言えよう。したがって、各時期の遺跡立地もそれぞれの時勢に対応して推移してきたことが窺える。今回の調査地である老原遺跡が位置する八尾市老原1丁目・東老原1丁目一帯は八尾市の南部に当たり、前述した水系で区別すれば長瀬川・平野川に挟まれた低平地に当たる。以下、周辺遺跡を時期ごとに概観してみる。

旧石器時代の河内平野の環境は、古大阪平野と呼ばれる陸地が広がっていたようである。しかし、この時期の生活面はその後古河内平野・河内湾・河内潟・河内湖と変遷する過程のなかで厚く土砂が堆積しているため現実にはこの面に達する調査を実施することが困難である。したがって、平野部内部でこの時期の明確な遺構は検出されていないが、沖積作用が比較的緩慢な平野南部の長原遺跡・瓜破遺跡・八尾南遺跡でこの時期に比定される石器が検出されており、<sup>註1</sup><sup>註2</sup><sup>註3</sup><sup>註4</sup> 平野内部においても遺跡が存在している可能性が高い。平野部の南方に位置する羽曳野丘陵には、旧石器の標識遺跡である國府遺跡が國府台地北端に位置しているほか、はさみ山遺跡では<sup>註5</sup><sup>註6</sup> 円形竪穴住居が検出されており旧石器時代の生活様式を知るうえで注目される。

縄文時代草創期においても自然環境にはさほど変化がなかったようである。この時期の遺物は長原遺跡・桑津遺跡から有舌尖頭器が単独で出土しているのみで、明確な集落は検出されていない。<sup>註7</sup> 続く早期の遺跡は生駒西麓に集中する傾向で、神並遺跡・大原遺跡で押形文土器が出土している。<sup>註8</sup><sup>註9</sup> 縄文時代前期の河内平野の環境は、温暖化に伴う海進現象が顕著で、海岸線が内陸奥部に及んでいたものと推定されている。この時期の遺跡は前代に比してやや低位置に移動したようで、海進のピークに符合した現象として受けとれる。この時期の遺跡には、北白川下層2式に比定される爪形文土器が出土した国府遺跡・恩智遺跡が挙げられる。中期の河内平野<sup>註10</sup>

の環境は、河内湾の海面の低下時期にあたる。遺跡の立地は、前代の海進によって河口部に形成された扇状地や砂州上にある。この時期には、前期に出現している国府遺跡・恩智遺跡が継続して営まれているほか、馬場川遺跡・繩手遺跡が出現する。なお、出土した土器は初頭<sup>註11</sup>から中葉にかけては瀬戸内地方の縄文時代中期を代表する船元式が分布し、後葉にかけても瀬戸内地方の里木II式が出土する他、中期末には関東系の加曾利E式の影響を受けた新しい土器型式として星田式が成立している。後期になると、さらに生駒西麓に芝ヶ丘遺跡・日下遺跡<sup>註13</sup>・鬼塚遺跡<sup>註15</sup>・大畠遺跡が出現するほか、羽曳野丘陵末端には林遺跡、河内低平地に位置する八尾<sup>註16</sup>南遺跡でも遺物が出土している。土器の主流は前半においては中期と同様瀬戸内系（中津式・福田K II式）や関東系（加曾利E式）が占める反面、馬場川I式に代表される地方派生型式の土器も出現している。晩期の遺跡は後期から継続するものが多いが、新たに船橋遺跡・長原遺跡<sup>註17</sup>が出現している。船橋遺跡出土の土器を指標とする船橋式土器は北九州地方を中心とする夜臼式土器・板付式土器に共通した特長を示すもので、後出の型式と考えられる長原式土器と共に稻作導入期の動向を知るうえで重要な鍵を握る土器と言えよう。

弥生時代になると稻作の導入に伴って遺跡の立地にも変化が認められ、平野部の低湿地帯にも集落が営まれ始めるようになる。前期の遺跡は平野部に鬼虎川遺跡・山賀遺跡・美園遺跡<sup>註19</sup>・<sup>註20</sup>・<sup>註21</sup>、鬼井遺跡<sup>註22</sup>・田井中遺跡<sup>註23</sup>、山麓部に鬼塚遺跡・恩智遺跡・羽曳野丘陵北端から河内低平地にかけては瓜破遺跡・瓜破北遺跡・長原遺跡・八尾南遺跡・船橋遺跡・国府遺跡がある。中期になると、新たに平野部に瓜生堂遺跡・巨摩庵寺遺跡・若江北遺跡・東郷遺跡・木の木遺跡・東弓削遺跡<sup>註24</sup>・<sup>註25</sup>・<sup>註26</sup>・<sup>註27</sup>・<sup>註28</sup>・<sup>註29</sup>・<sup>註30</sup>・<sup>註31</sup>・<sup>註32</sup>・<sup>註33</sup>・<sup>註34</sup>・<sup>註35</sup>・<sup>註36</sup>・<sup>註37</sup>・<sup>註38</sup>・<sup>註39</sup>、西ノ辻遺跡・繩手遺跡・水越遺跡・上町台地部に桑津遺跡・山之内遺跡が出現している。この時期平野部の遺跡は、河内潟・湖の陸地化に伴なって集落規模が一段と拡大している。これらの集落が人型化する背景としては、前期から培われてきた個別の農業共同体が、核となる集落に統括されることにより労働力の集中を可能にし、その結果として基礎的生産力を増大させたことが一番の成因であったものと考えられる。したがって、瓜生堂遺跡・加美遺跡で検出されたこの時期の大型弥生墳丘墓も、これらの農耕社会を基盤として成立した地縁的階級社会の結合体の長を中心とした人々を埋葬した墓として捉えることができる。しかし、後期になると平野部で新たに成法寺遺跡・小阪合遺跡・中田遺跡・北島池遺跡が出現する程度で、既存集落は規模を縮小する傾向が顕著である。一方、生駒西麓では、岩滝山遺跡・高尾山遺跡・平野<sup>註44</sup>山遺跡などの高地性集落が成立している。<sup>註45</sup>

続く古墳時代前期（庄内式期・布留式期）の集落位置は、基本的には前代と同様であったと考えられる。この時期の集落は、西岩田遺跡・瓜生堂遺跡・友井東遺跡・美園遺跡・菅振B遺跡・東郷遺跡・小阪合遺跡・中田遺跡・東弓削遺跡・八尾南遺跡・瓜破北遺跡・久宝寺遺跡・<sup>註47</sup>

亀井遺跡・加美遺跡がある。これらの遺跡は、特に庄内式期末から布留式期にかけて盛行することが指摘でき、集落内における積極的な開発の動向は、米るべき古墳造営前夜の社会情勢を暗示している。前期古墳としては、生駒西麓に西ノ山古墳・花岡山古墳、玉手山丘陵に玉手山古墳、松岳山丘陵に松岳山古墳がある他、平野部では塚ノ本古墳・美闇古墳・壹振1号墳が存在している。<sup>註48</sup> 古墳時代中期になると平野部は大規模な洪水にあうこともなく比較的安定した環境であったようで、集落位置も前代に符合した傾向である。平野南部に位置する長原遺跡では、この時期に人規模な古墳群が存在する他、亀井遺跡・友井東遺跡・巨摩遺跡・八尾南遺跡でも古墳が造営されている。周辺では、生駒西麓に心合寺山古墳が築造されている他、羽曳野丘陵では古市古墳群の造営が開始される。しかし、古墳時代後期前半になると長原古墳群では古墳の造営を停止しており、平野部ではこれ以降山賀遺跡・壹振B遺跡で中築に比定される古墳が確認されている程度である。生駒西麓部では、後期初頭に東高野街道ぞいに鎌塚古墳・郡川西塚古墳・郡川東塚古墳が、中葉には愛宕塚古墳が築造されている。さらにこの時期生駒西麓の山麓部では、横穴式石室を主体部とする古墳が増加する傾向で、特に平野部での古墳築造が減少する前葉末から後葉にかけては爆発的に造墓が進んだようだ山畠古墳群・高安古墳群・平尾山古墳群・平野大畠古墳群・生津横尾古墳群・太平寺古墳群・安堂古墳群・高井田横穴群・青谷古墳群・本堂古墳群・雁多尾畠古墳群が成立している。この時期の平野部の遺跡は、生駒西麓部における古墳增加の現象とは反比例して減少する傾向があったようで、特に中葉以降は集落が激減しており、移動を余儀なくされた大きな政治的変動を考えざるを得ない。7世紀に入ると古墳造営は平尾山古墳群・高安古墳群の一部で継続することが認められる以外は、高安山古墳群やイノムラキ古墳に代表されるように、立地や主体部の形状変化等の多様な様相を呈する終末期古墳の出現を見る。古墳の造営も終焉を迎えると古墳造営に奔走した氏族は、新たに寺院建立に力を注ぐようになる。八尾市域では渋川庵寺・西郡庵寺・龍華寺・弓削寺・心合寺庵寺・高麗寺・五条宮庵寺が建立造営され、柏原市域では早く船橋庵寺が建立されるほか、生駒西麓の扇状台地には南北に連なって「河内六人寺」と称される知識寺・山下寺・大里寺・三宅寺・家原寺・鳥坂寺・大和川の南には原山庵寺・片山庵寺・五十村庵寺・田辺庵寺・円明庵寺・河内国分寺・国分尼寺が建立されている。これらの寺院のほか、奈良時代の後期には八尾市八尾木付近に由義宮が設置されるなど、政治的にも重要な役割を果たした地域として認識されている。

飛鳥・奈良時代の集落は、太子堂遺跡・久宝寺遺跡・弓削遺跡・中田遺跡・小阪合遺跡・成莊寺遺跡・壹振A遺跡・長原遺跡・船橋遺跡で検出されている。平安時代に入ると平野部の地形は現在に近い景観を呈していたようである。当遺跡周辺では、特に中期以降の開発がさかんであったようで、条里区画に合致した集落が長原遺跡・木の本遺跡で確認されている。平安時

代後期から鎌倉時代にかけて、当遺跡付近は石清水八幡宮が管理する志紀庄園の一部であったようである。この時期に当遺跡で新たに集落が開発されるほか、八尾南遺跡・木の本遺跡・津堂遺跡で集落が営まれている。しかし、鎌倉時代後期以降は当遺跡付近では、顕著な遺構が検出されておらず、固定化する近世集落に重複した形で推移した可能性が考えられよう。江戸時代中期の宝永元年（1704）にはこの地域の一大画期である人和川の付け替えがあり、これ以降綿花の栽培が活発に実施され「河内木綿」が生みだされている。

- 註1 堀山彦太郎・市原光 「大阪平野の発達史—C<sup>14</sup>年代データからみた」『地質学論集』7 1972
- 註2 (財) 大阪市文化財協会 「長原遺跡発掘調査報告Ⅱ」—大阪市高速電気軌道第2号線延長工事に伴う発掘調査報告書— 1982
- 註3 (財) 大阪市文化財協会 「瓜破遺跡」—大阪市土木局施工の大阪市平野区瓜破6丁目側道整備新設工事に伴う遺跡発掘調査報告書— 1983
- 註4 八尾南遺跡調査会 「八尾南遺跡」—大阪市高速電気軌道第2号線建設事業に伴う発掘調査報告書— 1981
- 註5 深川耕作 「河内国府石器時代遺跡発掘報告」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第2冊 1918
- 註6 大阪府教育委員会 「昭和60年度はさみ山遺跡発掘調査概要」—羽曳野丘陵北縦上遺跡群の調査 1986.3
- 註7 大阪市立博物館・(財) 大阪市文化財協会 「桑津遺跡」「私たちの考古学発掘された大阪」: 財團法人大阪市文化財協会設立5周年記念 1984
- 註8 下村晴文 「神並遺跡出土の押型文土器」『紀要』(財) 東大阪市文化財協会 1985
- 註9 柏原市教育委員会 「柏原市埋蔵文化財発掘調査概報 1982年度」: 柏原市文化財報告1982—II 1983
- 註10 瓜生堂遺跡調査会 「瓜生堂遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」1980・1981
- 註11 東大阪市教育委員会 「馬場川遺跡調査概報Ⅱ」1975
- 註12 鳴手遺跡調査会 「鳴手遺跡」1971
- 註13 東大阪市教育委員会 「文化財要覧Ⅱ」1973
- 註14 東大阪市教育委員会 「日下遺跡発掘調査概要—第11・12次調査—」1985
- 註15 大阪府立花陽高等学校地歴部 「鬼塚遺跡」「河内古代遺跡の研究」1970
- 註16 大阪府教育委員会 「岡崎遺跡発掘調査概要—Ⅲ—」藤井寺市国府、森社、林、沢田、通明寺所蔵 1973
- 註17 平安学園考古クラブ 「船橋Ⅰ・Ⅱ」1958・1962
- 註18 (財) 大阪市文化財協会 「大阪市平野区長原遺跡発掘調査報告Ⅲ」—(仮称) 大阪市立第8義務学校建設に伴う発掘調査報告書— 1983
- 註19 大阪市文化財協会 「鬼虎川遺跡第7次発掘調査報告3」—遺物編— 1984
- 註20 (財) 大阪文化財センター 「山賀(その3)」近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書 1984
- 註21 (財) 大阪文化財センター 「美濃」近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書 1985
- 註22 (財) 大阪文化財センター 「鬼井」近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書 1983
- 註23 八尾市教育委員会 「昭和67年度における埋蔵文化財発掘調査」1983
- 註24 (財) 大阪文化財センター 「瓜生堂」近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調

- 査概要報告書 19
- 註25 大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 「巨摩・瓜生堂」近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書 1981
- 註26 (財)大阪文化財センター 「若江北」近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書 1983
- 註27 八尾市文化財調査研究会『八尾市埋蔵文化財発掘調査概報1980・1981年度』:(財)八尾市文化財調査研究報告2 1983
- 註28 前掲註27
- 註29 八尾市教育委員会『東弓削遺跡』1976
- 註30 (財)八尾市文化財調査研究会「弓削遺跡(第1次調査)」「昭和59年度事業概要報告」:(財)八尾市文化財調査研究会報告7 1985
- 註31 大阪府教育委員会「久宝寺道路南地区(その2)における発掘調査成果」「大阪府下埋蔵文化財担当者研究会(第12回)資料」1985
- 註32 古代を考える会「加美遺跡の検討」「古代を考える43」1986
- 註33 1980年11月～1981年1月にかけて大阪府教育委員会が発掘調査を実施した。
- 註34 大阪府教育委員会「川北遺跡発掘調査概要」IJ 1982
- 註35 藤井直正・都出比呂志「原始・古代の牧闘」東大阪考古学研究会 1967
- 註36 前掲註35
- 註37 小林行雄「大阪府枚岡市鶴田町西ノ辻遺跡! 地点の土器」「大阪府枚岡市鶴田町西ノ辻遺跡E・F・D・H地点の土器」「弥生土器集成」本編2 1958
- 註38 (財)八尾市文化財調査研究会「水越遺跡発掘調査概要報告」「八尾市埋蔵文化財発掘調査概要昭56・57年度」:(財)八尾市文化財調査研究会報告3 1983
- 註39 大阪市教育委員会・(財)大阪市文化財協会「大阪市立大学河海工学山水理実験場建替に伴う山之内遺跡発掘調査現地説明会資料」1986
- 註40 (財)八尾市文化財調査研究会「成法寺遺跡」1983
- 註41 (財)八尾市文化財調査研究会「小阪合遺跡(第3次調査)」「昭和58年度事業概要報告」:(財)八尾市文化財調査研究会報告5 1984
- 註42 八尾市教育委員会『中田遺跡』1975
- 註43 大阪府立花園高等学校地歴部「河内古代遺跡の研究」1970
- 註44 萩原昭次・北野保「東大阪市岩池山遺跡の調査」大阪府農林部 1971
- 註45 繩野裕彌「河内鷹ノ巣山遺跡」「考古学」第11巻 第3号 1940
- 註46 萩川芳則「第二章第三節5(6)山腹・山上の遺跡」「大阪府史」第一巻 1978
- 註47 大阪府文化財センター「友井東(その1)」近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書 1984
- 註48 広瀬雅信「當塙遺跡調査概報」「八尾市文化財紀要1」八尾市教育委員会 1984
- 註49 (財)八尾市文化財調査研究会「太子堂遺跡」「昭和58年度事業概要報告」:(財)八尾市文化財調査研究会報告5 1984

## 第3章 調査概要

### 第1節 調査方法と経過

3基の鉄塔構築予定地に合わせて3箇所の調査区を設定し、南から第1調査区（5号鉄塔— $14.3 \times 17.8\text{m}$ ）・第2調査区（4号鉄塔— $11.4 \times 14.4\text{m}$ ）・第3調査区（2号鉄塔— $9.44 \times 12.4\text{m}$ ）と付称し、順次調査を進めた。掘削に際してはいわゆるオープンカット工法で行い、八尾市教育委員会の指示に基づき、現地表下 $1.1\sim1.2\text{m}$ （標高 $10.1\text{m}$ ）前後に存在する平安時代末期～鎌倉時代の遺物包含層上面までの各層を機械掘削によって除去し、以下の厚さ $0.15\sim0.3\text{m}$ を測る遺物包含層は人力によって慎重に掘削し、遺構・遺物の検出に努めた。その結果、各調査区で、平安時代末期～鎌倉時代の遺構・遺物を検出した。なお、内業整理および報告書作成業務は現地調査終了後に着手し、昭和62年3月31日をもって完了した。

調査地の地区割については、既設の60号鉄塔脚の南東角を基準点とし、その点から磁北に則して南へ $90\text{m}$ ・北へ $50\text{m}$ 延長させて南北の基準線とした。東西については、基準点から東西に $60\text{m}$ ずつ延長させ、調査対象地全域を覆う東西 $120\text{m}$ ・南北 $140\text{m}$ の範囲を大地区として捉えた。さらに、この大地区の中を $10\text{m}$ 四方の小地区に区画した。各地区を区画する $10\text{m}$ ごとのラインは、東西は北端を起点として数字（1～14）で表わし、南北は西端を起点としてアルファベット（A～L）で表わした。各地区の表示については、一区画の南東隅で交差する2線を用い、A1～L14地区とした。第1調査区はC9・C10・D8・D9・D10・E8・E9・E10地区に、第2調査区はE8・F7・F8・F9・G7・G8地区に、第3調査区はK1・K2・K3・L1・L2・L3地区にあたる。

### 第2節 基本層序

各調査区内の土層堆積はほぼ一定しており、その中から各調査区で普遍的に認められた7層を選び、基本層序とした。

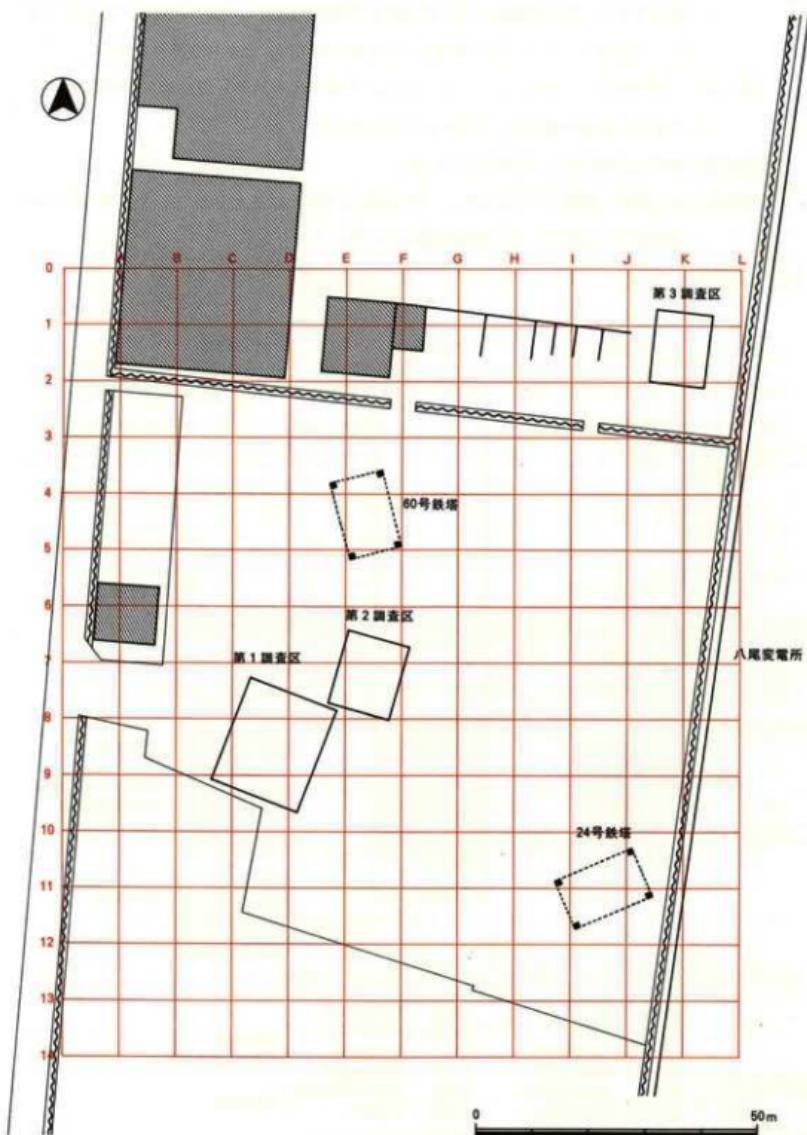
第0層：盛土 層厚 $0.6\sim0.9\text{m}$  現地表面の標高は $11.2\sim11.3\text{m}$ を測る。

第I層：①耕土 層厚 $0.15\sim0.2\text{m}$

第II層：緑灰色～茶褐色砂質土 層厚 $0.1\sim0.5\text{m}$  第1調査区南西部では茶灰色、第1調査区北東部および第2調査区では緑灰色、第3調査区では上部が淡茶褐色・下部が茶褐色を呈する。

第III層：緑褐色粘質土 層厚 $0\sim0.2\text{m}$  第3調査区南西部のみで確認した土層である。

第IV層：淡褐色粘質土・淡灰色砂質土 層厚 $0\sim0.4\text{m}$  平安時代末期～鎌倉時代の遺物包



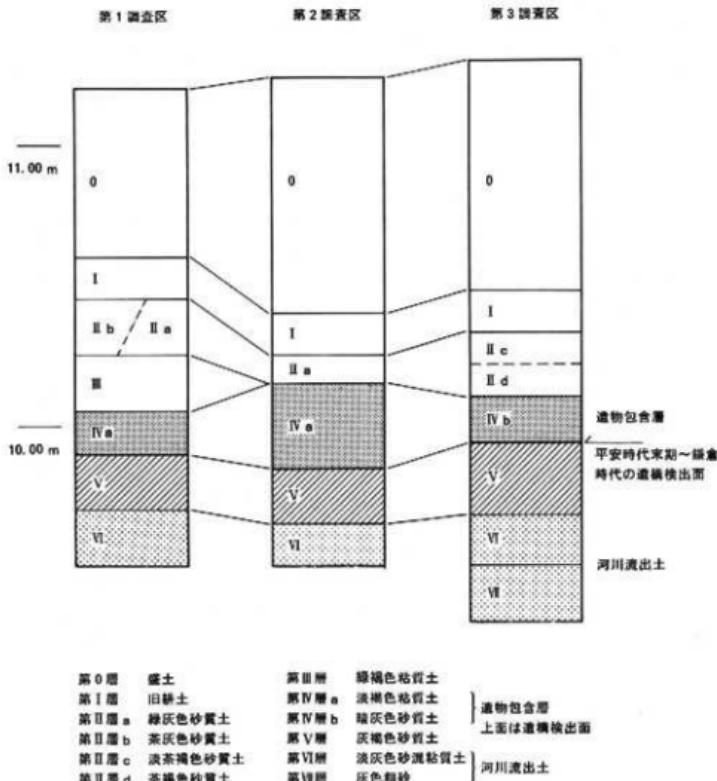
第2図 調査区設定図および地区割図

含層である。第1調査区・第2調査区では淡褐色粘質土、第3調査区では淡灰色砂質土が堆積している。第1調査区・第3調査区では、とぎれる部分が認められる。

第V層：灰褐色砂質土 層厚0.2～0.3m 上面が平安時代末期から鎌倉時代の遺構検出面である。上面の標高は、9.5～10.0mを測る。

第VI層：淡灰色砂混粘土 層厚0.3～0.4m

第VII層：灰色粗砂 層厚0～0.3m以上 河川流出土で湧水は多大である。第3調査区のみで確認した土層で、井戸の湧水層にあたる。



第3図 基本層序模式図

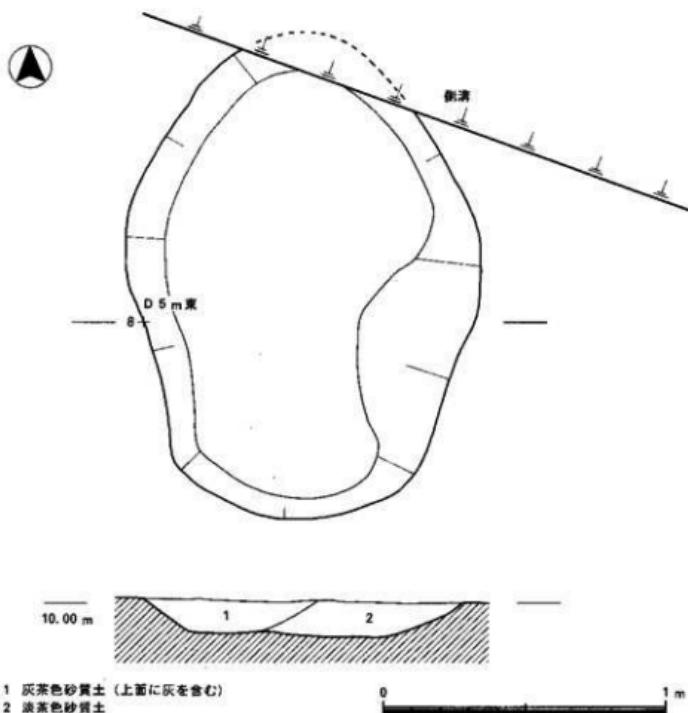
## 第3節 検出遺構・出土遺物

第1調査区では、近代から現代に至る井戸・搅乱等によって遺構面の削平されている部分があったが、第V層灰褐色砂質土上面で、平安時代末期の土坑1基を検出することができた。当調査地の遺構検出面は現地表下1.2m・標高10.0m前後である。

第2調査区でも、現地表下1.3m・標高9.8~10.0mに存在する第V層灰褐色砂質土上面で、鎌倉時代の井戸1基の他に南北に平行して伸びる5条の溝を検出した。

さらに第3調査区でも、現地表下1.3m・標高9.8~10.0mに存在する第V層灰褐色砂質土上面で、鎌倉時代の井戸2基・土坑6基・小穴5個が検出され、それに伴って多量の遺物が出土している。

以下、各調査区ごとに、検出遺構および出土遺物についての概要を記す。なお、出土遺物の法量・形態・調整等の詳細については、第4節出土遺物観察表を参照されたい。



第4図 SK-1 平断面図

#### ・第1調査区

調査対象地の南西部に位置する調査区で、東西14.3m・南北17.8mの規模を測る。調査面積は254.54a、調査期間は昭和60年8月19日から8月28日までである。当調査区では前述のように遺構面の削平されている部分があったが、第V層灰褐色砂質土上面で、平安時代末期の土坑1基（SK-1）を検出した。

#### 土坑

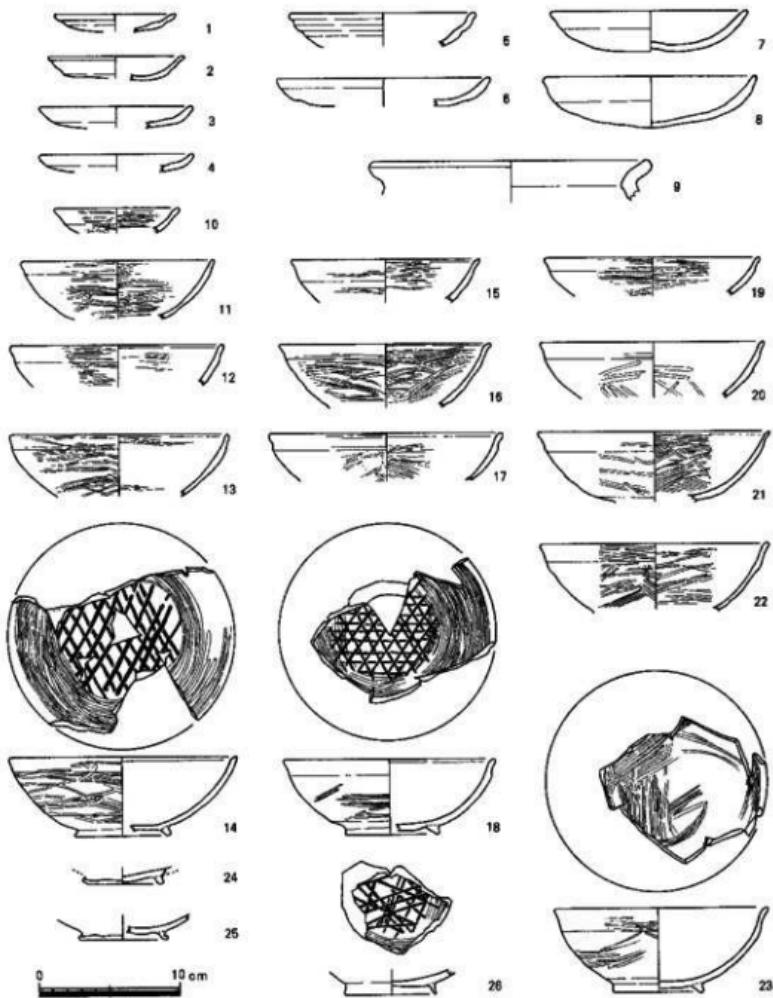
##### SK-1

調査区北東隅近くで検出した土坑で、上面の形状は南北に長い楕円形を呈し、検出部の長径1.62m・短径1.25mを測る。土坑の北端は調査区外へ至るが、調査区北壁ではその掘形を確認していないことから、側溝付近が北端であると考えられる。断面の形状は浅い皿形を呈し、深さ0.13mを測り、坑底は平坦である。内部には、灰茶色砂質土と淡茶色砂質土が堆積している。このうち、灰茶色砂質土の上面には灰が含まれており、この層の内部から12世紀初頭に比定される瓦器碗・小皿、土師器小皿・中皿・羽釜等が比較的まとまって出土している。

出土遺物の内訳は、土師器小皿19・土師器中皿5・土師器羽釜2・瓦器碗33・瓦器小皿1である。そのうち図示したものは、第5図1～26の26点である。

土師器小皿には、口縁部を2段ヨコナデして端部をつまみ出すもの（1・2）と、浅めの器形で口縁端部を丸くおさめるもの（3・4）の2種がある。このうち（2）にのみ燈心油痕が認められる。土師器中皿には、小皿同様2段ヨコナデによって口縁端部をつまみ出すもの（5）、浅めで端部を丸くおさめるもの（6）、深みがあり直線的な口縁部の（7・8）がある。このうち（7・8）の両面には煤が付着しており、器表面の損傷が著しい。土師器羽釜（9）は比較的小型で、口縁部は体部から「く」の字形に屈曲するもので、12世紀代におさまるものである。

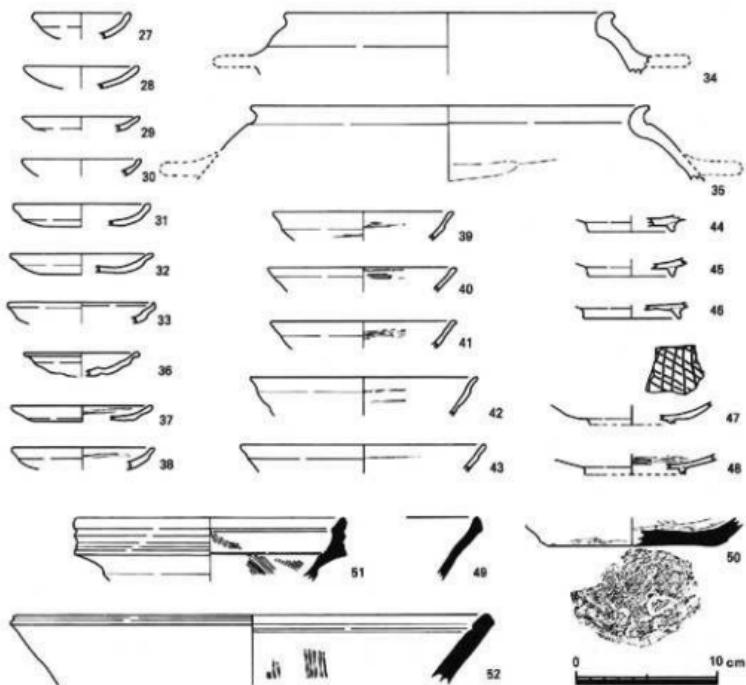
瓦器小皿は（10）1点のみが出土した。内外の口縁部には、比較的密なヘラミガキが施されている。瓦器碗（11～26）は、概ね丸みのある深い体部を持つ。口縁部の形態には、体部から器肉を減じて尖りぎみに終るもの（11・12）、体部から丸いカーブで連続するもの（13・14）、体部との境に稜を持ってわずかに外反するもの（15～23）がある。高台には、断面逆台形のもの（14・18・24・25）と逆三角形のもの（23・26）があるが、（26）を除いて比較的重厚でしっかりした作りで、丁寧なヨコナデで仕上げられている。遺存状態の良好なものを観察する限りでは、外面のヘラミガキはやや乱雑に施されてはいるものの、何方向かに分割されて施されている部分が認められる。内面体部のヘラミガキは、一様に密なものを横方向あるいは円弧状に施している。見込みのヘラミガキには、格子状のもの（14）、格子の上に平行線あるいはジグザグ線を重ねるもの（18・26）、乱方向ではあるが、体部のヘラミガキとは分化して施すもの（23）がある。



第5図 SK-1出土遺物実測図

## 包含層出土遺物

出土遺物の内訳は、土師器小皿21・土師器中皿5・土師器羽釜20・須恵器鉢4・瓦器碗73・瓦器小皿9・瓦質土器羽釜2・備前焼すり鉢1・丹波焼すり鉢1であるが、いずれも小破片で良好な遺存状態を示すものは少い。そのうち図示したものは、第6図27~52の26点である。

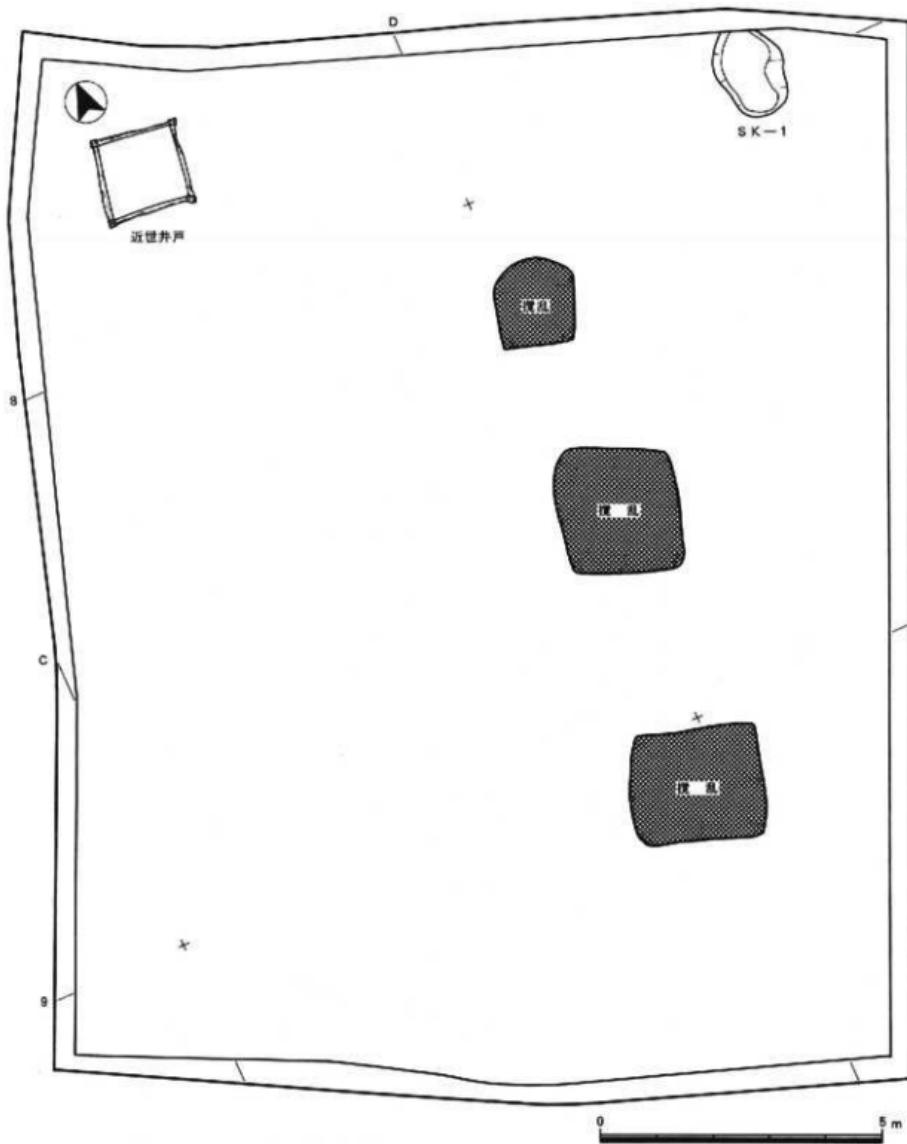


第6図 第1調査区包含層出土遺物実測図

土師器小皿には、半球形を呈するもの（27・28）と浅い器形のもの（29～33）がある。口縁部は丸く終る（27・28・31）、尖って終る（29）、外へつまみ出される（32）、面を持つ（33）がある。土師器羽釜（34・35）の口縁部は、体部から丸く屈曲して直立ぎみとなる。

瓦器小皿にはやや深い（36）と浅めの（37・38）がある。（36）は外面に指おさえの窪みを残し、ヘラミガキはまったく認められない。（37・38）の肉面にはヘラミガキがわずかに認められる。瓦器碗（39～48）は外面にヘラミガキが施されないもので、内面のヘラミガキは粗い。高台は断面逆三角形で垂直に付き、やや重厚なもの（44～46）と低平なもの（47・48）がある。見込みのヘラミガキは（47）が斜格子、（48）は体部から続く乱方向である。

その他に、須恵器ねり鉢（49・50）、備前焼すり鉢（51）、丹波焼すり鉢（52）がある。須恵器ねり鉢（49）の口縁部にはいわゆる重ね焼痕があり、（50）の底部には回転糸切り痕が認められる。備前焼すり鉢（51）のすり目は著しく傾いており、丹波焼すり鉢（52）とともに、16世紀代に含まれるものであろう。



第7図 第1調査区平面図

#### ・第2調査区

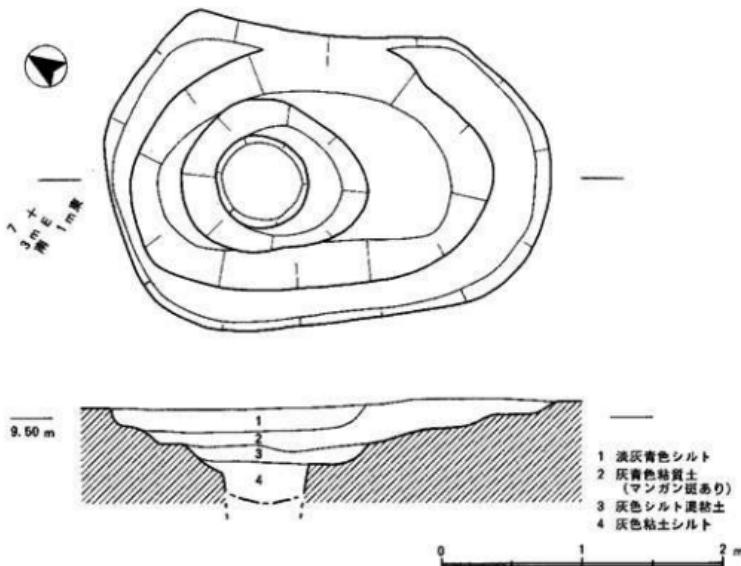
第1調査区の北東に隣接する調査区で、東西11.5m・南北14.5mの規模を測る。調査面積は166.75m<sup>2</sup>、調査期間は昭和60年8月26日から9月3日までである。調査の結果、第V層灰褐色砂質土上面で、鎌倉時代の井戸1基(SE-1)、溝5条(SD-1~SD-5)を検出した。

#### 井戸

##### SE-1

調査区南西部で検出した。掘形上面の形状は、北西—南東に長い椭円形を呈し、長径3.2m・短径2.1mの規模を測る。断面の形状はすり鉢形を呈し、複数の段を有する。南東部の肩は、北西部に比してなだらかに下っている。井戸側は掘形の北西寄りに置かれていたものと考えられるが、井戸側の規模・構造等は不明である。内部には、上方から、淡灰青色シルト・灰青色粘質土・灰色シルト混粘土・灰色シルトが堆積するが、湧水が著しく、検出面より0.7m程度で掘削を中止した。

出土遺物の内訳は、土師器皿7・土師器羽釜2・瓦器碗12・瓦質土器すり鉢1と少量で、保存状態も良くない。そのうち図示したものは、第9図53~55の3点である。瓦器碗(53~55)は13世紀代のもので、ヘラミガキは外面には施されず、内面にのみ数条認められる程度である。



第8図 SE-1平面図

## 溝

## SD-1

調査区東端を南北に伸びる溝で、幅0.2~0.5m・深さ0.05~0.1mを測る。内部堆積土は灰褐色~灰緑褐色粘質土で、上面に黄灰色シルトが部分的に堆積する。内部からは、瓦器碗(57)の他、土師器・須恵器の小破片が各1点ずつ出土している。

## SD-2

SD-1の西側を1.0m前後の間隔で平行して伸びる。規模・内部堆積土はSD-1同様である。内部からは、瓦器碗(56)の他、土師器の小破片が2点出土している。

## SD-3

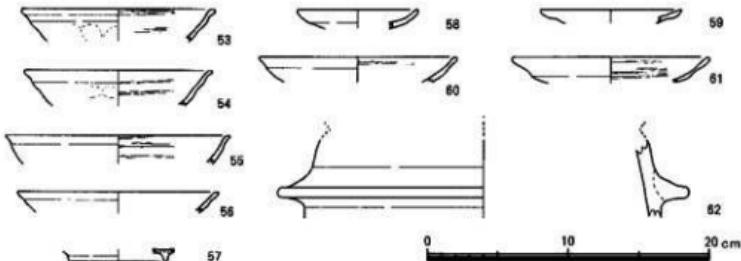
SD-2の西側を0.8~1.3mの間隔で平行して伸びる。規模・内部堆積土はSD-1・SD-2同様である。

## SD-4

SD-3の西側を1.3m前後の間隔で平行して伸びる。規模・内部堆積土はSD-1~SD-3と同様であるが、北端から10m付近で西へ屈曲し、幅0.4~0.6mに広がる。

## SD-5

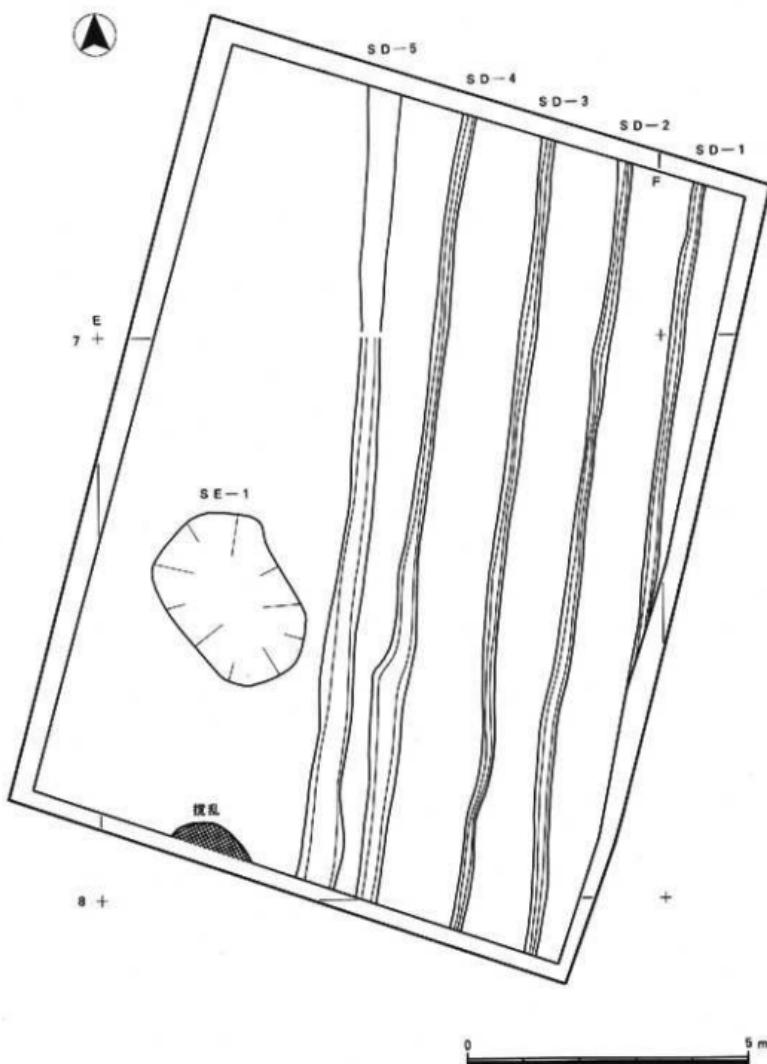
SD-4の西側を0.3~0.9mの間隔で平行して伸びる。幅0.4~0.8m・深さ0.4~0.6mを測る。内部堆積土は青灰色砂混粘土で、溝底には砂粒を多く含む。内部からは、土師器・瓦器・瓦質土器の小破片がわずかに出土している。



第9図 SE-1 (53~55)・SD-1 (57)・SD-2 (56)・第2調査区包含層 (58~62) 出土遺物実測図

## 包含層出土遺物

出土遺物の内訳は、土師器皿6・土師器羽釜5・瓦器碗6・瓦質土器ねり鉢1とごく少量である。そのうち図示したものは、第9図58~62の5点で、いずれも磨耗をうけた小破片である。瓦器碗(60・61)は、ともに外面のヘラミガキは認められず、内面にのみ横方向あるいは渦巻状に粗雑なものが施されている。



第10図 第2調査区平面図

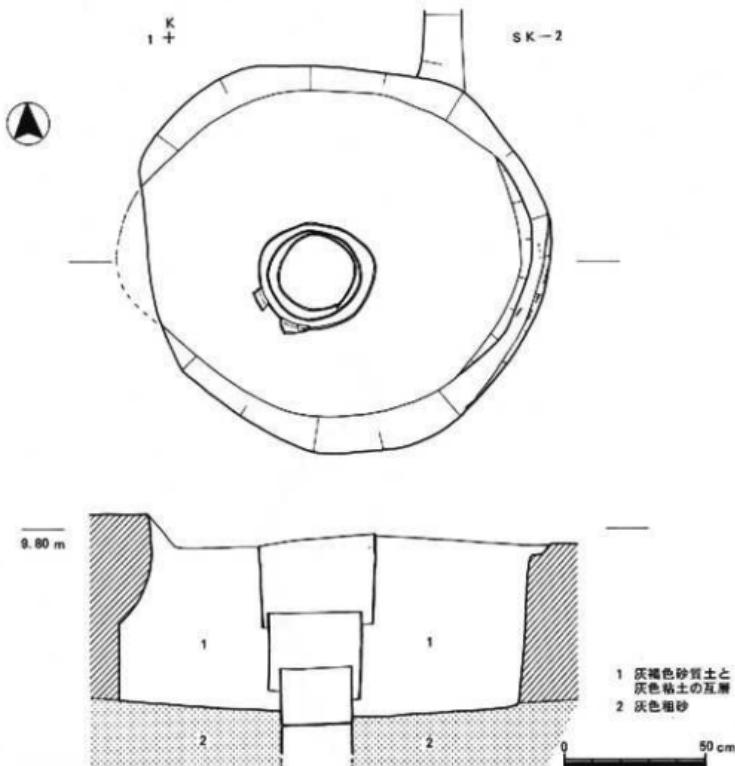
## ・第3調査区

調査対象地の北東隅に位置する調査区で、東西9.5m・南北12.5mの規模を測る。調査面積は118.75m<sup>2</sup>、調査期間は昭和60年8月29日から9月10日までである。調査の結果、第V層灰褐色砂質土上面で、鎌倉時代の井戸2基（SE-1・SE-2）、土坑6基（SK-2～SK-7）、小穴5個（SP-1～SP-5）を検出した。

## 井戸

## SE-2

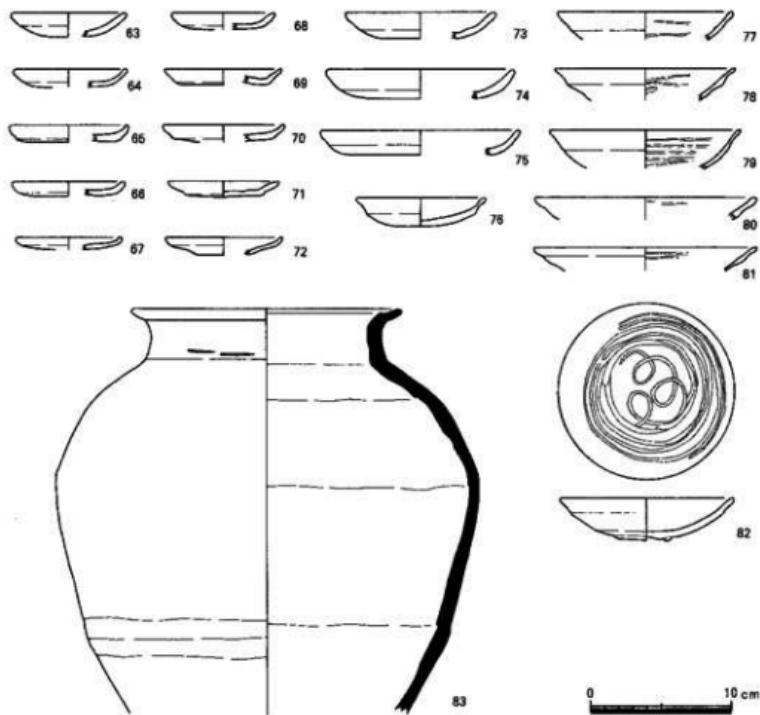
調査区北部中央で検出した。土坑SK-2の西端を削平して構築されている。掘形上面の形状は円形を呈し、径1.4m前後を測る。肩は直線的に下り、深さ0.6mで湧水層である灰色粗



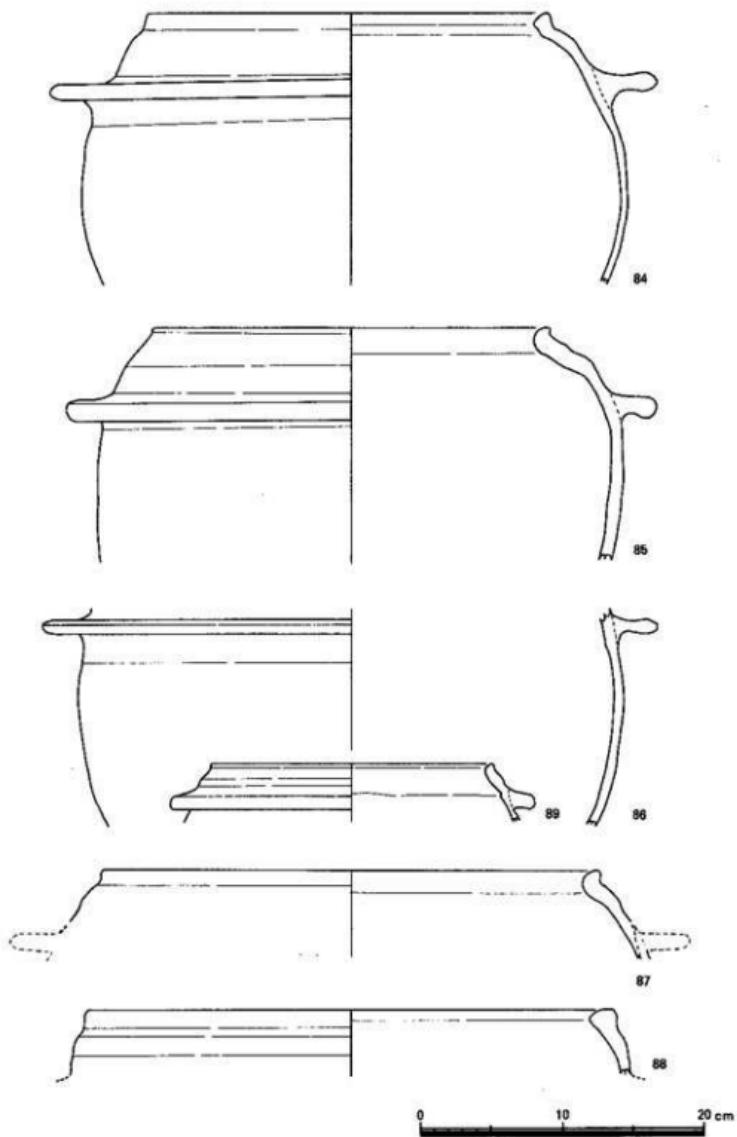
第11図 SE-2 平断面図

砂に達する。掘形の中央部には、曲物を使用した井戸側が位置している。曲物は径0.25~0.4m・高さ0.3m前後を測るもので、僅の小さいものから順に4段積み上げられている。掘形と井戸側の間は、灰褐色砂質土と灰色粘土の互層で充填されている。なお、井戸検出時には、曲物の上部に伏せた形態の土師器羽釜(84)の破片があったことや、井戸内部からも全周する土師器羽釜(85)や口縁部を打ち欠いた土師器羽釜(86)が出土していることから、曲物のさらにもう1つ上に羽釜を何段が積み上げて上部施設としていたものと考えられる。井戸内部には、上方から暗灰色~褐色粘土(0.3m)・灰色砂混粘質土(0.3m)の2層が堆積しており、ここから13世紀以降の土器類が比較的まとまった状態で出土している。

出土遺物の内訳は、土師器小皿27・土師器中皿10・土師器羽釜7・瓦器碗22・瓦器小皿1・瓦質土器2・陶器壺1である。そのうち図示したものは、第12・13図63~89の27点である。



第12図 SE-2 出土遺物実測図1



第13回 SE-2 出土遺物実測図2

土師器小皿（63～72）のうち（63）のみ深めで丸みのある器形であるが、他はすべて浅く底部が広い平坦面を持つ。なかでも（67）は粘土円板の端をわずかに巻き込んで口縁部とするもので、器高0.85cmときわめて浅い。（70）とともに外底底部にはヘラケズリの痕跡を残す。また、（71・72）は、強いヨコナデによって底部と口縁部の境に顕著な段を持つ。（64）の内面には煤が付着していることから、燈明皿として使用されていたものと推定される。土師器中皿（73～75）はすべて小破片である。いずれも浅い器形で、（76）の底部は広い平坦面となるようである。

瓦器小皿（76）は丸みのある底部から稜を持って外反する口縁部に至るもので、内面には渦巻状のヘラミガキが認められる。瓦器碗（77～82）は外間にヘラミガキが施されなくなる段階のものである。（82）は退化した粘土紐状の高台・見込みに施された連結輪状のヘラミガキ等の特徴から11世紀代に下り得る資料と考えられ、（77～82）より新しい要素を持つ。

常滑焼の壺と考えられる（83）はわずかに内傾する頸部から上外方へ内湾ぎみに伸びる口縁部に至るもので、11世紀代の常滑焼壺の特徴を備えている。

土師器羽釜（84～88）のうち、（84）は前述のように最上段の曲物のさらに上部に倒立していたもので、井戸の上部施設として使用されていたものである。（85・86）も（84）とともに全周していることから上部施設用に用いられたものと考えられるが、井戸内部に落ち込んだ状態で検出したため、明確ではない。すべて鉄以下に煤が付着している。（87・88）は小破片のため、井戸使用時に落ち込んだものであろう。これらの口縁部は体部から短く立ち上がり、玉縁状を呈するもので、13世紀代の所産である。

瓦質土器羽釜（89）は短く厚い鉄が下がりぎみに付くもので、口縁端部から鉄上面にかけて3段のヨコナデで仕上げられている。

### SE-3

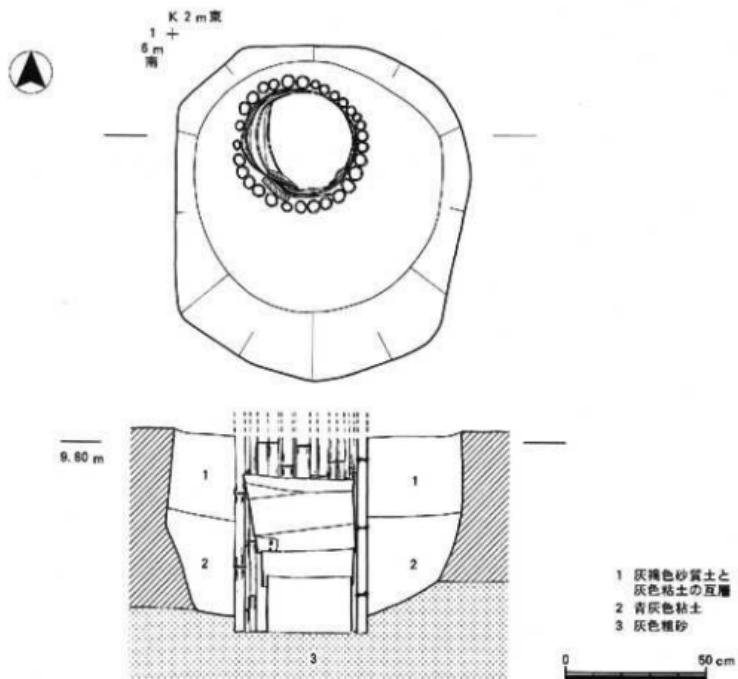
調査区東部中央で検出した。掘形上面の形状は楕円形を呈し、東西1.0m、南北1.2mを測る。断面の形状は逆台形を呈し、深さ0.65mで湧水層である灰色粗砂に達する。井戸側は曲物を使用しており、掘形北部中央に位置している。曲物は径0.12～0.25m・高さ0.13～0.25mを測るもので、径の小さいものから順に3段積み上げている。最上段の曲物は、検出面より0.15m程度低いため、さらに上方にも曲物・羽釜等を積み上げていた可能性がある。掘形と井戸側の間は、上半は灰褐色砂質土と灰色粘土の互層、下半は青灰色粘土で充填されている。一方、井戸内部には、上方から灰色粘土（0.3m）・灰色シルト（0.1～0.15m）の2層が堆積しており、井戸底には川原石が敷きつめられ、水の浄化を扼している。

この井戸側に使用されている曲物は破損が著しく、補修のあとが認められる。南西部では曲物の底板を割った板材（最大幅12cm・厚さ1cm・長さ25cm）を、1段めと2段めの曲物の隙間に

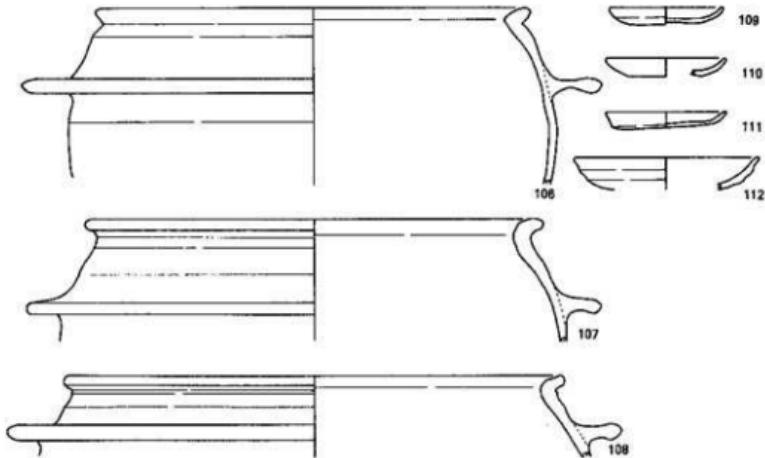
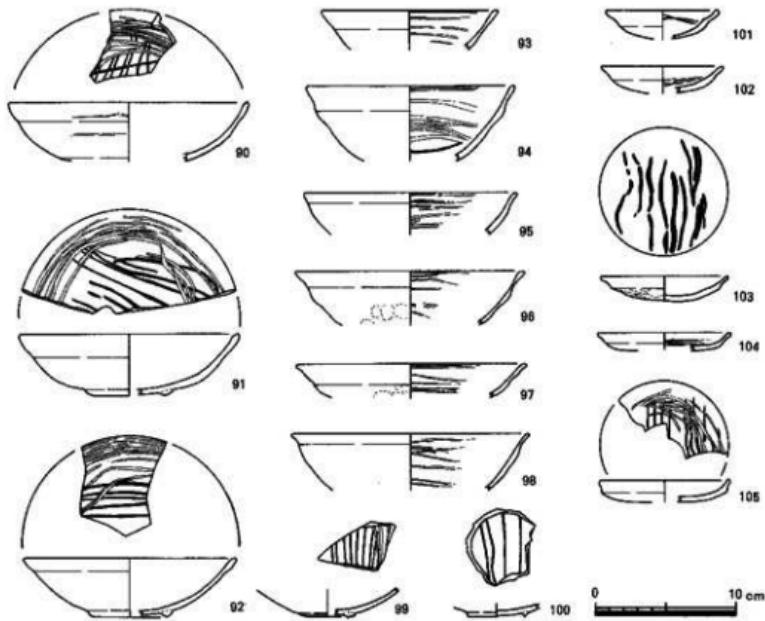
に内側から差し込んでいる。同位置の曲物の外側にも、納穴のある板材（幅12cm・厚さ3cm・長さ60cm）を井戸底に達するまで押し込んで、曲物のゆるみを抑えている。さらに破損が進んだためか、曲物の周囲には竹（径3~5cm・長さ70cm）を隙間なく井戸底にまで打ち込んで、より強固な補修を行っている。この曲物の外側を一周する竹の輪郭は、井戸掘形検出時にすでに認められていたことから、かなり上方から打ち込まれていたものと推定される。

出土遺物の内訳は、土師器小皿12・土師器中皿4・土師器羽釜14・瓦器碗55・瓦器小皿7である。そのうち図示したものは、第15図90~112の23点である。

瓦器碗（90~100）は外面に指おさえの痕みをわずかに残し、軽いナデによる調整で仕上げている。（90）にのみ外面のヘラミガキがわずかに認められる。内面のヘラミガキは（90~92・94）が比較的密、他はやや粗略化されている。見込みのヘラミガキは、（90）が斜格子状に施されている可能性があるが、（91・92・94・99・100）は平行線状に施されている。高台はすべて粗略なつくりで低く、とくに（100）はきわめて低平である。瓦器小皿（101~105）には、



第14図 SE-3 平断面図



第15図 SE-3出土遺物実測図

底部がやや深く丸みをもつもの（101～103）と、底部が広い平坦面で浅い器形を呈するもの（104・105）がある。いずれも瓦器碗同様外面にヘラミガキは認められず、ナデによる調整で仕上げられているが、（103）のみ外面底部に指おさえの圧痕を頗著に残す。内面のヘラミガキは、体部から口縁部にかけて円弧状に施すもの（101・102）、全体に粗雑な平行線状に施すもの（103）、口縁部にのみ密な横方向に施すもの（104）、口縁部にやや粗雑な横方向・見込みに平行線状に施すもの（105）があり、変化に富んでいる。

土師器羽釜（106～108）は内傾する頸部から「く」の字形に屈曲する短い口縁部に至るもので、図示していない口縁部のみの小破片もすべてこの形態である。（106）は鉄以下に煤付着、（107）は鉄以下および内面全体に煤・炭化物が厚く付着しているが、（108）には煤の付着は認められない。土師器小皿（109～111）はいずれも浅い器形を呈するが、（109・110）は底部から丸く立ち上がり、（111）は平坦な底部から直線的に立ち上がって口縁部に至る。（109）のみに燈心油痕が認められる。土師器中皿（112）は小型でやや深みのある器形を呈するもので、口縁部はゆるい2段ヨコナデによって仕上げられており、端部は器肉を減じて尖りぎみに終る。

#### 土坑

##### SK-2

調査区北東部で検出した。北部・東部は調査区外に至るために全容は不明であるが、検出部で東西3.6m・南北5.5mの範囲に広がる不定形の土坑である。北西部には、井戸SE-2がSK-2を切って構築されている。また、北東隅には径約2m程度で弧状に廻る粗砂の堆積が認められたが、SK-2との関係等の詳細は不明である。SK-2の深さは0.1～0.2mと浅く、坑底はほぼ平坦である。内部にはおもに淡灰黒色粘土が堆積するが、灰茶色砂質土が部分的に上層に堆積しており、前者から12世紀後半～13世紀に至る種々の遺物が多量に出土している。なお、SK-2の南西隅では、正立した状態の土師器羽釜（285）を主として、瓦器碗（198・199・214）と瓦器小皿（273）からなる土器集積が検出されたことから、SK-2を厨房構とも考えられようが、竈や炭・灰の堆積を検出していないため、遺構の性格は判然としない。

出土遺物の内訳は、土師器小皿206・土師器中皿69・土師器羽釜33・瓦器碗305・瓦器小皿27・須恵器甕2・須恵器小型壺1・瓦質土器羽釜21・瓦質土器甕1・白磁碗1・陶器器種不明1である。このうち図示したものは、第17～21図113～288の176点である。

土師器小皿（113～172）には、概ね以下の3種類の形態がある。（113～150）の形態は、底部から丸く屈曲して口縁部に至るもので、最も多くの量を占める。これらの中には、やや深いもの（113・124・132・135・136）や、きわめて浅いもの（116・117・126・127・139）などがある。口縁端部の形態には、器肉を減じて尖りぎみに終るもの（113～127）、丸く終るもの（128～137）、内に巻き込むように丸く終るもの（138～150）がある。（151～157）の形態は、ヨコナデによっ

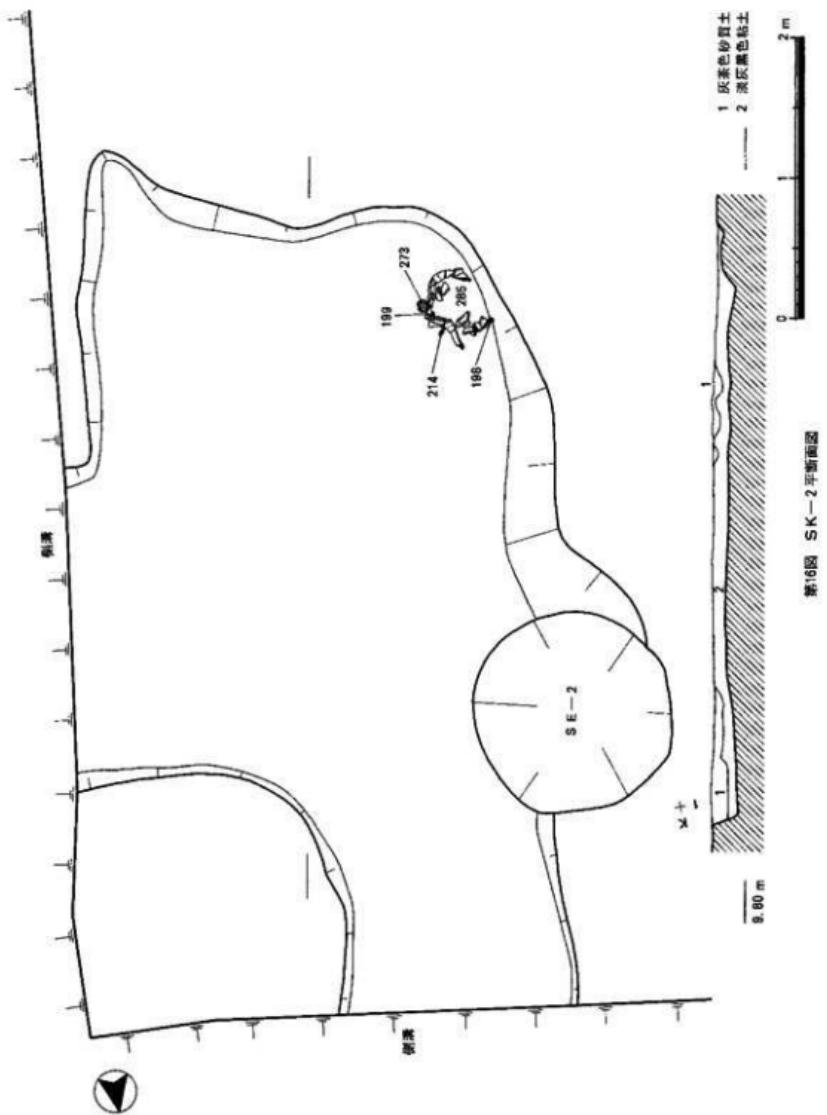
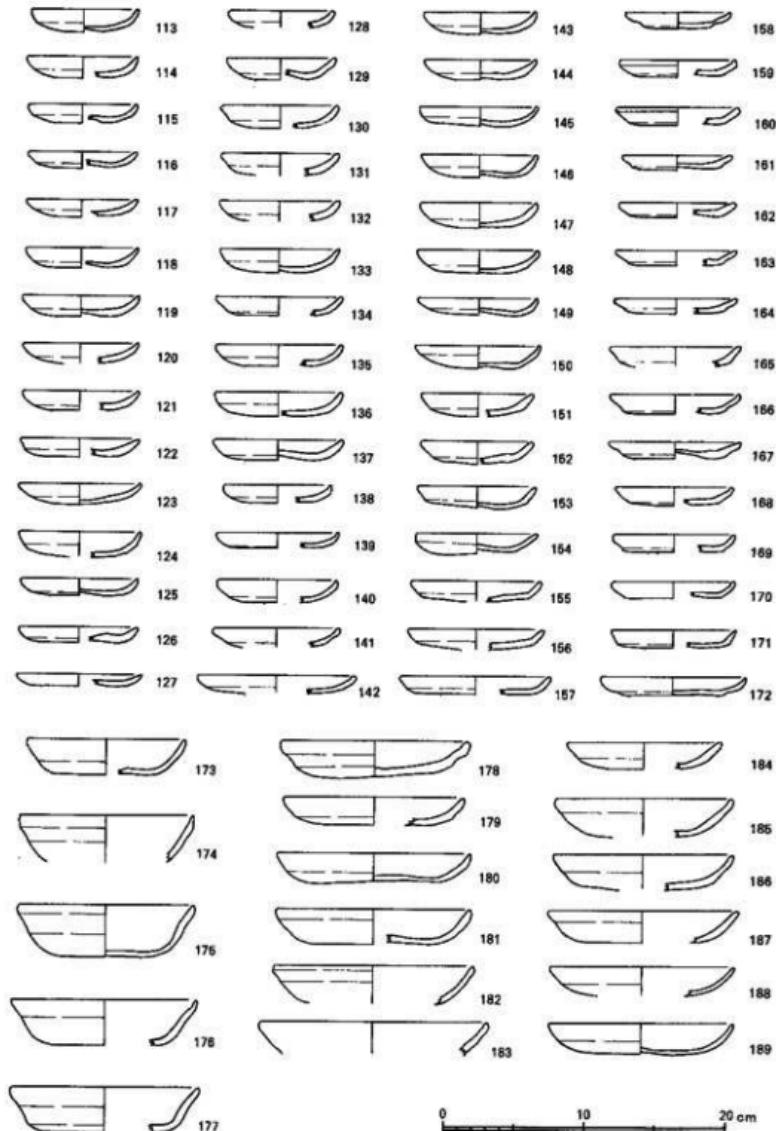


圖16 圖 SK-2 平剖面圖

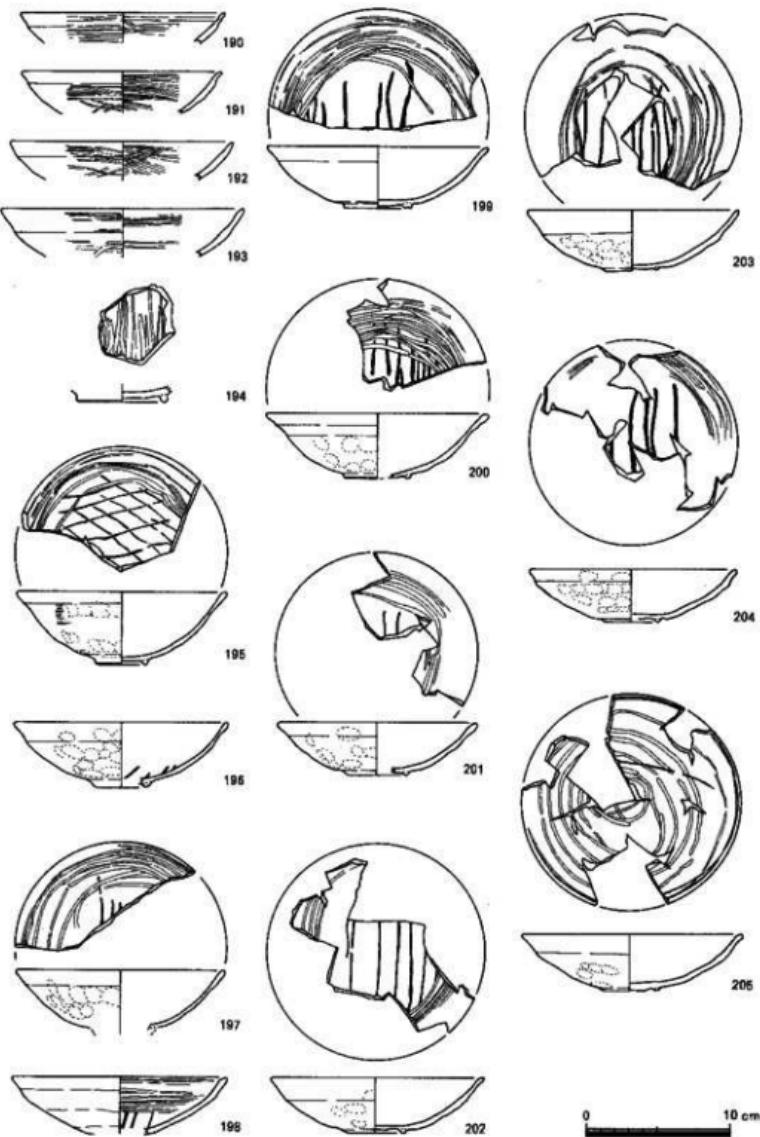
て底部と口縁部との境に鈍い稜を持つもので、底部・口縁部とも一様に直線的に伸びる。(158~172)の形態は、強いヨコナデによって底部と口縁部の境の稜が脱ぐるもの、あるいは段を呈するものである。これらの口縁端部の形態には、つまみ上げて面を持つもの(158~160)、外上方へつまみ出されるもの(161~165)、内上方へつまみ上げられるもの(166・167)、内に巻き込むように終るもの(168~170)、器肉を減じて尖るもの(171・172)などがあり、変化に富む。なお、口径10cm以上を測る大型のもの(142・157・172)が各形態に認められる。また、燈心油痕は6点(145・150・153・154・156・165)に認められ、図示したうちの1割を占める。土師器中皿(173~189)の形態には、深いもの(173~177)と浅いもの(178~189)がある。前者は平坦な底部から丸く屈曲した後直線的に伸びる長い口縁部に至るもので、前代の环の系譜を引くものであろう。(174・175)の口縁端部は著しくつまみ上げられ、丸みのある面となる。後者には、器肉が厚く粗雑なもの(178~183)と、薄手で丁寧なもの(184~189)がある。(181)の外面底部・(187)の内面・(188)の外面口縁部には煤が付着している。

瓦器碗(190~259)のうち(190~194)は、外面ヘラミガキ・丁寧に貼り付けられた高台・装飾を意識しない見込みのヘラミガキ等が認められ、他の瓦器碗に比して古い要素を持つものである。他はすべて外面にヘラミガキを施さず、指おさえの窪みを残し、内面のヘラミガキも一様に粗い。口縁部の形態には、先太となって丸く終るもの(195~202他)が多くを占めるが、外反ぎとなるもの(203~205他)もある。高台は(195~196・199~251)が断面台形を呈する比較的丁寧なつくりであるが、他は形骸化が進んでおり、(205)の底部は高台下端より下がっており、高台の役目を果たしていない。見込みのヘラミガキには、斜格子状(195・253)、ジグザグ状(251~252)が若干見られるが、ほとんどが平行線状に施されている。(205)は内面底部から口縁部に向かって渦巻状のヘラミガキが施されるもので、1点のみを確認していたにすぎないが、小破片の中にも渦巻状ヘラミガキを有するものは含まれているものと考えられる。底部から体部下半のみを残す(251)は、内面ヘラミガキの前にハケ状工具によるナデ調整が行われている。瓦器小皿(260~274)には浅めの器形が多く見られるが、なかでも(263~266)は平坦で広い底部を持ち、きわめて浅い。また、(273)は丸みのある深い底部を持つ。外面にヘラミガキが施されているものは(272)のみで、(266~268)の外面底部には指おさえの窪みが顕著に残る。内面のヘラミガキは、(260~263)が見込みに格子状、(262)が口縁部に見込みから続く平行線状と密な横方向、(266)が見込みにジグザグ状、(272)の口縁部にやや粗い横方向、(267~271・273~274)には数条が認められる程度である。これらの瓦器碗・瓦器小皿のうち、碗(198~199・214)・小皿(273)は、前述のように土師器羽釜(285)とまとまって出土したものである。

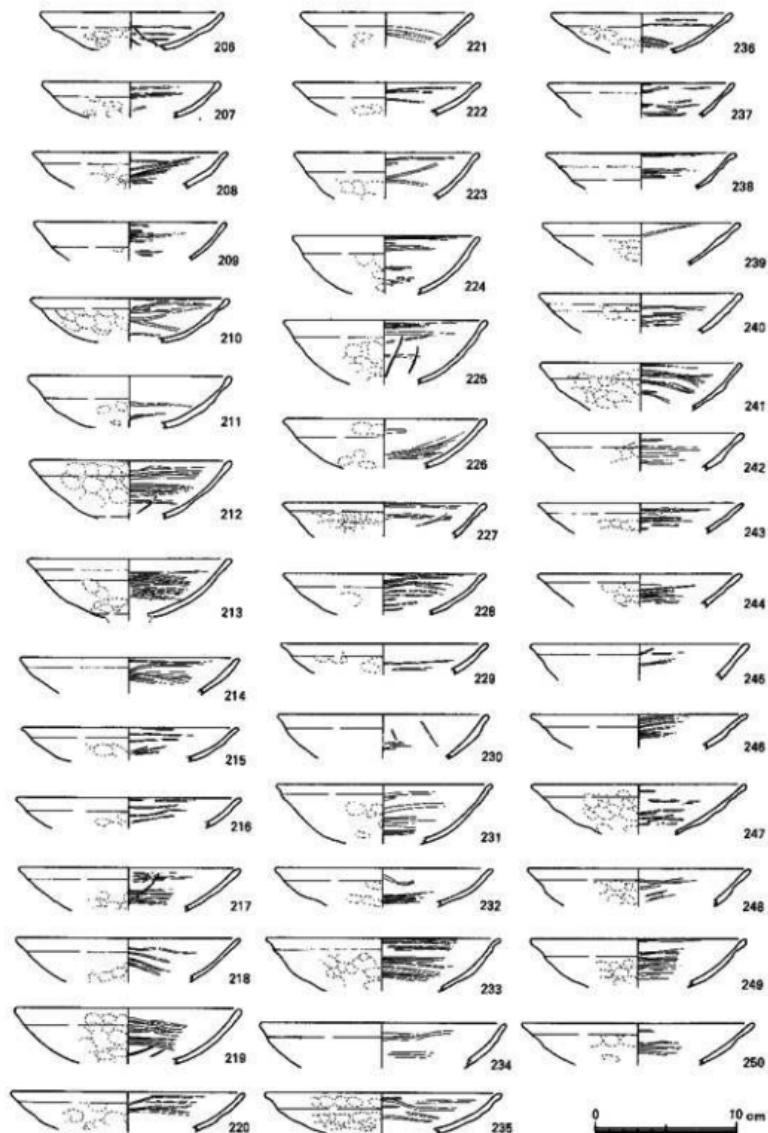
須恵器壺(275・276)は大型のもので、(275)は口縁端部をつまみ上げて凹面となり、



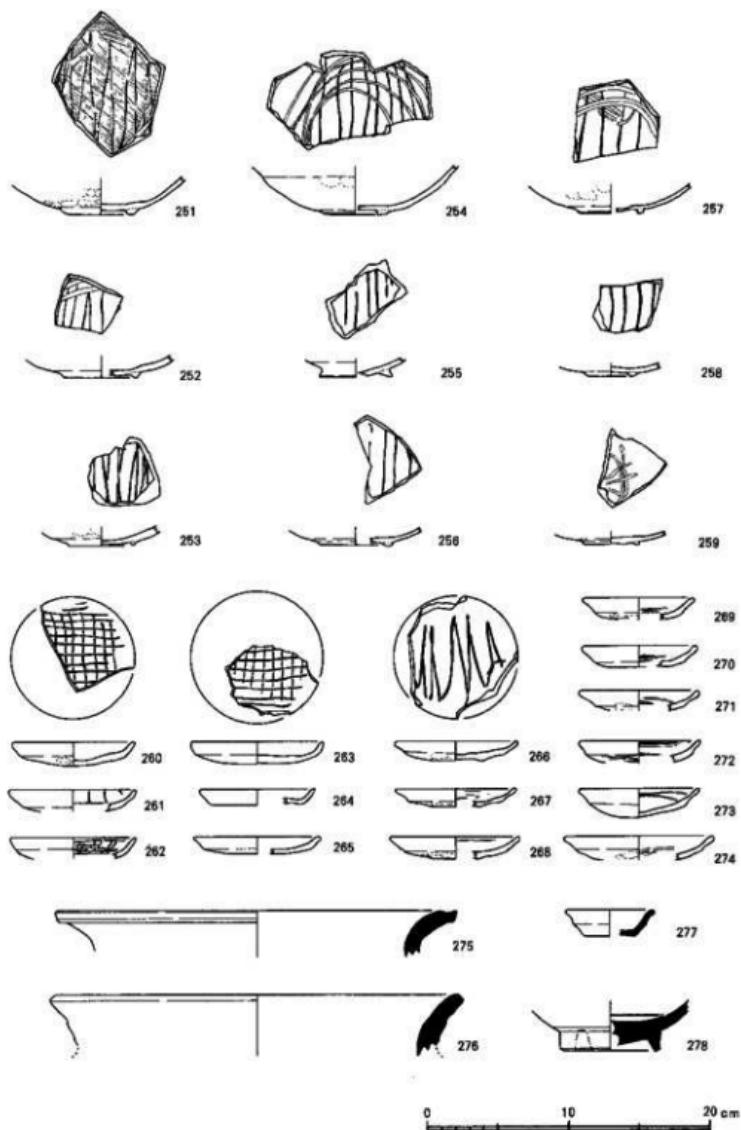
第17圖 SK—2出土遺物實測圖1



第18圖 SK-2出土遺物実測図2

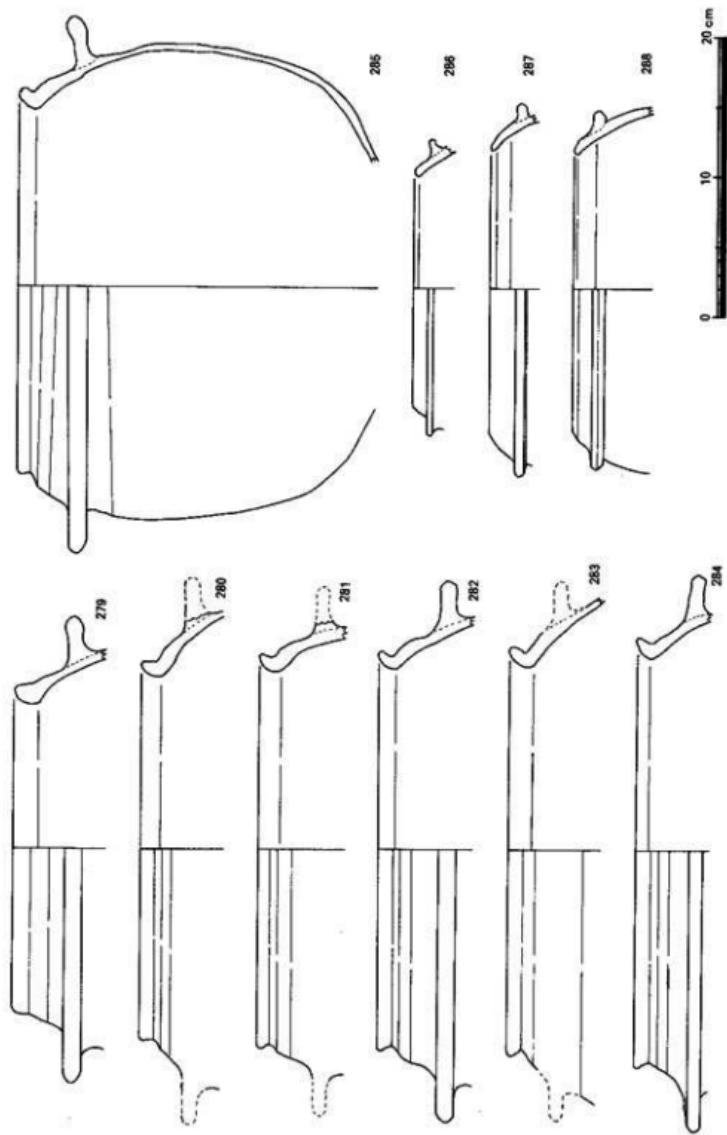


第19圖 SK—2出土遺物實測圖3



第20図 SK-2出土遺物実測図4

圖5 SK—2出土物質測量圖



(276) は外傾する面を持つ。(275) の内面には灰かぶりが認められる。須恵器小型壺 (277) は底部に回転糸切り痕を残すもので、外面口縁部には自然輪がかかる。

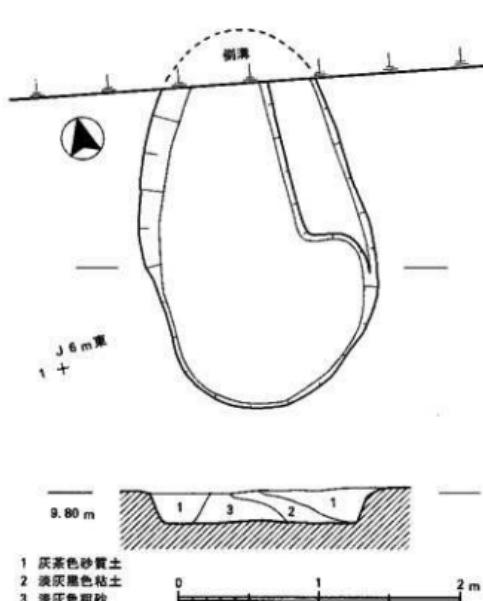
白磁碗 (278) は高台内の割り込みが浅く、見込みの沈線は幅広で、浅く鈍い。釉は不透明で薄く、高台脇から高台内にかけて釉なだれが認められる。磁胎はやや粗く、黒色粒を多く含む。

土師器羽釜 (279~285) の口縁部の形態には、内傾する頸部から「く」の字形に屈曲して口縁部が長めに伸びるもの (283・284) と、直立するもの (279) が認められるが、他は短い口縁部で両者の中間的な形態を呈している。(285) の鉢以下は、ヘラケズリの後ナデ仕上げている。すべて鉢以下には煤が厚く付着している。

瓦質土器羽釜 (286~288) の形態はすべて内湾する口頸部に短い鉢が付くもので、端部の形態には内傾する面を持つ (286・288) と丸く終る (287) がある。いずれも鉢以下には煤が付着する。

### SK-3

調査区北西隅近くで検出した土坑で、上面の形状は南北に長い楕円形を呈し、検出部の長径 2.3m・短径 1.6m を測る。土坑の北端は調査区外へ至るが、調査区北壁ではその掘形を確認していないことから、側溝付近が北端であると考えられる。断面の形状は概ね台形を呈するが、

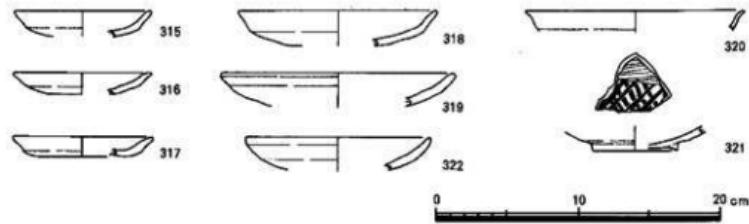
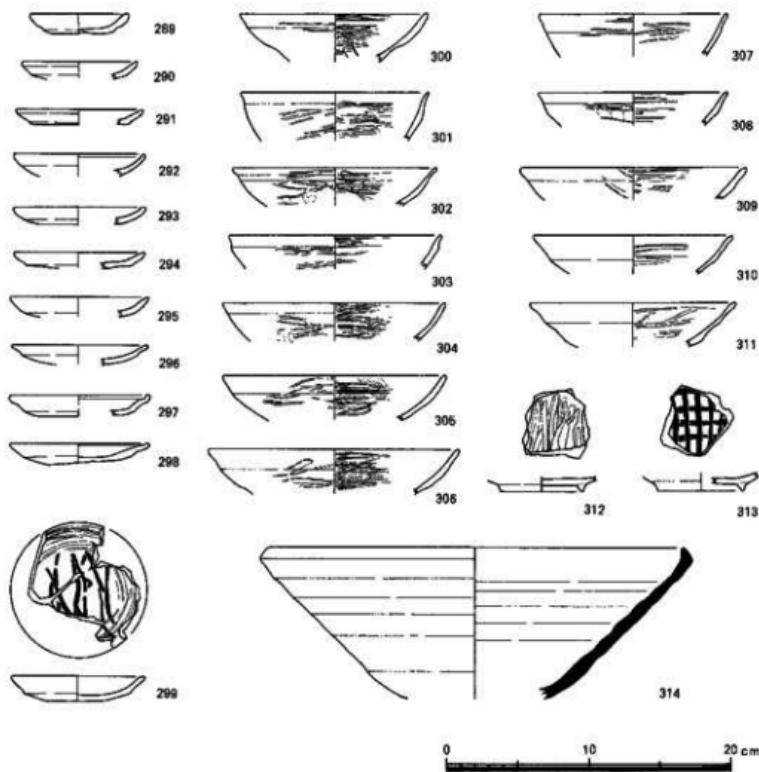


第22図 SK-3 平断面図

北東部の肩は2段の掻形を有する。深さは0.25mを測り、坑底は平坦である。内部堆積土は、灰茶色砂質土・淡灰黑色粘土・淡灰色粗砂の3層からなる。遺物は、主に淡灰色黑色粘土から比較的多量に出土している。

出土遺物の内訳は、土師器小皿24・土師器中皿11・土師器羽釜5・須恵器ねり鉢1・瓦器碗59・瓦器小皿1で、他に常滑焼甕と考えられる体部の破片が3片認められた。このうち図示したものは、第23図289~314の26点である。

土師器小皿 (289~298)  
のうち、(289~291・294)



第23図 SK-3 (289~314)・SK-4 (315~321)・SK-5 (322) 出土遺物実測図

は浅い器形を呈するもので、底部と口縁部の境に鋭い稜が廻り、(290・291)の口縁端部は面を持つ。他の形態は浅い半球形を呈しており、丸く終るもの(293・295・296)、丸みのある面を持つもの(292)、巻き込むように丸く終るもの(298)がある。(297)は体部から2段に屈曲した後口縁部を巻き込んで終るもので、古い要素を残している。

瓦器小皿(299)は丸みのある浅い底部から外反する口縁部に至るもので、内面口縁部に密な横方向のヘラミガキ、見込みに粗雑なジグザグ状のヘラミガキを施す。瓦器碗(300~313)には、外面にヘラミガキを施して内面に密なヘラミガキを施すもの(300・303・304)、外面にヘラミガキを施すが内面のヘラミガキは粗いもの(301・302・305~308)、外面ヘラミガキを施さないもの(309~311)がある。このうち(300・302)には、見込みから続く平行線状のヘラミガキが認められる。また、(305・306)の内面には、ヘラミガキを施す前にハケ状工具によるナデ調整がなされている。(311)の内面ヘラミガキは渦巻状の可能性がある。(312・313)の高台は比較的丁寧にナデられ、見込みのヘラミガキは、(312)がジグザグ状、(313)が格子状である。

須恵器ねり鉢(314)は、底部から丸く立ち上がり、斜上方へ伸びる体部から内傾する口縁部に至るもので、端部は尖り、外傾する面を持つ。

#### SK-4

調査区南東部、井戸SE-3の南部で検出した。上面の形状は台形に近く、東辺0.4m・他の3辺は0.9m前後を測る。断面の形状は浅い皿形で、深さ0.2~0.25mを測る。内部堆積土は上層の灰茶色砂質土と下層の淡灰黒色粘土からなり、両層から土師器・瓦器等の細片が少量出土している。

出土遺物の内訳は、土師器小皿4・土師器中皿4・羽釜1・瓦器碗2で、そのうち図示したものは、第23図315~321の7点である。

土師器小皿(315~317)・土師器中皿(318・319)・瓦器碗(320・321)はいずれも小破片で遺存状態も良好ではない。瓦器碗(321)は、見込みに格子状のヘラミガキ、内面体部に密な横方向のヘラミガキが施されているもので、高台は低いものの比較的しっかりした作りで、丁寧なナデによって貼り付けられている。

#### SK-5

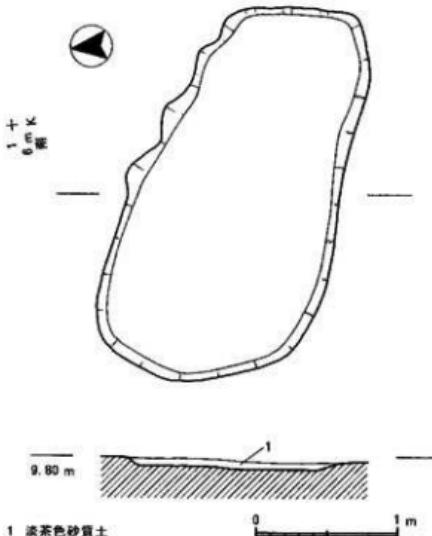
調査区のほぼ中央部で検出した上坑である。上面の形状は東西に長い楕円形を呈しており、長径1.2m・短径1.1mを測る。断面の形状は浅い皿形で、深さは0.15mを測る。内部堆積土は、上層の灰茶色砂質土と下層の淡灰黒色粘土からなり、両層から遺物がごくわずかに出土した程度である。

出土遺物の内訳は、土師器中皿2・瓦器碗1で、そのうち図示したものは、第23図322の土師器中皿1点のみである。

### SK-6

調査区南東部で検出した土坑で、上坑SK-4の西に位置する。上面の形状は東西に長い楕円形を呈し、長径2.8m・短径1.4mを測る。断面の形状はきわめて浅い皿形を呈し、深さは0.06mを測る。内部埴土は灰茶色砂質土のみで、内部から土師器・須恵器・瓦器等と小破片が比較的多量に出土している。

出土遺物の内訳は、土師器小皿25・土師器中皿14・須恵器壺1・須恵器ねり鉢1・瓦器碗31・瓦器小皿1で、そのうち図示したもの



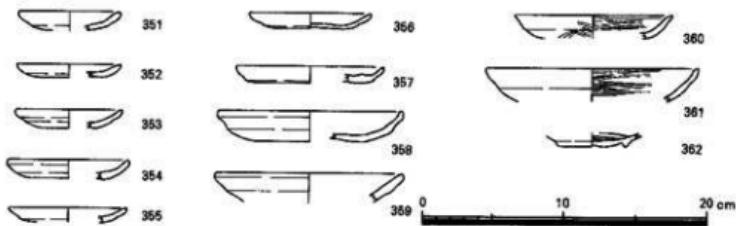
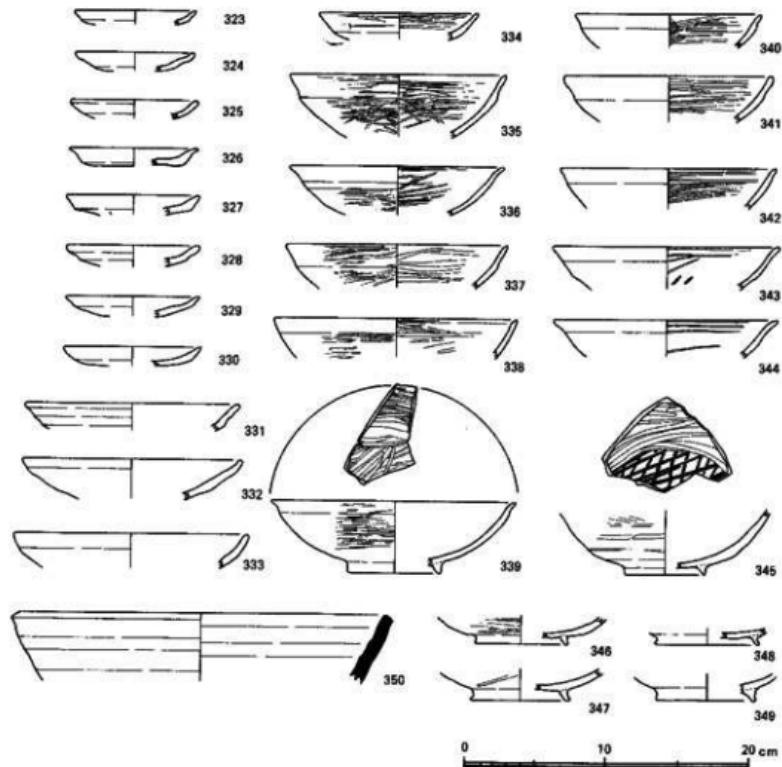
第24図 SK-6 平断面図

は第25図323～350の28点である。土師器小皿(323～330)は、いずれも浅い器形を呈するもので、口縁部には強いヨコナデが施されており、底部と口縁部との境には一様に稜が一周する。口縁端部の形態には、尖って終るもの(323・329・330)、巻き込むようにつまみ上げて終るもの(324・328)、外傾する面を持つもの(325)、外へつまみ出されるもの(329・330)がみられる。土師器中皿(331～333)のうち、(331)は浅い器形を呈し、口縁部には2段のヨコナデが施されるもので、口縁端部は外につまみ出されて終る。(332・333)は深い器形を呈するもので、ともに口縁部は体部から直立ぎみとなり、口縁端部の形態は(332)が丸みのある面を持ち、(333)は丸く終る。

瓦器小皿(334)は、口縁端部内面に凹線状の段を有するもので、ヘラミガキは外面には施されず、内面口縁部にのみ粗い横方向のものが施されている。瓦器碗(335～349)はその調整から、外面にヘラミガキを施すもの(335～339・345)と、ヘラミガキを施さないもの(340～344)に分かれる。前者の内面のヘラミガキは密に施されており、見込みのヘラミガキには体部と分化して乱方向に施すもの(339)と格子状に施すもの(345)がある。高台は断面逆三角形を呈しており、(339・349)は比較的重厚な作り、(346～348)はやや薄手、(345)は小型で低いが、総じて丁寧な作りである。

須恵器ねり鉢(350)は、外上方へ直線的に伸びる体部からわずかに外反する口縁部に至るもので、端部は外傾する面を持つ。

II 老原遺跡



第25図 SK-6 (323~350)・SK-7 (351~362) 出土遺物実測図

## SK-7

調査区の南内隅近くで検出した土坑である。南部は調査区外に至るため、全容は不明であるが、検出部の上面の形状は径1.6m程度の半円形を呈する。断面の形状は逆台形を呈し、深さ0.15~0.25mを測る。内部堆積土は黒灰色粘土1層で、上面および坑底には、灰が薄く堆積している。内部からは、土師器・瓦器等の小破片が多く出土している。

出土遺物の内訳は、土師器小皿13・土師器中皿13・瓦器碗6・瓦器小皿1で、そのうち図示したものは、第25図351~362の2点である。

土師器小皿(351~357)は浅い器形を呈するもので、(351・353・355~357)は強いヨコナデによって底部と口縁部の境に稜を持つ。口縁端部の形態には、丸く終るもの(351・352・357)、つまり上げぎみに終るもの(353・355・356)、外傾する面を持つもの(354)がある。このうち(354)の外面部には煤が付着していることから、燈明皿として使用されていた可能性が考えられる。また、(357)は口径10cmを超える大型のものである。土師器中皿(358・359)のうち(358)は、強いヨコナデによって口縁部が直立ぎみとなるもので、(359)は直線的に伸びる口縁部のみが遺存するものである。ともに口縁端部には外傾する面を持つ。

瓦器小皿(360)の外面のヘラミガキは何方向かに分割されて施されているよう、内面には密なヘラミガキが横方向に施されている。瓦器碗(361・362)には外面のヘラミガキは認められない。内面のヘラミガキは、(361)には比較的密なものが横方向に施され、(362)には渦巻状に施されている。(362)の高台は断面逆三角形で低い。

## 小穴

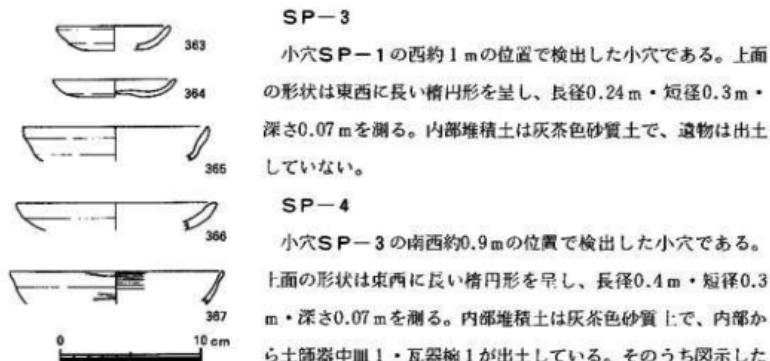
調査区南部、土坑SK-6の南側で、小穴5個(SP-1~SP-5)を検出した。これらの小穴は、まとまった位置で検出されたが、掘立柱建物を構成する柱穴とは考えがたく、性格は不明である。

## SP-1

土坑SK-6のすぐ南で検出した小穴である。上面の形状は南北に長い楕円形を呈し、長径0.31m・短径0.2m・深さ0.05mを測る。内部堆積土は灰茶色砂質土で、層中から土師器中皿の底部片が1片出土したのみである。

## SP-2

小穴SP-1の南約1mの位置で検出した小穴である。上面の形状は東西に長い楕円形を呈し、長径0.39m・短径0.26m・深さ0.11mを測る。内部堆積土は灰茶色砂質土1層で、内部から土師器小皿5・土師器中皿2・瓦器碗2が出土している。そのうち図示したものは、第26図363~365の3点である。土師器小皿(364)の外面口縁部には煤が付着していることから、燈明皿として使用されていたものと推定される。



第26図 SP-2・4・5 出土遺物実測図

**SP-3**

小穴SP-1の西約1mの位置で検出した小穴である。上面の形状は東西に長い楕円形を呈し、長径0.24m・短径0.3m・深さ0.07mを測る。内部堆積土は灰茶色砂質土で、遺物は出土していない。

**SP-4**

小穴SP-3の南西約0.9mの位置で検出した小穴である。上面の形状は東西に長い楕円形を呈し、長径0.4m・短径0.3m・深さ0.07mを測る。内部堆積土は灰茶色砂質土で、内部から土師器中皿1・瓦器碗1が出土している。そのうち図示したものは、第26図366の土師器中皿のみである。

**SP-5**

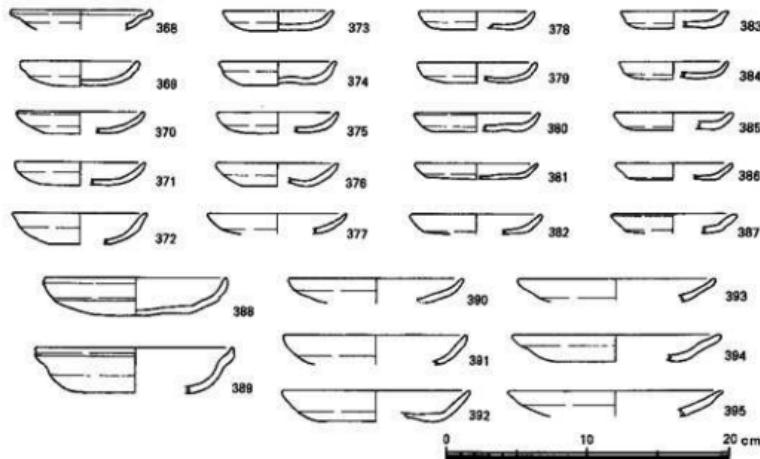
小穴SP-4のさらに南西約0.8mの位置で検出した小穴である。上面の形状は円形に近く、径0.35m前後・深さ0.05mを測る。内部堆積土は灰茶色砂質土で、内部から瓦器碗1の他、土師器皿・土師器羽釜の体部片が若干出土している。そのうち図示したものは、第26図367の瓦器碗のみである。

**包含層出土遺物**

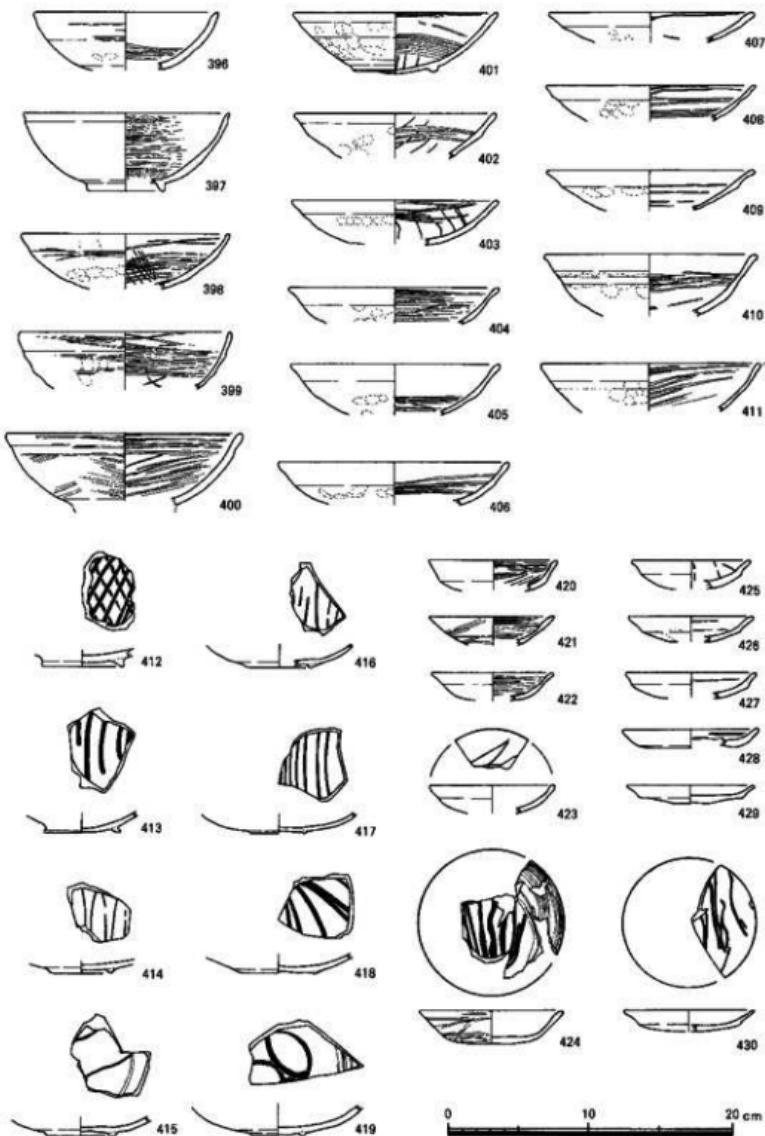
第4層暗灰色砂質土から、土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器・陶器・磁器等がコンテナ箱に2箱分出土しているが、小破片のものが多い。出土遺物の内訳は、土師器小皿183・土師器中皿36・土師器盤2・土師器羽釜43・須恵器ねり鉢5・瓦器碗340・瓦器小皿28・瓦質土器壺1・瓦質土器羽釜11・白磁碗2・白磁合子1である。これらの遺物はその特徴からみて、概ね12世紀～13世紀に比定されるものである。そのうち図示したものは、第27図～第29図368～446の79点である。

土師器小皿(368～387)のうち、(388)の口縁部は2段に屈曲した後端部を巻き込んで終るもので、古い要素を持つ。他の小皿の形態には、丸みのある器形を呈するもの(369～377)と、平坦で広い底部を持つ浅い器形のもの(378～387)がある。内面底部の調整にハケ状工具を用いるもの(369・371・372)があり、その方向は、(369・372)が円周方向、(371)は一方向である。これらの小皿のうち、燈心油痕を残すものは(385)のみであるが、(370・371・374)の外面口縁部には煤の付着が認められる。土師器中皿(388～392)のうち、(388)は底部にヘラケズリによる成形が行われているもので、きわめて強いヨコナデによって、底部と口縁部の境には鋸い稜が一周している。(389)はやや深い器形を呈し、口縁端部は丸みのある面となる。(390～395)は浅い器形を呈し、口縁端部は一様につまみ上げられ、尖って終る。

瓦器碗（396～411）には、外面にヘラミガキを施すもの（396～400）と、施さないもの（401～411）がある。前者は丸みのある深い器形を呈するのに対し、後者は直線的な浅い器形を呈する。（397）の内面のヘラミガキは、体部と見込みとを分化して密に施されている。高台は断面U字形を呈し、丁寧な作りである。（398・399）の見込みには、格子状のヘラミガキが施されているものと考えられる。（401～403）の見込みには粗い平行線状のヘラミガキが施され、（402・403）の見込みのヘラミガキは口縁部近くにまで及んでいる。（401）の高台は断面方形のしっかりした作りであるが、外面底部が高台下端より突出している。（409）の内面のヘラミガキは、渦巻状に施されている可能性がある。高台は付近のみが遺存する（412～419）のうち、（412・413）は比較的丁寧な作りであるが、他はきわめて低平で、細い粘土紐を軽くなでつけたもの（416・417・418）などがあり、いびつなものが多い。見込みのヘラミガキには、格子状（412）、平行線状（413・415～417）、ジグザグ状（414）、渦巻状（418）、連結輪状（419）がある。瓦器小皿（420～430）には、丸みのある底部を持つ深めの器形のもの（420～427）と、平坦な底部を持つ浅い器形のもの（428～430）がある。いずれにも、底部と口縁部との境に稜を持つもの（425～427・429・430）と持たないもの（420～424・428）がある。これらのうち、外面にヘラミガキが施されるものは（421・424）の2点である。内面口縁部付近のヘラミガキはすべて横方向に施されているが、（420・422）が密（421・422・428）か粗、（426・427）には2～3条が認められる程度である。見込みのヘラミガキには、ジグザグ状（423）、平行線状（424・425・430）がある。

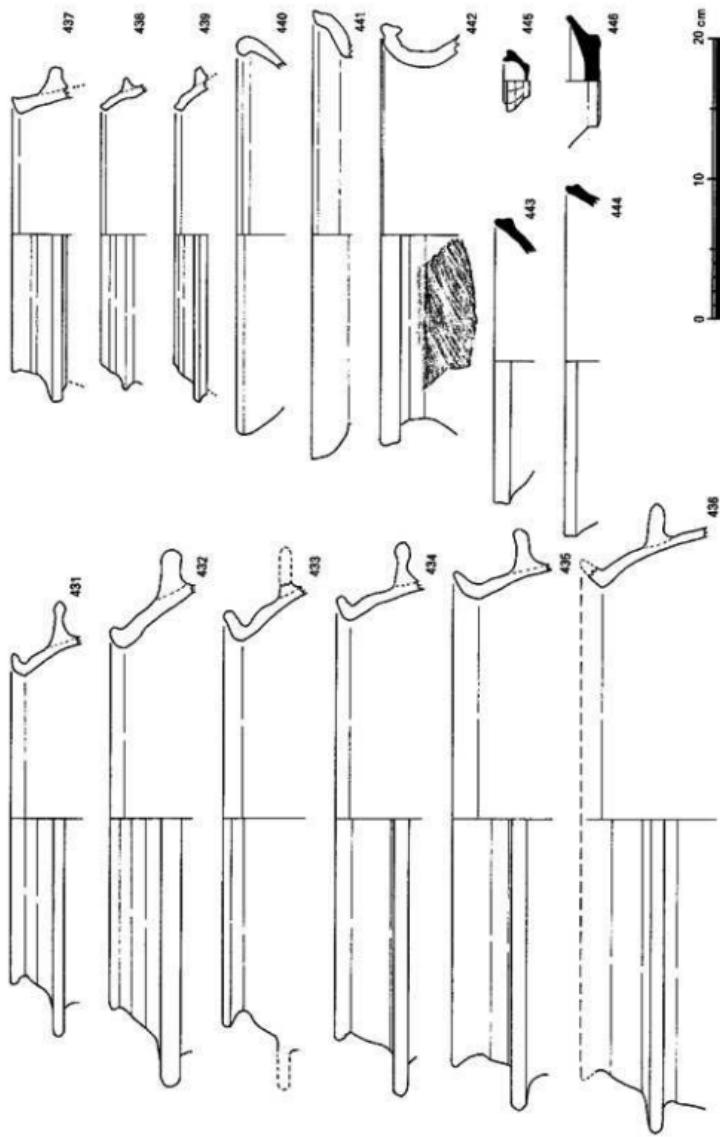


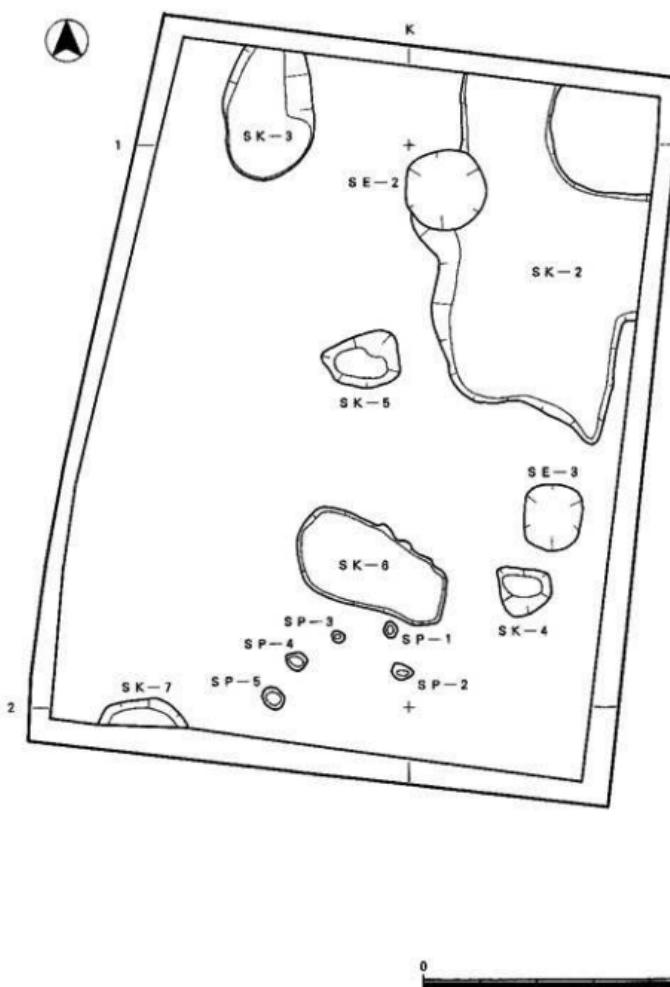
第27図 第3調査区包含層出土遺物実測図1



第28圖 第3調查區包含層出土遺物實測圖2

第29圖 第3調查區包含層出土遺物測量圖3





第30図 第3調査区平面図

上師器羽釜（431～436）は、一様に内傾する頸部から「く」の字形に屈曲する口縁部に至るもので、口縁部が長めに伸びるもの（433・435）や、やや短く直立ぎみとなるもの（432）などがある。すべてに煤が認められるが、（431・436）は外面全体に付着し、他は鋤以下にのみ付着する。なお、（436）の内面下方には炭化物が厚く付着している。上師器壺（441）は、頸部から内湾した後に直立ぎみとなるいわゆる「受け口状」の口縁部を持つ。

瓦質土器羽釜（437～439）のうち、（437）は直立ぎみの口頸部に厚めの鋤が付くもので、鋤上面から口縁端部にかけて、ヨコナデによる明瞭な段を3段有する。（438・439）は著しく内湾する口縁部を持つ三脚付羽釜である。瓦質土器壺（440・442）のうち（440）は、内湾する口縁部を持つもので、端部は内に巻き込んで終る。（442）は直立する頸部から外反する口縁部に至り、端部は上下に拡張して面を持つ。外面体部にはタタキ目が遺存している。

須恵器ねり鉢（443・444）はともに小破片の出土であるが、口縁端部をわずかにつまみ上げ、外傾する面を持つ。

白磁合子（445）の体部は輪花状を呈するもので、外面口縁端部から受部上面と外面体部下半以下は露胎である。白磁碗（446）は高台の幅が広く、高台内の削り込みはきわめて浅い。また、内面の沈線は深く鋭い。磁胎は暗い灰白色を呈し、釉も暗く濁る。外面は露胎である。

## 第4章 出土遺物観察表

SK-1

遺物番号 同版番号	器種	(cm) 口径 法量 基準	形態・調査等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1 七	上師器 小皿	8.2 —	丸味のある底部から斜上方へ直線的に伸びる口縁部に至る。端部は尖りぎみに丸く終る。 外面底部ナデ、口縁部ヨコナデ。内面ヨコナデ。	淡褐色	漂石英・長石等の粗粒を含む	良好	
2	土師器 小皿	9.3 1.7	直線的な底部から縁を持って凹折し、斜上方へ外反して伸びる口縁部に至る。端部は外へ尖って終れる。 外面底部ケズリ後ナデ、口縁部ヨコナデ。 内面絞張ナデ、口縁部ヨコナデ。	外面淡灰褐色～淡褐色 内面淡褐色	普通	良	燈心油痕あり
3	土師器 小皿	10.5 —	外上方へ直線的に伸びる底部から縁を持って凹折し、斜上方へ直線的に伸びる口縁部に至る。端部は丸く終る。 底端ナデ、口縁部ヨコナデ。	淡褐色	漂石英・赤色 酸化鉄等の粗粒を含む	良	
4	土師器 小皿	10.6 —	底盤から丸く立ち上がり、斜上方へ直線的に伸びる口縁部に至る。端部は丸く終る。 外面底部ナデ、口縁部ヨコナデ。内面ヨコナデ。	暗褐色～乳褐色 基内淡灰色	精良	良好	

出土物番号 図版番号	器種	(cm) 口径 法量 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
5	土師器 中皿	12.9 —	底部から縁を持て伸びし、外反した後斜上方へ内窪して伸びる口縁部に至る。端部近くで再び外反し、端部は外へ尖って終わる。 底部ナデ、口縁部ヨコナデ。	淡灰褐色 器肉灰褐色	密	良好	
6	土師器 中皿	14.8 —	底部から丸く立ち上がり、斜上方へ内窪して伸びる口縁部に至る。端部は斜上方へ尖りぎみに終わる。 指おさえ後底部ナデ、口縁部ヨコナデ。	乳白色	密 赤色酸化粒 多量に含む	良	
7	土師器 中皿	13.8 2.9	上方へわずかに突出する底部から丸く立ち上がり、斜上方へ外反ぎみに伸びる口縁部に至る。端部は丸く終わる。 指おさえ後底部ナデ、口縁部ヨコナデ。	乳褐色～暗 褐色	密	良	二次焼成を うける。内 面に墨多量 に付着
七	土師器 中皿	14.8 3.6	浅い半球形の底部から丸く立ち上がり、上外方へ外反ぎみに伸びる口縁部に至る。端部は丸く終わる。 指おさえ後底部ナデ、口縁部ヨコナデ。	灰褐色～暗 褐色	密	良	二次焼成を うける
8	土師器 中皿	19.2 —	体部から丸味のある「く」の字形に屈曲し、斜上方へ内窪ぎみに伸びる口縁部に至る。端部は膨らむ丸みのある面を持つ。 外部ヨコナデ。内面部ナデ、口縁部ヨコナデ。	淡赤褐色～ 暗褐色 器肉灰褐色	粗 3 mm前後の チャート・ 石英等多く 含む	良	外面に煤付 着
10	瓦器 小皿	8.6 —	底部から斜上方へ外反ぎみに伸びる口縁部に至る。端部は外へ尖りぎみに丸く終わる。 底部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘラミガキは密な横方向。	黒灰色 器肉白灰色	密	良好	
11	瓦器 椀	13.4 —	半球形の体部から器肉を減じて上方へ直線的に伸びる口縁部に至る。端部は尖りぎみに丸く終わる。 指おさえ後底部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘラミガキは外面粗い横方向、内面密な横方向。	灰黑色 口縁部・器 肉灰白色	やや粗	良	
12	瓦器 椀	14.8 —	上方へ直線的に伸びる体部から、11と同様の口縁部に至る。 体部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘラミガキは密な横方向。	暗黒灰色 器肉灰褐色	やや粗	良	表皮剥離
13	瓦器 椀	15.3 —	半球形の体部から上方へ直線的に伸びる口縁部に至る。端部は丸く終わる。 体部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘラミガキは密な横方向。	灰黑色 器肉白灰色	やや粗	良好	
14	瓦器 椀	15.9 5.5 高台66.25 高台高0.75	水平な底部から斜上方へ内窪して伸び、口縁部に至る。端部は内窪する面を持つ。高台は断面逆台形で「ハ」の字形に付く。 指おさえ後底部ナデ、口縁部・高台周囲ヨコナデ。ヘラミガキは外面稍い横方向、内面体部密な横方向、見込み格子状。	灰黑色 器肉白灰色	やや粗	良好	
七							

遺物番号 目次順番	器種	(cm) 口径 法蓋 底高	形態・調査等の特徴	色調	状土	焼成	備考
15	瓦器 碗	12.3 —	斜上方へ内窪して伸びる体部から器内を減じて上外方へ外反して伸びる口縁部に至る。端部は内傾する面を持つ。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘラミガキは粗い横方向。	灰黒色 器肉白灰色	やや粗	良好	
16	瓦器 碗	14.9 —	上外方へ直線的に伸びる体部から斜上方へ外反して伸びる口縁部に至る。端部は内傾する面を持つ。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘラミガキは外面部横方向、内面部密な斜方向。	黒灰色 器縁部・器肉淡灰褐色	滑	良好	
17	瓦器 碗	16.3 —	上外方へ直線的に伸びる体部から、上外方へ外反して伸びる口縁部に至る。端部は丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘラミガキは外面部横方向、内面部密な斜方向。	灰黒色 器肉灰白色	やや粗	良好	
18	瓦器 碗	14.7 5.3 高台径 6.3 高台高 0.6	半球形の底・体部から上外方へ外反して伸びる口縁部に至る。端部は内傾する面を持つ。 高台は断面逆台形で垂直に付く。 指おさえ後体部ナデ、口縁部・高台周縁ヨコナデ。ヘラミガキは内面部密な横方向、見込み格子状+平行線状。	黒灰色 器肉白灰色 ～乳灰色	やや粗	良好	
七							
19	瓦器 碗	15.1 —	上外方へ直線的に伸びる体部から器内を減じて上外方へ外反して伸びる口縁部に至る。端部は尖りぎみに終わる。 体部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘラミガキは密な横方向。	灰黒色 器肉灰色	やや粗	良好	
20	瓦器 碗	14.6 —	形態19に似る。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘラミガキは粗い横～横方向。	暗黒灰色 器肉灰色	やや粗	良	表皮剥離
21	瓦器 碗	16.3 —	斜上方へ内窪して伸びる体部から、19と同様の口縁部に至る。 指おさえ後体部ナデ、口縁部・高台上方ヨコナデ。ヘラミガキは外面部横方向、内面部密な横方向。	黒灰色 器肉灰白色	やや粗	良好	
22	瓦器 碗	15.8 —	上外方へ直線的に伸びる体部から、わずかには外反ぎみに伸びる口縁部に至る。端部は丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ。口縁部ヨコナデ。ヘラミガキは外面部横方向、体部細い斜方向、内面部半粗。下平密な斜方向。	黒灰色 器肉白灰色	やや粗	良好	
23	瓦器 碗	15.4 5.85 高台径 6.2 高台高 0.75	半球形の底・体部から上外方へ外反して伸びる口縁部に至る。端部は丸く終わる。高台は断面逆二角形で垂直に付く。 指おさえ後体部ナデ。口縁部・高台周縁ヨコナデ。ヘラミガキは外面部密な斜方向、内面部体部密な乱方向、見込み密な一方向。	黒灰色 器肉白灰色	やや粗	良	
七							
24	瓦器 碗	— 高台径 5.15 高台高 0.6	中央が下の底部に、断面逆台形の高台が、「ハ」の字形に付く。 ナデ後高台周ヨコナデ。ヘラミガキは見込み粗い一方向。	外面・器肉 白灰色 内面部灰褐色	やや良	良好	高台に煤付 有

遺物番号 測定番号	器種	(cm) 口径 法量 基高	形態・測定等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
25	瓦器 柄	— — 高台径 5.8 高台高 0.6	水平な底部から、外上方へ内側して伸びる全体に至る。高台は断面逆台形で「ハ」の字形に付き、端部は外反する。 ナデ後高台周囲ヨコナデ。見込みにヘラミガキの痕跡。	淡黄灰色	やや粗	密	
26	瓦器 柄	— — 高台径 6.25 高台高 0.8	水平に底部から外上方へ内側して伸びる全体に至る。高台は断面逆三角形で直面に付く。 ナデ後高台周囲ヨコナデ。ヘラミガキは見込みにジグザグ状+格子状。	灰黑色～灰白色 器肉白灰色	やや粗	良好	

第1調査区包含層

遺物番号 測定番号	器種	(cm) 口径 法量 基高	形態・測定等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
27	土師器 小皿	6.6 —	斜上方へ内側して伸びる口縁部。端部は丸く終わる。 口縁部ヨコナデの他は不明。	黒褐色	やや粗	良	
28	土師器 小皿	7.75 —	外上方へ内側して伸びる口縁部。端部は丸く終わる。 指おさえ後外沿底部ナデ、口縁部ヨコナデ。内面ヨコナデ。	淡黄褐色	密	良好	
29	土師器 小皿	8.25 —	外上方へ内側ざみに伸びる口縁部。端部は尖りぎみが終わる。 ヨコナデ。	淡褐色	密	良好	
30	土師器 小皿	8.35 —	斜上方へ内側して伸びる口縁部。端部は立ち上がり、丸く終わる。 ヨコナデ。	外表面灰褐色 内面淡黄褐色	やや粗	良好	
31	土師器 小皿	9.45 1.55	水平に近い底部から丸く立ち上がり、斜上方へ直線的に伸びる口縁部に至る。端部は厚肉を増して丸く終わる。 指おさえ後底部ナデ、口縁部ヨコナデ。	淡褐色	やや粗	良	
32	土師器 小皿	10.0 1.35	水平に近い底部から丸く立ち上がり、斜上方へ外反ざみに伸びる口縁部に至る。端部は外へつまみ出される。 底部ナデ、口縁部ヨコナデ。	外表面白色 内面灰褐色	粗 チート 石英等多量 に含む	良好	
33	土師器 小皿	10.2 —	斜上方へ内側した後直線的に伸びる口縁部に至る。端部はつまみ上げ、外傾する面を持つ。 ヨコナデ。	淡褐色	やや粗	良好	

試験番号	器種	(cm) 法量 口径 器高	形態・調査堅軟等の特徴	色調	胎上	焼成	備考
34	土器器 羽釜	22.9 —	斜内方へ直線的に伸びる腹部から丸く屈曲し、短い口縁部に至る。端部は丸く終わる。脚は基部を残して欠損する。 底部ナデ、口縁部・脚上部ヨコナデ。	淡赤褐色	粗	良	脚以下に焼付着
35	土器器 羽釜	27.85 —	斜内方へ内凹する腹部から丸く屈曲し、外上方へ短く伸びる口縁部に至る。端部は器肉を残して丸く終わる。円點状部から欠損。 外部強部ヘラケズリ後ナデ、口縁部ヨコナデ。内面頸部ナデ、口縁部ヨコナデ。	外面淡赤褐色 内面赤黄色	粗 石英・チャート等多く含む	良好	
36	瓦器 小皿	7.85 1.7	浅い半球形の体部から外に縦を持ち、外上方へ外反する口縁部に至る。端部は丸く終わる。 指おさえ後底部ナデ、口縁部ヨコナデ。	外面・器内 灰白色 内面乳白色	密	良	炭素吸着不良
37	瓦器 小皿	9.85 1.0	水平な底部から外に縦を持ち、外上方へ外反する口縁部に至る。端部は上方へつまみ上げぎみに丸く終わる。 指おさえ後底部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘタミガキは内面にわずかに認められる。	灰黑色 器内白灰色	密	良	
38	瓦器 小皿	9.95 —	斜上方へ内凹する底部へ口縁部。端部は外へ丸りぎみに終わる。 底部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘタミガキは内面わずかに認められる。	白灰色	やや粗	良	炭素吸着不良
39	瓦器 碗	12.5 —	斜上方へ内凹する体部から外に縦を持ち、外上方へ外反する口縁部に至る。端部は外へつまみ出される。 体部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘタミガキは内面わずかに認められる。	灰黑色 器内灰白色	やや粗	良好	
40	瓦器 碗	13.05 —	斜上方へ直線的に伸びる体部へ口縁部。端部は丸いある水面的な面を持つ。 ヨコナデ。ヘタミガキは内面口縁部粗い横方向。	黑灰色 器内灰白色	やや粗	良好	
41	瓦器 碗	12.75 —	斜上方へ直線的に伸びる体部へ口縁部。端部は先太となり、外へわずかにつまんで終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘタミガキは内面粗い横方向。	黑灰色 器内灰白色	やや粗	良好	
42	瓦器 碗	15.9 —	斜上方へ直線的に伸びる体部から外に縦を持ち、斜上方へ外反する口縁部に至る。端部は丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘタミガキは内面粗い横方向(溝巻状?)	灰黑色 器内灰白色	粗	良好	
43	瓦器 碗	17.1 —	斜上方へ直線的に伸びる体部から外に縦を作った後唇肉を絞じ、さらに伸びる口縁部。端部は丸く終わる。 ヨコナデ。ヘタミガキは内面に1条認められる(溝巻状?)	灰黑色 器内灰白色	粗	良好	

器種	(cm) 口径 底径 器高	形態・調整等の特徴	色調	粒土	焼成	備考
44 瓦器 梗	— 高台径 5.5 高台高 0.75	水平に近い底部に断面逆三角形の高台が垂直に付く。 ナデ後高台周囲ヨコナデ。ヘラミガキは見込みに乱方向。	暗灰色 器内淡灰色	やや粗	良	
45 瓦器 梗	— 高台径 5.9 高台高 0.6	水平に近い底部に断面逆三角形の高台が垂直に付く。 高台周囲ヨコナデ。	黒灰色 器内淡灰色	南	良好	
46 瓦器 梗	— 高台径 6.75 高台高 0.7	水平な底部に断面逆三角形の高台が「ハ」の字形に付く。 ナデ後高台周囲ヨコナデ。ヘラミガキは見込みに乱方向。	灰白色	やや粗	良好	炭素吸着不良
47 瓦器 梗	— 高台径 — 高台高 —	水平に近い底部から一旦張り出し、外上方へ内尚する体部にする。高台は断面逆二角形で底く、垂直に付くが端部を欠損する。 体部ナデ、高台周囲ヨコナデ。ヘラミガキは見込みに單位幅の長い格子状。	黒灰色 器内淡白色	やや粗	良好	
48 瓦器 梗	— 高台径 — 高台高 —	外上方へ直線的に伸び、体部に至る。高台は断面逆二角形で「ハ」の字形に付くが、端部を欠損する。 体部ナデ、高台周囲ヨコナデ。ヘラミガキは見込みに垂直な乱方向。	黒灰色 器内淡灰色	やや粗	良	
49 滅盡器 すり鉢	—	斜上方へ外反ぎに伸びる体部から～口縁部。端部は上方へつまみ上げられ、外傾する丸みのある面を持つ。 回転ナデ。	淡青灰色 口縁高面暗灰色	やや粗 長石多く含む	良好	
50 滅盡器 すり鉢	— 底径 12.0	水平に近い底面から外上方へ直線的に立ち上がる。 底部回転糸切り。外面部側面ケズリ後ナデ。内面ナデ。	灰青色	やや粗	良好	
51 備前燒 すり鉢	18.8	外上方へ外反さみに伸びた後縫を持ち、直立する口縁部。側面には2条の回線が走る。 端部は段を持ち、内傾する面となる。 回転ナデ、すり目は8条／2cm、著しく左傾する。	外面部淡灰色 内面灰黑色	密	良好	
52 丹波燒 すり鉢	33.2	斜上方へわずかに外反する体部～口縁部。 内面には1条の回線が走り、端部外傾する面を持つ。 回転ナデ。すり目は5条／1.6cm。	外面部褐色 内面淡灰色	やや粗		

## SE-1

器物番号 採取番号	器種	(cm) 口径 法量 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
53	瓦器 碗	13.4 —	斜上方へ内湾込みに伸びる体部から外反する口縁部に至る。端部は丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘラミガキは内面狙い横方向。	丹山・器肉 淡灰色 内面灰黑色	密	良	
54	瓦器 碗	13.0 —	斜上方へ直線的に伸びる体部から、わずかに外反する口縁部に至る。端部は器内を減じて丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘラミガキは内面狙い横方向。	墨灰色～灰 白色 器肉白灰色	やや粗	良	
55	瓦器 碗	15.6 —	上外方へ内湾込みに伸びる体部から、わずかに外反する口縁部に至る。端部は尖りぎみに丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘラミガキは内面狙い横方向。	淡灰色	やや粗	良好	

## SD-2

器物番号 採取番号	器種	(cm) 口径 法量 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
56	瓦器 碗	13.9 —	外上方へ直線的に伸びる体部～口縁部。端部は丸く終わる。 ヨコナデの他不明。	乳白色	やや粗	良	
57	瓦器 碗	— 高台径 6.8 高台高 0.7	断面U字形の高台が垂直に付く。 高台周面ヨコナデ、見込みにヘラミガキの痕跡あり。	墨灰色 器肉乳黃色	やや粗	良好	

## 第2調査区包含層

器物番号 採取番号	器種	(cm) 口径 法量 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
58	土器 小皿	8.4 —	外上方へ伸びる底部から鋭い壁を持ち、斜上方へ内湾する口縁部に至る。端部は尖りぎみに丸く終わる。 底部ナデ、口縁部ヨコナデ。	乳褐色	粗 赤色酸化鉄 含む	良	
59	土器 小皿	9.9 —	外上方へ直線的に伸びる口縁部。端部は上方へつまみ上げぎみに終わる。 ヨコナデ。	淡黃褐色	やや粗	良	
60	瓦器 碗	13.85 —	斜上方へ内湾して伸びる体部から、器内を減じて直線的に伸びる口縁部に至る。端部は丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘラミガキは内面狙い横方向。	外面口縁部 内面黒灰色 外表面 器肉乳灰色	やや粗 石英・長石 粒多く含む	良	

出物番号 目次番号	器種	(cm) 口径 法盤 深さ	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
61	瓦器 灰	13.9 —	外上方へ内側して伸びる体部から、枝を持った後器内を底じ、外上方へ直線的に伸びる口縁部に至る。端部は先尖となり、丸く終わる。 指おさえ後底部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘラミガトは内面積い横方向。	黒灰色 器肉淡灰色	やや粗	良好	
62	土師器 羽釜	— — 口径 29.0	内傾する体部に断面三角形の舟が水平に付く。 両周囲ヨコナデ。	外面黒褐色 内面 淡赤褐色	粗 石英・長石・チャート等 多く含む	良好 調以下に煤付有	

## SE-2

出物番号 目次番号	器種	(cm) 口径 法盤 深さ	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
63	土師器 小皿	8.0 1.65	水平に近い底部から丸く立ち上がり、斜上方へ内側に伸びる口縁部に至る。端部は丸く終わる。 指おさえ後底部ナデ、口縁部ヨコナデ。	乳白色	密	良好	
64	土師器 小皿	7.8 1.25	水平に近い底部から丸く立ち上がり、斜上方へ内側に伸びる口縁部に至る。端部は内に巻き込む。 指おさえ後底部ナデ、口縁部ヨコナデ。	乳白色	やや粗	良好	内面に煤付有
65	土師器 小皿	8.1 1.15	水平な底部から丸く屈曲し、外上方へ内側して伸びる短い口縁部に至る。端部は内に巻き込むように丸く終わる。 外面底部ナデ、口縁部ヨコナデ。内面ヨコナデ。	淡灰褐色	密	良好	
66	土師器 小皿	7.8 1.0	形態的に似るが端部は丸く終わる。 外面・内面底部ナデ、口縁部ヨコナデ。	淡赤褐色 外面底部淡 茶褐色	密	良好	
67	土師器 小皿	7.15 0.85	水平な底部から丸く屈曲し、斜上方へ立ち上がる短い口縁部に至る。端部は内に巻き込む。 外面底部ヘラケズリ後ナデ、口縁部ヨコナデ。内面ヨコナデ。	淡灰褐色	密	良好	
68	土師器 小皿	7.15 1.15	水平な底部から丸く屈曲し、斜上方へ直線的に伸びる口縁部に至る。端部は尖りぎみに丸く終わる。 指おさえ後底部ナデ、口縁部ヨコナデ。	淡灰褐色	やや粗	良好	
69	土師器 小皿	8.45 1.2	水平に近い底部から純い枝を持った辺折し、斜上方へ内側して伸びる口縁部に至る。端部は内に巻き込むように丸く終わる。 外面底部ヘラケズリ後ナデ、口縁部ヨコナデ、内面底部ナデ、口縁部ヨコナデ。	乳黄色	粗良	良好	

器物番号 団体名	器種	(cm) 法量 口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
70	土師器 小皿	8.2 1.1	底座から縁を持って屈折し、一段低く外反した後斜上方へ内向きに伸びる口縁部に至る。端部は上方へ尖りぎみに終わる。 指おさえ後ナデ、口縁部ヨコナデ。	淡灰褐色	やや粗	良好	
71	土師器 小皿	7.8 1.1	形態70に似るが後は段く器内厚い。 外面底部ヘラケナデ、口縁部ヨコナデ。内面底部内窓方向ナデ。ヒン部ヨコナデ。	淡灰褐色	密	良好	
72	土師器 小皿	8.2 1.25	底座から丸く立ち上がり、外上方へ外反ぎみに伸びた後斜上方へ内凹して伸びる口縁部に至る。端部は尖りぎみに丸く終わる。 ヨコナデ。	淡赤褐色	やや粗	良好	
73	土師器 中皿	10.5 1.8	底座から斜上方へ内凹して伸びる。端部は丸く終わる。 指おさえ後外面底部ナデ、口縁部ヨコナデ。内面ヨコナデ。	乳褐色	やや粗	良好	
74	土師器 中皿	13.15 2.0	底座から斜上方へ直線的に伸びる口縁部に至る。端部は丸く終わる。 外面底部ナデ、口縁部ヨコナデ。内面ヨコナデ。	外面淡黄褐色 内面黒褐色～淡黄褐色	やや粗	良好	
75	土師器 中皿	13.9 1.7	底部から丸く立ち上がり、上外方へ直線的に伸びる口縁部に至る。端部は内へ尖りぎみに丸く終わる。 指おさえ後外面底部ナデ、口縁部ヨコナデ。内面ヨコナデ。	淡赤褐色	やや粗	良好	
76	瓦器 小皿	9.0 2.0	丸みのある底座から外に縁を持ち、上外方へ外反して伸びる口縁部に至る。端部は丸く終わる。 指おさえ後底部ナデ、口縁部ヨコナデ。見込みに滑巻状ヘラミガキ。	灰黑色～灰白色 器肉灰白色	やや粗	良	
八	瓦器 碗	12.2 —	斜上方へ内向きに伸びる体部から～口縁部。端部は器肉を増して丸く終わる。 体部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘラミガキは内面に粗い横方向。	墨灰色 器肉灰白色	密	良	
78	瓦器 碗	12.7 —	斜上方へ直線的に伸びる体部から縁を持つて斜上方へ外反して伸びる口縁部に至る。端部は外へつまみ出される。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘラミガキは内面に粗い横方向。	墨灰色 器肉灰色	やや粗	良好	
79	瓦器 碗	13.3 —	斜上方へ内凹して伸びる体部から、わずかに外反して伸びる口縁部に至る。端部は丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘラミガキは内面に粗い横方向。	墨灰色 器肉淡灰色	やや粗	良好	

遺物名	器種	(cm) U法 法長 高さ	形態・調査等の特徴	色調	新土	施成	備考
80	瓦器 輪	15.4 —	外上方へ直線的に伸びる口縁部。端部は器内を増して丸く終わる。 ヨコナデ。ヘラミガキは内面に1条のみ認められる。	黒灰色 器内灰白色	やや粗	良好	
81	瓦器 輪	15.7 —	外上方へ直線的に伸びる口縁部。端部近くで器肉を増して外反ぎみとなり、丸く終わる。 指おさえ候体部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘラミガキは内面に粗い横方向。	灰白色	やや粗	良好	炭素付着不良
82	瓦器 輪	12.2 3.6 高台径 3.7 高台高 0.2	浅い半月形を呈する。口縁部は器内を減じて外反ぎみとなり、端部は丸く終わる。高台は長い桔子縫合。	外面灰褐色 ~淡茶褐色 ~里面灰黑色 ~灰色	粗	良好	炭素付着不良
八			指おさえ候体部ナデ、口縁部・高台美園ヨコナデ。ヘラミガキは内面体部に粗い横方向見込みに連続輪状(3個)。				
83	常滑燒 壺	18.6 — 最大容29.65	上方に最大径を持つ体部から内傾ぎみに立つ頸部に至る。口縁部は頸部から外反して外上方へ伸び、端部は器肉を減じて丸く終わる。 外面体部下部ヨコナデ、頸部凹凸ナデ。内面体部上部接合部指おさえ候ナデ、口縁部ヨコナデ。	外面赤灰色 ~里面灰赤色 ~器底 器肉灰褐色	やや粗 長石粒含む	良好	内面口縁部 外面頸部に 黄緑色の自然釉付着
84	土器器 羽釜	27.7 — 鷹径 42.1	丸みのある体部から斜内方へ内折する頸部に至る。口縁部は内に縁を持って堅く立ち上内屈する面を持つ。鷹は水平、端部丸く終わる。 外面体部下部ヨケズリ後ナデ、頸部ナデ、口縁部・鷹周辺ヨコナデ。内面体部・頸部ナデ、口縁部ヨコナデ。	淡赤褐色	粗	良好	外面鷹以下 に煤付着 鷹下段の井戸側
85	土器器 羽釜	47.1 — 鷹径 41.1	直線的に伸びる体部から斜内方へ伸びる頸部に至る。口縁部は直立し、端部丸く終わる。鷹は下がりぎみに付き、端部丸く終わる。 外面体部下部ヨケズリ後ナデ、頸部ナデ、口縁部・鷹上ドヨコナデ。内面体部ナデ、口縁部ヨコナデ。	淡赤褐色	粗	良好	内外面の鷹 以下に煤・ 炭化物付着、 井戸側
86	土器器 羽釜	— — 鷹径 42.7	直線的に伸びる体部のみ直立。口縁部は打ち欠かれる。鷹はほぼ水平に伸び、端部は突りぎみと丸く終わる。 外面体部下部ヨケズリ後ナデ、鷹上ドヨコナデ。内面ナデ。	淡赤褐色～ 灰褐色	粗	良好	内外面の鷹 以下に煤付着、 井戸側
87	土器器 羽釜	34.3 — 鷹径 —	斜内方へ直線的に伸びる頸部から器内を増して直立する口縁部に至る。端部は内傾する丸みのある面を持つ。 外面ナデ鉢口縁部、頸部下位ヨコナデ。内面頸部ナデ、口縁部ヨコナデ。	淡赤褐色	粗	良好	鷹以下に煤付着
88	土器器 羽釜	36.4 —	上内方へ内折して伸びる頸部から器内を増して成立する口縁部に至る。端部は内傾する丸みのある面を持つ。 外面ナデ鉢口縁部、頸部下位ヨコナデ。内面頸部ナデ、口縁部ヨコナデ。	淡赤褐色	粗	良好	鷹以下に煤付着
89	瓦質土器 羽釜	19.8 —	上内方へ直線的に伸びる口縁部。端部は直立ぎみとなり、外傾する面を持つ。鷹は下がりぎみに付き、端部は丸みのある面を持つ。 外面口縁部2段ヨコナデ、鷹上ドヨコナデ。内面ヨコナデ。	白灰色	やや粗	良	

器種 区分番号	器種	(cm) 口径 底面 高さ	形態・調整等の特徴	色調	給上	集成	備考
90	瓦器 碗	16.8 —	斜上方へ内側して伸びる体部から一旦器内を減じ、上外方へ内側して伸びる口縁部に至る。端部は丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部・高台上方ヨコナダ。ヘラミガキは外側扭い横方向、内面体部や粗い横方向、見込み格子状。	黒灰色 器内淡灰色	やや粗	良好	
91	瓦器 碗	15.2 4.3 高台径 5.0 高台高 0.4	形態的に似るが、口縁部は直線的に伸びる。高台は断面逆台形で低く、「ハ」の字形に付く。 指おさえ後体部ナデ、口縁部・高台周囲ヨコナダ。ヘラミガキは内面体部扭い横方向、見込みは単位細かく不整い平行線状。	黒灰色 器内灰	やや粗	良好	内面に炭化物付着
八							
92	瓦器 碗	14.8 4.15 高台径 5.25 高台高 0.45	浅い半球形を有する器形。口縁部は先太となり、内に沈線状の凹みを持つ。高台は幅で低く、不整いである。 指おさえ後体部ナデ、口縁部・高台周囲ヨコナダ。ヘラミガキは内面体部扭い横方向、見込み平行線状。	黒灰色 器内灰色	粗	良好	
93	瓦器 碗	12.3 —	上外方へ直線的に伸びる体部へ口縁部。端部は丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナダ。ヘラミガキは内面扭い横方向。	黒灰色 器内灰白色	やや粗	良好	
94	瓦器 碗	14.5 —	底部から内側した後上外方へ直線的に伸びる体部から後で作った後器肉を減じ、外反ぎみに伸びる口縁部に至る。端部は丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナダ。ヘラミガキは内面扭い横方向。	外面黒灰色 内面灰黑色 器内灰色	粗	良好	
95	瓦器 碗	14.85 —	斜上方へ内側して伸びる体部からわざかに外反して伸びる口縁部に至る。端部は丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナダ。ヘラミガキは内面扭い横方向。	黒灰色 器内灰色	粗	良好	
96	瓦器 碗	16.15 —	斜上方へ内側する体部から、枝を持った後外反して伸びる口縁部に至る。端部は先太となり丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナダ。指おさえの凹みが顯著に現れる。ヘラミガキは内面扭い横方向。	黒灰色 器内黄灰色	やや粗	良好	
97	瓦器 碗	15.75 —	斜上方へ内側する体部から枝を持った後外反して伸びる口縁部に至る。端部は先太となり丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナダ。ヘラミガキは内面に単位細かく扭い横方向。	黒灰色 器内乳白色	やや粗	良好	
98	瓦器 碗	16.5 —	斜上方へ内側して伸びる体部から枝を持った後器肉を減じ、斜上方へ直線的に伸びる口縁部に至る。端部は丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナダ。ヘラミガキは内面体部に扭い横方向、見込みに単位細かい平行線状。	黒灰色 器内灰白色	やや粗	良好	
99	瓦器 碗	— 高台径 3.9 高台高 0.25	水平な底部から外上方へ内側込みに立ち上がる体部。高台は断面逆台形でさわめて低く「ハ」の字形に付く。 指おさえ後体部ナデ、高台周囲ヨコナダ。ヘラミガキは内面体部に扭い横方向、見込みに単位細かい平行線状。	黒灰色 器内乳白色	やや粗	良好	

遺物番号 器種 器形番号	器種 (cm)	口径 法基 標準	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
100 丸器 瓶	—	—	中央がやや隆む底部のみ遺存。高台は断面 遊-三角形で邊台形で不規則。 高台径 4.0 高台高 0.3	外面黒灰色 内面・器内 灰白色	やや粗	良好	
101 瓦器 小皿	—	7.75	浅い半球形を呈する体部から縁を持ち、外 上方へ内湾して伸びる口縁部に至る。端部は 巻き込むように丸く終わる。 指おさえ後外底部コナデ。口縁部ヨコナデ。 内面2段のヨコナデ、内面にヘラミガキが認め られる。	黒灰色 器内灰白色	やや粗	良好	
102 瓦器 小皿	—	8.5	外上方へ内湾する体部から縁を持つた 後、端部を絞じて斜上方へ直線的に伸びる口 縁部に至る。端部は丸く終わる。 指おさえ後底部ナデ、口縁部ヨコナデ。内面に ヘラミガキが認められる。	灰黑色～白 灰色 器内灰白色	やや粗	良好	
103 瓦器 小皿	—	8.8 1.8	形態102に似る。 指おさえ後底部ナデ、口縁部ヨコナデ。内 面にヘラミガキは乱れた平行線状。	灰黑色	やや粗	良好	
104 瓦器 小皿	—	9.25 1.2	水平に近い底部から丸く立ち上がり、斜上 方へ外反して伸びる口縁部に至る。端部は丸 く終わる。 指おさえ後底部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘ ラミガキは内面粗い横方向。	灰黑色 器内灰白色	粗	良好	
105 瓦器 小皿	—	8.95 1.8	水平に近い底部から丸く立ち上がり、縁を持 った斜外反ぎみに直立する口縁部に至る。 端部は丸く終わる。 指おさえ後底部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘラ ミガキは内面体部粗い横方向、見込みに粗い平 行線状。	灰黑色 器内灰白色	粗	良好	
106 土師器 羽釜	—	29.8 — 両径 40.7	直線的な体部から内傾する端部に至る。口 縁部は折角し、外上方へ丸く伸び、端部は器 内を絞じて丸く終わる。縁は水平に付き、端 部は器内を増して丸く終わる。 外面部部ヘラミズリ後ナデ、口縁部・脚上 下ヨコナデ、内面部部ナデ、口縁部ヨコナデ。	淡赤褐色 チャート含 む	粗	良好	器以下に焼 付青
107 土師器 羽釜	—	31.2 — 両径 40.35	内傾する端部から丸く屈曲し、外方へ伸び る短い口縁部に至る。端部は器内を絞じて丸 く終わる。縁は下がりぎみに付き、端部丸く 終わる。 端部ナデ、口縁部・脚上下ヨコナデ。	赤褐色	粗	良好	器以下・内 面に焼付青
108 土師器 羽釜	—	34.4 — 両径 43.0	内傾する端部から「く」の字形に屈曲し、 外上方へ凸縫間に伸びる口縁部に至る。端部 はつまみ上げぎみに終わる。縁は水平に付き 端部は器内を増して丸く終わる。 調整107と同様	淡赤褐色～ 淡青褐色	粗	良好	
109 土師器 小皿	—	7.9 1.2	水平に近い体部から丸く立ち上がり、斜上 方へ内湾する口縁部に至る。端部は巻き込む ように丸く終わる。 指おさえ後底部ナデ、口縁部ヨコナデ。	淡黄褐色～ 淡灰褐色	密	良好	器心油痕あ り

器物番号 図版番号	器種	(cm) 口径 法量 容積	形態・調査等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
110	土師器 小皿	9.5 1.35	底部から丸く立ち上がり、斜上方へ直線的に伸びる口縁部に至る。端部は丸く終わる。 体部ナデ、口縁部ヨコナデ。	外面淡黄褐色 内面淡赤色	やや粗 赤色酸化物 多く含む	良	
111	土師器 小皿	8.4 1.3	水平な底部から鈍い棱を持ち、斜上方へ直線的に伸びる口縁部に平ら。端部は尖る。 指おさえ後底部ナデ、口縁部ヨコナデ。	乳褐色	密 雲母含む	良好	
八	土師器 中皿	—	外上方へ内側して伸びる底部から棱を持ち、斜上方へ外反して伸びる口縁部に平ら。端部は丸く終わる。 外面底部ナデ、口縁部2段ヨコナデ。内面ヨコナデ。	乳褐色～淡 灰色	密	良	

SK-2

器物番号 図版番号	器種	(cm) 口径 法量 容積	形態・調査等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
113	土師器 小皿	7.5 1.55	水半に近い底部から丸く立ち上がり、上外方へ直線的に伸びる口縁部に平ら。端部は上方へ尖る。 指おさえ後外縁底部ナデ、口縁部ヨコナデ。 内面ヨコナデ。	乳褐色	密	良	二次焼成をうける
114	土師器 小皿	7.7 1.45	底部から丸く立ち上がり、上外方へ直線的に伸びる口縁部に平ら。端部は丸く終わる。 底部ナデ、口縁部ヨコナデ。	淡灰褐色	密	焼成 段	
115	土師器 小皿	7.6 1.3	上方へわずかに突出する底部から丸く立ち上がり、斜上方へ内側して伸びる口縁部に平ら。端部は上方へ尖る。 指おさえ後底半強いナデ、口縁部ヨコナデ。	乳褐色	密 2mm程度の 雲母付着	焼成 段	
116	土師器 小皿	7.5 1.1	上方へわずかに突出する底部から丸く立ち上がり、外上方へ内側して伸びる口縁部に平ら。端部は尖りぎみに丸く終わる。 底部ナデ、口縁部ヨコナデ。	乳褐色	密	良	
117	土師器 小皿	7.75 1.2	底部から口縁部まで外上方へ内側して伸びる。端部は丸く終わる。 底部ナデ、口縁部ヨコナデ。	乳褐色	密	良	
118	土師器 小皿	7.75 1.4	上方へわずかに突出する底部から丸く立ち上がり、上外方へ内側して伸びる口縁部に平ら。端部は上方へ尖りぎみに終わる。 外縁底端ナデ、口縁部ヨコナデ。内面ヨコナデ。	淡灰褐色	密	良	

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 口径 法量 深溝	形態・調査等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
119	土師器 小皿	8.05 1.45	器肉のきわめて薄い底部から、器肉を増しながら内側して伸びる口縁部に至る。端部は上方へ尖る。 指おさえ後外底面部ナデ、口縁部ヨコナデ。内面不明。	淡灰褐色～ 淡黄褐色	密	良	
120	土師器 小皿	8.05 1.45	底部から口縁端部まで斜上方へ内湾して伸びる。端部は上方へ尖りぎみに丸く終わる。 外底面部ナデ、口縁部ヨコナデ。	淡灰褐色	密	良	
121	土師器 小皿	8.15 1.3	底部から丸く屈曲し、斜上方へ内湾して伸びる口縁部に至る。端部は上方へ尖る。 底面部ナデ、口縁部ヨコナデ。	淡灰褐色	やや粗	良	
122	土師器 小皿	8.2 1.25	上方へわずかに内湾する底部から丸く立ち上がり、上外方へ斜上方へ直線的に伸びる口縁部に至る。端部は丸く終わる。 外底面部ナデ、口縁部ヨコナデ。内底面部ナデ、口縁部ヨコナデ。	外底面部 色 内底面部 色	密	良好	
九	土師器 小皿	8.35 1.5	丸みのある底面部から口縁端部まで、外上方へ内湾して伸びる。端部は上方へ尖りぎみに丸く終わる。 指おさえ後外底面部ヘラケズリ後ナデ、口縁部ヨコナデ。内底面部ナデ、口縁部ヨコナデ。	乳褐色	密	良	
九	土師器 小皿	8.4 1.6	丸みのある底面部から丸く立ち上がり、上外方へ内湾して伸びる口縁部に至る。端部は尖りぎみに丸く終わる。 外底面部ナデ、口縁部ヨコナデ。内面強いヨコナデ。	淡灰褐色～ 淡黃褐色	密	良	
九	土師器 小皿	8.15 1.15	水平に近い底面部から丸く立ち上がり、斜上方へ内湾して伸びる口縁部に至る。端部は尖りぎみに丸く終わる。 底面部ナデ、口縁部ヨコナデ。	外底面部 色 内底面部 色～淡黃褐色	密	良	
126	土師器 小皿	8.2 1.1	125に似るが器肉をわめて深い。 外底面部ヘラケズリの後ナデ。口縁部ヨコナデ。内底面部ナデ、口縁部ヨコナデ。	淡褐色	やや粗	良	
127	土師器 小皿	8.7 0.8	水平に近い底面部から外上方へ直線的に伸びる口縁部に至る。端部は尖る。 指おさえの後底面部ナデ、口縁部ヨコナデ。	乳褐色	密	良	
128	土師器 小皿	7.2 1.2	底面部から丸く立ち上がり、斜上方へ内湾ぎみに伸びる口縁部に至る。端部は器肉を増して外輪する丸みのなる面をもつ。 外底面部ナデ、口縁部ヨコナデ。内面強いヨコナデ。	外底面部 色～ 淡灰褐色 内底面部 色	精良	良好	

造物者名 因版番号	器種	(cm) 口径 基部	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
129	土師器 小皿	7.5 1.5	上方へ突出する底部から丸く立ち上がり、斜上方へ直線的に伸びる口縁部に至る。端部丸く終わる。 指おさえ後底部ナデ、口縁部ヨコナデ。	淡灰褐色	密	良	
130	土師器 小皿	8.05 1.55	丸みのある底部から丸く立ち上がり、斜上方へ直線的に伸びる口縁部に至る。端部は外輪する丸みのある面を持つ。 指おさえ後ナデ、口縁部ヨコナデ。	外面淡青褐色～淡灰褐色 内面暗乳褐色	やや粗 2mm程度の長石散見される	良	二次焼成をうける
131	土師器 小皿	8.15 1.5	底部から丸く立ち上がり、斜上方へ内湾して伸びる口縁部に至る。端部は丸く終わる。 底部ナデ、口縁部ヨコナデ。	淡灰褐色	密 2mm程度の長石あり	良	
132	土師器 小皿	8.4 1.45	底部から丸く立ち上がり、斜上方へ内湾して伸びる口縁部に至る。端部は丸く終わる。 外面部ナデ、口縁部ヨコナデ。内面ヨコナデ。	灰褐色～乳褐色	密 2mm前後の長石あり		
133	土師器 小皿	8.25 1.7	わずかに上方に突出する底部から丸く立ち上がり、斜上方へ内湾して伸びる口縁部に至る。端部は丸く終わる。 指おさえ後外部底面ヘラケズリ後ナデ、口縁部ヨコナデ。内面底部ナデ、口縁部ヨコナデ。	淡褐色～明褐色	密 2mm程度の長石あり	良	
134	土師器 小皿	8.3 1.35	底部から丸く立ち上がり、斜上方へ直線的に伸びる口縁部に至る。端部は丸く終わる。 底部ナデ、口縁部ヨコナデ。	淡灰褐色	密 1mm程度の長石あり	良	
135	土師器 小皿	8.6 1.5	底部から丸く立ち上がり、斜上方へ内湾して伸びる口縁部に至る。端部は丸く終わる。 指おさえ後外部底面ナデ、口縁部ヨコナデ。内面ヨコナデ。	淡褐色～淡青褐色	やや粗	良	
136	土師器 小皿	8.8 1.7	丸みのある底部から丸く立ち上がり、斜上方へ内湾して伸びる口縁部に至る。端部は丸く終わる。 外面部底面ヘラケズリ後ナデ、口縁部ヨコナデ。内面底部ナデ、口縁部ヨコナデ。	淡灰褐色～淡青褐色～淡褐色	密 1mm程度のチャート・長石散見される。	良	二次焼成をうける
137	土師器 小皿	8.9 1.4	わずかに上方へ突出する底部から丸く立ち上がり、斜上方へ内湾して伸びる口縁部に至る。端部はつまみ上げられる。 底部ナデ、口縁部ヨコナデ。内面不明。	淡青褐色～明褐色	密 1mm前後の長石粒散見される	良好	
138	土師器 小皿	7.45 1.2	底部から丸く立ち上がり、斜上方へ内湾して伸びる口縁部に至る。端部はつまみ上げられる。 指おさえ後外部底面ナデ、口縁部ヨコナデ。内面不明。	乳褐色	やや粗	良	

遺物名及 記号番号	器種	(cm) 口徑 法量 器高	形態・調査等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
139	土師器 小皿	8.5 1.05	底部から丸く立ち上がり、外上方へ内窪みに伸びる口縁部に至る。端部はつまみ上げられる。 底部ナデ、口縁部ヨコナデ。	淡灰褐色	やや粗 2mm程度の 長石あり	良	
140	土師器 小皿	8.35 1.6	底部から丸く立ち上がり、外上方へ内窪して伸びる口縁部に至る。端部は巻き込むようになく終わる。 底部ナデ、口縁部ヨコナデ。	灰褐色	密	良	
141	土師器 小皿	8.8 1.3	底部から丸く立ち上がり、外上方へ内窪して伸びる口縁部に至る。端部は巻き込むようになく終わる。 底部ナデ、口縁部ヨコナデ。	淡灰褐色	密	良好	
142	土師器 小皿	11.0 1.2	底部から丸く立ち上がり、外上方へ内窪して伸びる口縁部に至る。端部は巻き込むようになく終わる。 外面底部ナデ、口縁部ヨコナデ。内面強い ナコナデ。	乳褐色～灰 褐色	粗良	良好	
143	土師器 小皿	7.7 1.55	水平な底部から丸く立ち上がり、斜上方へ内窪して伸びる口縁部に至る。端部は巻き込むようになく終わる。 指おさえ後外面部底ナデ、口縁部ヨコナデ。 内面部底ナデ、口縁部強いヨコナデ。	灰褐色	密	良	
九	土師器 小皿	7.75 1.35	水平な底部から丸く立ち上がり、斜上方へ内窪あわせに伸びる口縁部に至る。端部はつまみあげられる。 外面部底ヘラケザリの後ナデ、口縁部ヨコナデ。内面部底ナデ、口縁部ヨコナデ。	淡灰褐色～ 淡黄褐色	密 黒母・石英 等の微粒を 多く含む	良	
145	土師器 小皿	8.0 1.4	上方へむかに突出する底部から丸く立ち上がり、斜上方へ内窪して伸びる口縁部に至る。端部は巻き込むようになく終わる。 指おさえ後底部ナデ、口縁部ヨコナデ。	灰褐色	密	良好	燈心油瓶あり
九	土師器 小皿	7.95 1.6	上方へむかに突出する底部から丸く立ち上がり、斜上方へ内窪して伸びる口縁部に至る。端部はつまみ上げきみに終わる。 指おさえ後外面部底ヘラケザリ後ナデ、口 縁部ヨコナデ。内面部底ナデ、口縁部ヨコナデ。	外面淡黃褐色 内面部褐色	密	良好	
147	土師器 小皿	8.15 1.75	丸みのある底部から丸く立ち上がり、斜上方へ内窪あわせに伸びる口縁部に至る。端部はつまみ上げきみに終わる。 指おさえ後外面部底ヘラケザリ後ナデ、口 縁部ヨコナデ。内面部底ナデ、口縁部ヨコナデ。	外面淡灰褐色 内面部褐色	密 3mm程度の チャートあり	良好	
148	土師器 小皿	8.4 1.65	水平な底部から丸く立ち上がり、斜上方へ内窪あわせに伸びる口縁部に至る。端部はつまみ上げきみに終わる。 底部ナデ、口縁部ヨコナデ。	淡灰褐色	粗良	良	

登録番号 採取場所	器種 小皿	(cm) 口径 底盤 高さ	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
149 九	土器 小皿	8.25 1.25	上方へわずかに突出する底部から丸く立ち上がり、外方へ斜上方へ直線的に伸びる口縁部に至る。端部はつまみ上げがみに終わる。 指おさえ後外表面底部へタケヅリ後ナデ、口縁部ヨコナデ。	淡灰褐色～淡黃褐色	やや粗 2mm程度の赤色酸化粒 散見される	良	
150 九	土器 小皿	8.55 1.6	水平に近い底盤から丸く立ち上がり、斜上方へ内凹して伸びる口縁部に至る。端部は巻き込むように丸く終わる。 指おさえ後外表面底部弱々ナデ、口縁部ヨコナデ。内面底盤ナデ、口縁部ヨコナデ。	乳褐色～灰褐色	やや粗	良好	燈心油膜あり
151	土器 小皿	7.7 1.6	外上方へ直線的に伸びる底部から屈曲し、斜上方へ直線的に伸びる口縁部に至る。端部は外傾する丸みのある面を持つ。 底部ナデ、口縁部ヨコナデ。	淡灰褐色	密	良	
152 九	土器 小皿	7.7 1.6	形態151に似るが端部は丸く終わる。 底部ナデ、口縁部ヨコナデ。	淡灰褐色～淡黃褐色	やや粗 1～2mmの長石散見される	良	
153	土器 小皿	8.2 1.6	丸みのある底盤から屈曲し、斜上方へ直線的に伸びる口縁部に至る。端部は尖りぎみに終わる。 底部ナデ、口縁部強ヨコナデ。	淡灰褐色	密	良好	燈心油膜あり
154 九	土器 小皿	8.4 1.25	上方へわずかに突出する底部から屈曲し、斜上方へ直線的に伸びる口縁部に至る。 端部は丸く終わる。 指おさえ後外表面底盤ナデ、口縁部強ヨコナデ。内面底盤ナデ、口縁部ヨコナデ。	淡灰褐色	密	良好	燈心油膜あり
155	土器 小皿	8.9 1.4	水平に近い底盤から屈曲し、斜上方へ直線的に伸びる口縁部に至る。端部は器肉を掠じて丸く終わる。 底部ナデ、口縁部ヨコナデ。	乳褐色	精良	良	
156	土器 小皿	9.4 1.4	外上方へ直線的に伸びる底部から屈曲し、斜上方へ直線的に伸びる口縁部に至る。端部は器肉を掠じて丸く終わる。 指おさえ後外表面底盤削いナデ、口縁部ヨコナデ。内面強いヨコナデ。	灰褐色	やや粗	良	燈心油膜あり
157	土器 小皿	10.4 1.2	水平な底盤から屈曲し、斜上方へ直線的に伸びる口縁部に至る。端部は内傾する丸みのある面を持つ。 底部ナデ、口縁部ヨコナデ。	淡灰褐色～淡黃褐色	密 1mm前後のチャートあり	良	
158	土器 小皿	7.4 1.1	水平な底盤から縁を持って斜削し、矧く外反した後斜上方へ直線的に伸びる口縁部に至る。端部は外傾する面を持ち、つまみ上げられる。 底部ナデ、口縁部ヨコナデ。	淡灰褐色～淡黃褐色	密	良	

器物番号	器 標	(cm) 口径 法量 容積	形 态・調 整 等 の 特 徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
159	土師器 小瓶	8.1 1.1	底部から縦を持って屈折し、斜上方へ直線的に伸びる口縫部に至る。端部は158に似る。 底部ナデ、口縫部ヨコナデ。	淡灰褐色～ 淡黃褐色	密	良	
160	土師器 小瓶	8.45 1.2	形態159に似る。 外面底部ナデ、口縫部強いヨコナデ。内面 強いヨコナデ。	淡黃褐色	密	良好	
161	土師器 小瓶	7.5 0.95	水平に近い底部から深い縦を持って屈折し、 外上方へ直線的に伸びる口縫部に至る。端部 は器肉を減じて丸く終わる。 指おさえ後外面底部へラケズリ後ナデ、口 縫部ヨコナデ。内面底部ナデ、口縫部ヨコナ デ。	外面淡黃褐色～淡灰褐色 内面淡黃褐色	やや粗	良好	
162	土師器 小瓶	8.0 0.95	161に似るが縫は純い。 外面部底ナデ、口縫部ヨコナデ。内面ヨコ ナデ。	淡黃褐色	密	良	
163	土師器 小瓶	8.4 1.0	底部から縦を持って屈折し、短く外反した 後上方へ直線的に伸びる口縫部に至る。端 部は尖りガミに丸く終わる。 指おさえ後底部ナデ、口縫部ヨコナデ。	淡灰褐色	密	良	
164	土師器 小瓶	8.4 1.0	底部から縦を持って屈折し、斜上方へ直線的に伸びる 口縫部に至る。端部はつまみ上げガミに丸く 終わる。 底部ナデ、口縫部ヨコナデ。	淡灰褐色～ 淡黃褐色	密	良	
165	土師器 小瓶	9.0 1.4	底部から縦を持って屈折し、斜上方へ外反 ガミに伸びる口縫部に至る。端部は器肉を減 じて丸く終わる。 外面部底ナデ、口縫部強いヨコナデ。内面 強いヨコナデ。	淡灰褐色	やや粗	良	盤心押版 あり
166	土師器 小瓶	8.95 1.35	底部から縦を持って屈折し、斜上方へ内側 ガミに伸びる口縫部に至る。端部はつまみ上 げガミに丸く終わる。 外面部底ナデ、口縫部ヨコナデ。内面強い ヨコナデ。	乳褐色	精良	良	
167	土師器 小瓶	9.1 1.15	器肉のさわめて薄い底部から器肉を増して 屈折し、斜上方へ外反ガミに伸びる口縫部に 至る。端部は器肉を減じて丸く終わる。 指おさえ後外面底部へラケズリ後ナデ、口 縫部強いヨコナデ。内面底部ナデ、口縫部ヨ コナデ。	暗褐色 内面口縫部 褐色(深付 着)	やや粗	良	
168	土師器 小瓶	8.1 1.25	上方へわずかに突出する底部から縦を持って 屈折し、斜上方へ内側して伸びる口縫部に 至る。端部は巻き込むように丸く終わる。 指おさえ後底部ナデ、口縫部ヨコナデ。	乳灰色	やや粗 1mm程度の チャート。 右表	良	

品物名 固有番号	器種	(cm) 口徑 深さ	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
169	土師器 小皿	8.4 1.2	底部から縁を持って屈折し、斜上方へ内湾ざみに伸びる口縁部に至る。端部は丸く終わる。 外面部底ナデ、口縁部強いヨコナデ。内面強いヨコナデ。	淡灰褐色～ 淡褐色	精良	良好	
170	土師器 小皿	8.5 1.1	水平に近い底部から縁を持って斜上方へ内湾ざみに伸びる口縁部に至る。端部は丸く終わる。 底部ナデ、口縁部ヨコナデ。	淡灰褐色	やや粗	良	
171	土師器 小皿	8.7 1.2	水平に近い底部から縁を持って屈折し、上外方へ直線的に伸びるU縁部に至る。端部は尖って終わる。 外面部底ヘラケズリ後ナデ、U縁部ヨコナデ。内面部底ナデ、口縁部ヨコナデ。	淡灰褐色	密	良	
172	土師器 小皿	10.15 1.25	水平な底盤から縁を持って屈折し、短く外反した後外上方へ内湾して伸びる口縁部に至る。端部はまろん上げて終わる。 底部ナデ、U縁部強いヨコナデ。	外面淡青褐色 内面乳褐色	精良	良好	
九							
173	土師器 中皿	11.0 2.5	水平な底盤から丸く立ち上がり、上外方へ直線的に伸びる長い口縁部に至る。端部は尖りざみに丸く終わる。 底部ナデ、口縁部ヨコナデ。	淡黄褐色～ 灰褐色 器内灰褐色 の部分あり	やや粗 2mm前後の チャート・ 石英あり	良好	
174	土師器 中皿	12.1	形態173に似るが端部は内湾ざみとなり、尖って終わる。 強いヨコナデ。	淡灰褐色～ 淡青褐色	密	良好	
175	土師器 中皿	12.2 3.6	水平な底盤から丸く立ち出し、上外方へ内湾して伸びた後外反する長い口縁部に至る。端部は内湾ざみとなり、尖って終わる。 指おさえ後外面部底ナデ、口縁部強いヨコナデ。内面部底ナデ、口縁部ヨコナデ。	淡青褐色	密 器内灰褐色	良好	
176	土師器 中皿	13.0 3.1	形態・調整175に似る。	外面灰褐色 ～淡青褐色 内面乳褐色	密	良好	
177	土師器 中皿	13.0 3.1	形態175に似るが端部は丸く終わる。 底部ナデ、口縁部ヨコナデ。	淡青褐色 器内灰褐色	密	良好	
一〇							
178	土師器 中皿	12.9 2.65	丸みのある底盤から縁を持って屈折し、短く外反した後上方へ内湾する短い口縁部に至る。端部は上方へまろん上げれる。 指おさえ後外面部底ヘラケズリ後ナデ、口縁部ヨコナデ。内面部底ナデ、口縁部ヨコナデ。	乳褐色～灰 褐色	やや粗 2mm前後の 石英・長石 散見される		

器物番号 出土地名	器種	(cm) 口径 法量	形態・調査等の特徴	色調	胎上	焼成 備考
179 土師器 中皿		12.3 1.95	底部から丸く立ち上がり、斜上方へ直線的に伸びる口縁部に至る。端部は尖りきみに終わる。 指おさえ後外底底部ナデ、口縁部強いヨコナデ。内面ヨコナデ。	乳褐色	精良	良
180 上飾器 中皿		13.85 2.0	水平な底盤から丸く立ち上がり、斜上方へ内側きみに伸びる口縁部に至る。端部は尖りきみに終わる。 指おさえ後外底底部ラケズリ後ナデ、口縁部ヨコナデ。内面底部ナデ、口縁部ヨコナデ。	灰褐色～淡 黄褐色～淡 褐色	密 5mm程度の 赤色酸化粒 多く含む	
181 土師器 中皿		13.4 2.4	180に似る形態。 底部ナデ、口縁部ヨコナデ。	灰褐色 墨褐色灰色	精良	良好 外底面に煤 付着
182 上飾器 中皿		14.0 2.05	底盤から丸く立ち上がり、斜上方へ内側きみに伸びる口縁部に至る。端部はつまみ上げられ、外傾する面を持つ。 外底強いヨコナデ。内面ヨコナデ。	赤褐色	密 赤色酸化粒 多く含む	良
183 土師器 中皿		15.85 —	斜上方へ直線的に伸びる口縁部。端部は、 182に似る。 ヨコナデ。	乳褐色	密	良
184 土師器 中皿		10.7 1.85	底部から丸く立ち上がり、斜上方へ内側きみに伸びる口縁部に至る。端部はつまみ出される。 外底底部ナデ。口縁部ヨコナデ。内面ヨコナデ。	乳褐色	密	良
185 上飾器 中皿		12.4 2.6	底部から丸く立ち上がり、斜上方へ直線的に伸びる口縁部に至る。端部は内側きみとなり、上方へ尖りきみに終わる。 外底底部ナデ、口縁部ヨコナデ。内面ヨコナデ。	乳褐色～灰 褐色	やや粗 1mm前後の 赤色酸化粒 石英等あり	良
186 上飾器 中皿		12.5 2.4	水平に近い底盤から丸く立ち上がり、斜上方へ内側きみに伸びる口縁部に至る。端部は尖って終わる。 底部ナデ。口縁部ヨコナデ。	淡灰褐色～ 暗灰褐色	密	良
187 土師器 中皿		13.3 2.2	底部から丸く立ち上がり、斜上方へ内側きみに伸びる口縁部に至る。端部は外へつまみ出される。 底部ナデ。口縁部ヨコナデ。	外底深褐色 内面・若肉 暗灰褐色～ 灰褐色	やや粗 1mm前後の 石英・長石 多く含む	良 内面に煤付 着
188 土師器 中皿		12.8 1.96	底部から丸く立ち上がり、斜上方へ内側きみに伸びる口縁部に至る。端部は丸く終わる。 ヨコナデ。	灰褐色	密	良 外底口縁部 に煤付着

生物名 内臓部	種 法量	口 器高	形態・調整等の特徴	色調	治 上	焼 成	備 考
188 土蔵器 中組	—	12.9 2.1	上方へごくわずかに突出する底部から丸く立ち上がり、186に似る口器部に至る。 外面部部ヘラケズリ後ナデ、口縁部ヨコナデ。内面部部ナデ、口縁部ヨコナデ。	乳褐色～灰褐色 器肉灰褐色	赤色酸化性 含む		
189 瓦器 輪	—	14.06	体部との境に後を持ち、器内を絶じて上方へ直線的に伸びる口器部に至る。端部は内に凹溝状の凹みを持ち、丸く終わる。 体部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘラミガキは直線方向。	外面部部黒灰色 内面・器肉白灰色	やや粗	良	
191 瓦器 輪	—	13.8	体部との境に後を持ち、器内を絶じて斜上方へ外反する口器部に至る。端部は丸く終わる。 体部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘラミガキは上位密な横方向、下位密な円弧状。	黒灰色 器肉白灰色	やや粗	良好	
192 瓦器 輪	—	15.45	体部から口縁部まで連続して斜上方へ内湾さみに伸びる。端部は上方へ尖る。 調整191と同様。	黒灰色 器肉白灰色	やや粗	良好	
193 瓦器 輪	—	16.6	上外方へ内湾する体部から器内をわずかに絶じて直線的に伸びる口器部に至る。端部は外へ尖りぎみに終わる。 体部ナデ、口縁部ヨコナデ、ヘラミガキは密な横方向。	黒灰色 器内乳白色	素	良	
194 瓦器 輪	—	高台径6.35 高台高0.6	水平に近い底部から餘々に立ち上がる。高台は断面正方形で正面に付く。 体部ナデ、高台周囲ヨコナデ。ヘラミガキは見込みに密な一方向。	外面灰褐色 内面部部褐色 器内淡灰色	やや粗	良	
195 瓦器 輪	—	14.35 5.1	水平な底部から斜上方へ内湾する深めの体部。口器部は丸く終わる。高台は断面平行形で「ハ」の字形に付く。 指おさえ後体部ナデ、口縁部・高台周囲ヨコナデ。ヘラミガキは内面部部側面横方向、見込みは単位幅狭く粗い格子状。	灰黒色～灰色 器肉灰白色	やや粗	良好	
—○	—	高台径3.65 高台高0.45					
196 瓦器 輪	—	14.8 4.55	形態195に似るがやや浅く、底中央を欠損する。 指おさえ後体部ナデ、口縁部・高台周囲ヨコナデ。ヘラミガキは見込みにのみ、粗い平行線状。	灰黒色～灰白色 器肉灰白色	やや粗	良	
—○	—	高台径3.5 高台高0.5					
197 瓦器 輪	—	14.35 —	斜上方へ内湾する深めの体部。口器部は直線的に伸び、内に凹溝状の凹みが一箇所ある。端部は丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部・高台周囲ヨコナデ。ヘラミガキは内面部部やや粗い横方向、見込み単位幅狭く粗い平行線状。	黒灰色 器肉灰白色	やや粗	良	
198 瓦器 輪	—	15.0	外上方へ内湾さみに伸びる体部から、角度を絶じて上方へ直線的に伸びる口器部に至る。端部は丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘラミガキは内面部部密な横方向、見込み単位幅狭く沈線状の粗い平行線状。	黒灰色～灰白色 器肉灰白色	やや粗	良	外面口縁部 に木葉の付 属あり 土苔集積

器物番号	器種	(cm) 口径 底径	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
199	瓦器 碗	15.2 4.35 高台径 4.7 高台高 0.35	水平な底部から一旦盛り、斜上方へ内曲す る。口縁部は直線的に伸び、先太となって丸く終わる。高台は断面方向で垂直に付く。 指おさえ後体部ナデ、口縁部・高台周囲ヨコナデ。ヘラミガキは内面体部粗い横方向、見込み粗く不揃い平行線状。	黒灰色 器肉白灰色	やや粗	良好	土器集積
-○							
200	瓦器 碗	15.0 4.6 高台径 4.55 高台高 0.4	形態195に似るがやや深く、口縁部は2段に外反する。高台は断面逆三角形で丸くハサ字形に付く。 指おさえ後体部ナデ、口縁部・高台周囲ヨコナデ。ヘラミガキは内面体部やや粗い横方向、見込みやや粗い平行線状。	黒灰色 器肉白灰色	やや粗	良好	
-○							
201	瓦器 碗	13.8 3.7 高台径 4.1 高台高 0.3	水平な底部から一旦盛り、斜上方へ直線的に伸びる。端部は外へ反さみて、端部は丸く終わる。高台は断面逆三角形で低い。 指おさえ後体部ナデ、口縁部・高台周囲ヨコナデ。ヘラミガキは内面体部粗い横方向、見込みは単位幅狭くやや粗い平行線状。	灰色～灰白色 器肉白灰色	密	良	炭素吸着不良
-○							
202	瓦器 碗	14.6 3.9 高台径 3.95 高台高 0.25	形態201に似るが口縁部は直線的に伸び、端部は外へ反さみとなる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部・高台周囲ヨコナデ。ヘラミガキは内面体部やや粗い横方向、見込みは単位幅狭く粗い平行線状。	灰色～灰白色 器肉白灰色	粗	良	炭素吸着不良
-○							
203	瓦器 碗	14.6 4.3 高台径 3.6 高台高 0.2	水平な底部から一旦盛り、外上方へ直線的に伸びる。端部は器内を減じて伸び、端部は丸く終わる。高台は断面逆三角形で低い。 指おさえ後体部ナデ、口縁部・高台周囲ヨコナデ。ヘラミガキは内面体部やや粗い横方向、見込み粗く不揃い平行線状。	灰色～灰白色 器肉白灰色	密	良	炭素吸着不良
-○							
204	瓦器 碗	14.15 3.7 高台径 3.95 高台高 0.25	水平な底部から一旦盛った後外上方へ直線的に伸びる。口縁部は上外方へ極く外反する。高台は断面逆三角形で低く不揃い。 指おさえ後体部ナデ、口縁部・高台周囲ヨコナデ。ヘラミガキは内面体部やや粗い横方向、見込み粗く不揃い平行線状。	黒灰色～白 灰色 器肉白灰色	やや粗	良	
-○							
205	瓦器 碗	14.9 3.95 高台径 3.7 高台高 0.2	形態204に似るが大型で、口縁部は長く外反する。高台はさわめて低く不揃い。 指おさえ後体部ナデ、口縁部・高台周囲ヨコナデ。ヘラミガキは内面口縁部から見込みに向って左側に粗い溝巻状。	黒灰色 外面体部の一部 器肉白灰色	やや粗	良好	光沢あり 内面に油痕あり
-○							
206	瓦器 碗	12.6 —	外上方へ内曲して伸びる体部～口縁部。端部は上方へ丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘラミガキは内面体部粗い横方向、見込みに単位幅の長い平行線状のものが認められる。	黒灰色 器肉白灰色	やや粗	良好	
-○							
207	瓦器 碗	12.2 —	一旦盛った後斜上方へ内曲して伸びる体部から器内を減じて直線的に伸びる口縁部に至る。端部は先太となり丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘラミガキは内面体部に粗い横方向。	黒灰色～白 灰色 器肉白灰色	やや粗	良	
-○							
208	瓦器 碗	13.4 —	外上方へ直線的に伸びる体部から角度を変えて上外方へ直線的に伸びる口縁部に至る。端部は外へ尖りきみに終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘラミガキは内面体部にやや粗い円窓状。	灰黑色 器肉白灰色	やや粗	良好	
-○							

測定番号	器種	(cm) 口徑 基部	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
209	瓦器 碗	13.3 —	斜上方へ内側して伸びる体部～口縁部。口縁部は丸太となり丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘラミガキは内面体部にやや粗い横方向。	外面・器内 白灰色 内面灰白色	密 良		炭素吸着不良
210	瓦器 碗	13.9 —	一旦横に張った後斜上方へ直線的に伸びる 体部から器内を絞じて屈曲し、上方へ内側する 口縁部に至る。端部は丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘラミガキは内面体部に粗い内弧状(高巻状?)。	灰色～灰白色 器内灰白色	やや粗	良	炭素吸着や 不良
211	瓦器 碗	13.9 —	形態210に似るがやや深い。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘラミガキは内面体部に横方向のものがわずかに認められる。	外面・器内 白灰色 内面灰白色～灰蓝色	やや粗 1mm程度の 砂粒わずかに含む	良	炭素吸着不良
212	瓦器 碗	13.8 —	高台際から口縁部まで内側して立ち上がる。 端部は丸太となり丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部・高台際ヨコナデ。ヘラミガキは内面体部粗い横方向、見込みに單位幅の狭いものが1条認められる。	黒灰色 器内白灰色	やや粗 2mm程度の 砂粒わずかに含む	良好	
213	瓦器 碗	13.9 —	形態212に似るが、口縁部は2段に外反し 端部丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘラミガキは内面体部粗い横方向、見込みに單位幅の狭いものが1条認められる。	黒灰色 器内白灰色	粗	良好	
214	瓦器 碗	15.2 —	斜上方へ内側して伸びる体部～口縁部。端部は外へ尖りきみに終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘラミガキは内面体部粗い横方向。	黒灰色 器内灰白色	粗 長石粒多量に含む	良好	土器集積
215	瓦器 碗	14.9 —	斜上方へ内側して伸びる体部からわざかに外反する口縁部に至る。端部は丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘラミガキは内面体部粗い横方向。	灰黑色～灰白色 器内灰白色	やや粗	良	炭素吸着や 不良
216	瓦器 碗	15.5 —	斜上方へ内側して伸びる体部から壁を持つて短く外にする口縁部に至る。端部は外へ尖りきみに終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘラミガキは内面体部粗い横方向。	灰黑色 器内白灰色	密	良	
217	瓦器 碗	15.2 —	斜上方へ直線的に伸びる体部～口縁部。端部は丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘラミガキは内面体部粗い横方向。	灰黑色 器内灰白色	やや粗 長石粉多く含む	良好	
218	瓦器 碗	15.55 —	斜上方へ内側して伸びる体部～口縁部。端部は丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘラミガキは内面体部粗い横方向。	灰黑色 器内乳白色	密	良	

遺物番号 回収番号	器種	(cm) 口 径 法 量 高	形態・調査等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
219	瓦器 碗	15.4 —	斜上方へ内側して伸びる体部から、直線的に伸びる口縁部に至る。端部は丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘラミガキは内面体部や粗い横方向。	黒灰色 器内灰白色	やや粗 胎内灰白色	良好	
220	瓦器 碗	16.0 —	斜上方へ直線的に伸びる体部へ口縁部。端部は丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘラミガキは内面体部単位幅狭くやや粗い横方向。	灰黑色 器内灰白色	やや粗 胎内灰白色	良好	
221	瓦器 碗	11.8 —	斜上方へ直線的に伸びる体部へ口縁部。端部は丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘラミガキは内面体部単位幅広く粗い横方向。	黒灰色～乳白色 器内乳白色	やや粗 石英粒多く含む	良	炭素付着不良
222	瓦器 碗	12.5 —	外上方へ内側して伸びる体部から、斜上方へわずかに外反する口縁部に至る。端部丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘラミガキは内面体部単位幅狭く粗い横方向。	外面上半・ 内面黒灰色 外面下半・ 器内灰白色	やや粗 胎内灰白色	良	
223	瓦器 碗	12.5 —	斜上方へ直線的に伸びる体部からわずかに外反する口縁部に至る。端部は丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘラミガキは内面体部単位幅狭く粗い横方向～円弧状。	灰白色	粗 3mm以下の 石英粒多く含む	良	炭素付着不良
224	瓦器 碗	12.65 —	斜上方へ内側して伸びる体部から腰を持つ後端部を以て直線的に伸びるU字縁部に至る。端部は丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘラミガキは内面体部や粗い横方向。	外面・内面 下半黒灰色 内面上半・ 器内灰白色	やや粗 胎内灰白色	良好	
225	瓦器 碗	13.8 —	斜上方へ内側して伸びる体部から、わずかに外反する口縁部に至る。口縁部は先太となり丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘラミガキは内面体部粗い横方向～円弧状。	外面墨灰色 ～灰白色 内面灰黑色 ～灰色 器内灰白色	やや粗 石英粒含む	良好	
226	瓦器 碗	13.8 —	形態226に似るが浅い。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘラミガキは内面体部粗い横方向～円弧状。	灰白色 外面上半 呈乳白色 を呈する 部分あり	密	良好	炭素吸着不良
227	瓦器 碗	13.8 —	斜上方へ直線的に伸びる体部から外反する口縁部に至る。端部は丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘラミガキは内面体部粗い横方向。	墨灰色 器内灰黑色	やや粗 胎内灰黑色	良好	
228	瓦器 碗	14.0 —	斜上方へ内側して伸びる体部からわずかに外反する口縁部に至る。端部は外へつまらぎみに終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘラミガキは内面体部単位幅狭くやや粗い横方向～円弧状。	外面体部・ 器内灰白色 外面外縁部 内面灰黑色	やや粗 胎内灰黑色	良好	

登録番号 登録年月日	器 様	(cm) 口径 法量 器高	形 狽・ 調 整 等 の 特 徴	色 調	紡 土	焼 成	備 考
229	瓦器 瓶	14.2 —	斜上方へ内消ぎみに伸びる体部から器内を はじて直線的に伸びる口縁部に至る。端部は 丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘ ラミガキは内面体部単位幅狭く粗い横方向。	黒灰色 器内灰白色	やや粗	良好	内面に油膜 あり
230	瓦器 瓶	14.3 —	斜上方へ内消して伸びる体部から器内を減 じて外反ぎみに伸びる口縁部に至る。端部は 丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘ ラミガキは内面体部に横方向の痕跡あり。	黒灰色 器内淡灰褐色	粗	良	表皮剥離
231	瓦器 瓶	14.95 —	斜上方へ内消して伸びる体部から短く外反 する口縁部に至る。端部は丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘ ラミガキは内面体部幅狭く粗い横方向。見込みに单 位幅狭く粗い平行線状。	灰黑色 器内灰白色	粗 チャート。 石英の小粒 多く含む	良	
232	瓦器 瓶	15.0 —	斜上方へ内消して伸びる体部からわざかに 外反する口縁部に至る。端部は丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘ ラミガキは内面体部下半に密な横方向。	外面黒灰色 内面灰黑色 器内灰白色	やや粗	良	表皮剥離
233	瓦器 瓶	16.2 —	斜上方へ内消して伸びる体部から曲く外反 する口縁部に至る。端部は丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘ ラミガキは内面体部やや粗い横方向。見込みには 単位幅狭く平行線状。	外面白縁部 内面黒灰色 外面部・ 器内白灰色	やや粗	良好	
234	瓦器 瓶	16.95 —	斜上方へ内消して伸びる体部から器内を減 じて外反ぎみに伸びる口縁部に至る。端部は 上方へ尖りぎみに終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘ ラミガキは内面体部に横方向の痕跡。	黒灰色 器内乳灰色	粗	良	表皮剥離
235	瓦器 瓶	16.2 —	斜上方へ内消して伸びる体部から外反して 伸びる口縁部に至る。端部は先太となり丸く 終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘ ラミガキは内面体部単位粗い横方向。見込みには 粗い平行線状。	白灰色 内面の一部 のみ黒灰色	やや粗	良好	
236	瓦器 瓶	12.55 —	外上方へ直線的に伸びる体部～口縁部。端 部は先太となり丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘ ラミガキは内面体部上位粗・下位密な横方向。	外面白縁部 内面黒灰色 外面部・ 器内乳白色	やや粗 チャート。 石英多く含 む	良	表皮剥離・ 外面部素板 層不良
237	瓦器 瓶	12.9 —	斜上方へ直線的に伸びる体部～口縁部。端 部は先太となり丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘ ラミガキは内面体部粗く連續しない横方向。	灰黑色 器内灰白色	やや粗	良好	
238	瓦器 瓶	13.0 —	外上方へ伸びる体部から2段に強く外反す る口縁部に至る。端部は丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘ ラミガキは内面体部粗い横方向。	灰色～灰白 色 器内灰白色	やや粗	良	炭素軟膏不 良

遺物番号 採取番号	器種	(cm) 法量	口縁 基底	形態・調整等の特徴	色調	鉛土	焼成	備考
239	瓦器 碗	13.6 —	斜上方へ直線的に伸びる体部から縁を持ち わずかに外反する口縁部に至る。端部は先太 となり丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ(外縁へラケズリ後ナ デか?) 口縁部ヨコナデ。ヘラミガキは内面 体部横方向に1条のみ認められる。	外面白縁部・ 内面黒灰色 外面部 器内白灰色	粗	良	外面焼成 善不良	
240	瓦器 碗	14.0 —	斜上方へ直線的に伸びる体部から縁を持ち 脂肉を減じて直線的に伸びる口縁部に至る。 端部は丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘ ラミガキは内面体部や粗い横方向。	黒灰色～灰 白色 器内灰白色	粗	良好		
241	瓦器 碗	13.9 —	斜上方へ内凹ぎみに伸びる体部から、直線 的に伸びる口縁部に至る。端部は丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘ ラミガキは内面体部や粗い横方向。見込みから丸くものか単位幅の狭い平行継状 のものが口縁部付近まで認められる。	黒灰色 器内灰色	やや粗	良好		
242	瓦器 碗	14.2 —	斜上方へ直線的に伸びる体部から一旦器肉 を減じて口縁部に至る。端部は先太となり丸 く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘ ラミガキは内面体部や粗い横方向。	黒灰色～灰 白色 器内灰白色	粗	良好		
243	瓦器 碗	14.2 —	斜上方へ直線的に伸びる体部～口縁部。端 部は突りぎみに終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘ ラミガキは内面体部や粗く連続しない横方向。 見込みから丸くものか単位幅の狭い継状 のものが口縁部付近まで認められる。	黒灰色 器内灰白色	やや粗	良好		
244	瓦器 碗	14.0 —	斜上方へ直線的に伸びる体部～口縁部。端 部は先太となり、外へ突りぎみに終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘ ラミガキは内面体部や粗い横方向。	黒灰色 器内灰黑色	やや粗	良好		
245	瓦器 碗	14.85 —	斜上方へ直線的に伸びる体部からぐくわす かに外反する口縁部に至る。端部はわずかに 先太となり丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘ ラミガキは内面体部粗い横方向。	外面白縁部 内面灰黑色 ～灰白色 器内灰白色	やや粗	良		
246	瓦器 碗	14.9 —	外上方へ直線的に伸びる体部から外反ぎみ に伸びる口縁部に至る。端部丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘ ラミガキは内面体部や粗い横方向。	灰黑色 器内灰白色	粗 2mm以下の 石英・赤色 酸化鉄等含む	良		
247	瓦器 碗	14.8 —	斜上方へ直線的に伸びる体部から茎肉を減 じて直線的に伸びる口縁部に至る。端部は先 太となり丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘ ラミガキは内面体部粗く連続しない横方向。	灰黑色 器内灰白色	やや粗	良好		
248	瓦器 碗	15.3 —	形態247に似るが端部は尖りぎみに終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘ ラミガキは内面体部粗く連続しない横方向。	黒灰色 器内灰白色	やや粗	良		

資料名 記載番号	器種	(cm) 口径 高さ	形態・調査等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
249	瓦器 碗	— 16.95	斜上方へ内凹みに伸びる体部から器肉を減じて直線的に伸びる口縁部に至る。端部は尖点となり丸く終わる。 指おさえ液体部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘラミガキは内面体部やや粗い横方向。	墨灰色 器肉灰白色	やや粗	良好	
250	瓦器 碗	— 16.0	斜上方へ直線的に伸びる体部から器肉を減じて直線的に伸びる口縁部に至る。端部は丸く終わる。 指おさえ後液体部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘラミガキは内面体部やや粗い横方向。	灰黒色~灰色 器肉灰白色	粗 赤色酸化鉄 運められる	良	
251	瓦器 碗	— — 高台径4.25 高台高0.4	水平な底盤から斜上方へ直線的に伸びる体部に至る。高台は断面半円形で低い。 指おさえ後外表面液体部ナデ、高台周囲ヨコナデ、内面底部ハケナデ。ヘラミガキは内面体部粗い横方向、見込みは単位幅狭く粗いジグザグ状。	墨灰色 器肉灰白色	やや粗	良	
252	瓦器 碗	— — 高台径4.9 高台高0.4	底盤から斜々に内窓して立上がりする。高台は断面半円形で低い。 指おさえ後液体部ナデ、高台周囲ヨコナデ。内面のヘラミガキは体部粗い横方向、見込みは単位幅狭く粗いジグザグ状。	灰白色	粗 石英・長石 粒合む	良	吸水吸着不良
253	瓦器 碗	— — 高台径4.45 高台高0.3	形態252に似るが高台は断面逆三角形で垂直に付く。 指おさえ後ナデ、高台周囲ヨコナデ。ヘラミガキは見込みに単位幅の狭いジグザグ状。	灰黒色 器肉灰白色	やや粗	良好	
254	瓦器 碗	— — 高台径4.35 高台高0.3	水平な底盤から一旦横へ張り出した後、斜上方へ直線的に伸びる。高台は断面逆三角形でさわめて低く、ゆがむ。 指おさえ後ナデ、高台周囲ヨコナデ。ヘラミガキは内面体部粗い横方向、見込み粗く不整い平行線状。	外面上半・内面灰黑色 外下面半灰色 器肉灰白色	粗	良好	
255	瓦器 碗	— — 高台径5.05 高台高0.35	底板から外上方へ直線的に伸びる。高台は断面逆三角形で「ハ」の字形に付く。 高台周囲ヨコナデ、内面ナデ後見込みに不整い平行線状のヘラミガキ。	灰黑色 器肉灰黑色 —白灰色	やや粗	良	表皮剥離
256	瓦器 碗	— — 高台径5.05 高台高0.25	水平な底板から外上方へ内窓して伸びる。 高台は断面台形でさわめて低す。 指おさえ後ナデ。高台周囲ヨコナデ。ヘラミガキは見込みに単位幅の狭い平行線状。	外面灰黑色 内面灰色 器肉灰白色	やや粗	良好	
257	瓦器 碗	— — 高台径4.65 高台高0.3	やや深みのある底盤から外上方へ斜々に内窓して伸びる。高台は断面逆台形で垂直に付く。 指おさえ後ナデ、高台周囲ヨコナデ。ヘラミガキは内面体部粗い横方向、見込みは粗い平行線状。	灰黒色 器肉灰白色	やや粗	良好	
258	瓦器 碗	— — 高台径3.4 高台高0.3	水平に深い底盤。高台は断面半円形で低い。 指おさえ後ナデ、高台周囲ヨコナデ。ヘラミガキは見込みに平行線状。	灰黒色~灰色 器肉灰白色	やや粗	良	

出典番号 測定番号	器種	(cm) 口径 底径 高さ	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
269	瓦器 瓶	— — 高台径 4.0 高台高 0.25	水平に近い底部。高台はきわめて低平。 指おさえ後ナデ。口縁部ヨコナデ。ヘラミガキは内面粗い渦巻状。	灰黒色 器肉白灰色	やや粗	良好	
260	瓦器 小瓶	8.36 1.7	やや深みのある底部から縦を持って上方へ 伸びる口縁部に至る。端部は尖りぎみに丸く終わる。 指おさえ後ナデ。口縁部ヨコナデ。ヘラミガキは見込みに密な格子状。	黒灰色～灰 黑色 器肉白灰色	密	良好	
—							
261	瓦器 小瓶	8.8	底部から縦を持って上方へ内向ぎみに伸びる口縁部に至る。端部は丸く終わる。 指おさえ後ナデ。口縁部ヨコナデ。ヘラミガキは内面口縁部から見込みにかけて単位幅狭く密な横方向+平行線状のものが認められる。	外壁・器肉 灰白色 内面灰色	やや粗	良好	表面微凸不 規
262	瓦器 小瓶	8.55	形態 261 に似る。 指おさえ後ナデ。口縁部ヨコナデ。ヘラミガキは内面口縁部から見込みにかけて単位幅狭く密な横方向+平行線状。	黒灰色 器肉白灰色	やや粗	良好	
263	瓦器 小瓶	— 1.65	水平な底部から丸く立ち上がり、上方へ直線的に伸びる口縁部に至る。端部は尖りぎみに丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ。口縁部ヨコナデ。ヘラミガキは見込みに密な格子状。	黒灰色 器肉乳灰色	やや粗	良好	
—							
264	瓦器 小瓶	7.95 1.06	水平な底部から縦を持って上方へ直線的に伸びる口縁部に至る。端部は尖りぎみに丸く終わる。 指おさえ後ナデ。口縁部ヨコナデ。	黒灰色 器肉灰白色	粗 長石粒多く含む	良	表面剥離
265	瓦器 小瓶	8.7 1.15	水平に近い底部から縦を持って上方へ外反ぎみに伸びる口縁部に至る。端部は外へつままれる。 指おさえ後ナデ。口縁部ヨコナデ。	黒灰色 器肉灰白色	粗	良好	
266	瓦器 小瓶	8.3 1.35	やや深みのある底部から尖り縦を持って斜上方へ外反して伸びる口縁部に至る。端部は内に巻き込むように終わる。 指おさえ後体部ナデ。口縁部ヨコナデ。ヘラミガキは見込みに粗いジグザグ状。	黒灰色 器肉白灰色	やや粗	良好	
—							
267	瓦器 小瓶	8.2 1.2	形態 266 に似るが口縁部は強く外反し、端部は丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ。口縁部ヨコナデ。ヘラミガキは内面口縁部に粗い横方向のもので塗抹められる。	黒灰色 器肉灰白色	やや粗	良好	
268	瓦器 小瓶	8.8 1.5	形態 266 に似るが口縁部は直線的に伸び、端部は丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ。口縁部ヨコナデ。ヘラミガキは内面口縁部に粗い横方向のもので塗抹められる。	黒灰色 器肉灰白色	粗	良好	

造物番号 回数番号	器種	(cm) 口径 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎上	焼成	備考
268	瓦器 小皿	7.6 1.5	底部から縁を持ち、斜上方へ外反した後直線的に伸びる口縁部に至る。端部は外傾する丸みのある面を持つ。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。見込みにヘラミガキが認められる。	灰黒色 器内灰白色	やや粗	良好	
270	瓦器 小皿	7.8 1.5	底部から縁を持ち、外反して伸びる口縁部に至る。端部は先太となり、内へ巻き込むよう丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘラミガキは見込みに粗い横方向。	黒灰色 器内乳灰色	やや粗	良好	
271	瓦器 小皿	8.2 —	形態270に似るが器内側。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘラミガキは見込みに粗い横方向。	灰白色	やや粗 長石粒多く含む	良好	焼成吸収不良
272	瓦器 小皿	8.3 —	丸みのある底部から縁を持って斜上方へ外反して伸びる口縁部に至る。端部は器内を越えて丸く終わる。 体部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘラミガキは外縁部。内面口縁部にやや粗い横方向。	灰黑色 器内白灰色	やや粗	良好	
273	瓦器 小皿	8.3 2.05	半球形を呈する深い底盤から縁を持って斜上方へ外反する口縁部に至る。端部は先細となり内に尖りぎみに終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘラミガキは内面口縁部に横方向のもの認められる。	黒灰色 器内灰白色	やや粗	良好	土器集積
一一	瓦器 小皿	10.2 —	丸みのある底盤から斜上方へ直線的に伸びる口縁部に至る。端部は外傾する丸みのある面を持つ。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘラミガキは見込みにわずかに認められる。	黒灰色 器内灰白色	やや粗	良好	
275	須恵器 盤	27.6 —	体部から斜上方へ外反する口縁部。口縁部上面、端部外側は凹面となり、上面はつまみ上げられる。 回転ナデ。	外面黒灰色 内面、器内 灰黑色	粗 長石粒多く含む	良好	内面口縁部上端に灰かぶり
276	須恵器 盤	28.0 —	上外方へ直線的に伸びた後外反ぎとなる口縁部。端部は先細となり、外傾する面を持つ。 回転ナデ。	灰白色	粗	良好	
277	須恵器 小型杯	6.0 1.8	水平な底盤から上外方へ直線的に伸びた後斜上方へ外反する口縁部に至る。端部は丸く終わる。 外縁底部回転糸切り。他は回転ナデ。	淡青灰色	やや粗 石英・長石 粒多く含む	良好	外縁部に自然釉
一一	白磁 碗	— — 高台径 7.1 高台高 1.4	上面が水平で下が突出する底盤から、斜上方へ内側して立ち上がる。内面に沈線が付く。 外縁・高台内にカッターナイフ。	胎・白色薄 く光沢なし 白灰色 素	白灰色 素	良好	高台盤から高台内に輪なたれ

遺物名	器種	(cm) 口径 底径	形態・調査等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
279	土師器 羽釜	22.2 — 口径 32.75	上内方へ直線的に伸びる頸部から器内を増して直立する口縁部に至る。底部は丸く終わる。脚はほぼ水平に付く。底部は丸く終わる。 外腹ナデ後口縁部、脚上下ヨコナデ。内腹頸部ナデ、口縁部ヨコナデ。	淡褐色 器内淡赤褐色	粗	良好	外面に焼付着
280	土師器 羽釜	26.0 — 口径 33.6	斜内方へ内窪ぎみに伸びる頸部から「く」の字形に屈曲し、直立する口縁部に至る。底部は丸く終わる。脚は基部を残して欠ける。 外腹ナデ後口縁部、脚上下ヨコナデ。内腹頸部ナデ、口縁部ヨコナデ。	淡褐色～淡赤褐色	粗 2～3mmチャート含む	良	口縁端部・ 外腹体部に 焼付着
281	土師器 羽釜	27.1 — 口径 32.3	上内方へ内窪ぎみに伸びる頸部から丸く外反する口縁部に至る。底部は尖りぎみに終わる。脚は基部を残して欠ける。 外腹ナデ後口縁部、脚上下ヨコナデ。内腹頸部ナデ、口縁部ヨコナデ。	暗褐色 器内淡赤褐色	粗	良好	外面焼付着
282	土師器 羽釜	27.7 — 口径 38.1	上内方へ直線的に伸びる頸部から「く」の字形に屈曲して外反する口縁部に至る。脚は水平に伸びる。 外腹ナデ後口縁部、脚上下ヨコナデ、頸部ナデ、口縁部ヨコナデ。	内面暗褐色 外腹淡褐色 器内赤褐色	粗		脚以下に焼付着
283	土師器 羽釜	28.0 — 口径 36.65	斜内方へ直線的に伸びる頸部から、丸みのある「く」の字形に屈曲する口縁部に至る。底部は丸く終わる。脚は接合部から欠ける。 外腹体部ヘラケズリ後ナデ、頸部ナデ、口縁部ヨコナデ。内腹頸部ナデ、口縁部ヨコナデ。	茶褐色～淡褐色、器内淡褐色	粗	良	体部に焼付着
284	土師器 羽釜	30.0 — 口径 39.25	斜内方へ直線的に伸びる頸部から「く」の字形に屈曲する口縁部に至る。底部は尖りぎみに終わる。脚は下がりぎみに付く。 外腹ヨコナデ。内腹頸部ナデ、口縁部ヨコナデ。	茶褐色～淡褐色 器内淡褐色	粗	良好	脚以下に焼付着
285	土師器 羽釜	26.5 — 口径 37.9	張りの少ない底・体部。上内方へ直線的に伸びる頸部から短く屈曲する口縁部に至る。底部は丸く終わる。脚は下がりぎみに付く。 外腹体部ヘラケズリ後ナデ、頸部ナデ、口縁部、脚上下ヨコナデ。内腹体部、頸部ナデ、口縁部ヨコナデ。	淡褐色 器内淡赤褐色	粗	良好	外腹以下・ 内面下半に 焼付着 上器束縫
一-二							
286	瓦質土器 羽釜	16.35 — 口径 20.85	斜内方へ直線的に伸びる口縁部。底部は内側する面を持つ。脚は断面三角形で短く、上面は水平。 外腹ヨコナデ。内腹頸部ナデ、口縁部ヨコナデ。	黒灰色	粗	良好	脚以下に焼付着
287	瓦質土器 羽釜	19.6 — 口径 26.3	斜内方へ内窪して伸びる口縁部。底部は丸く終わる。脚は近く水平に付く。 ヨコナデ。	外腹墨灰色 内面・器内 灰白色	やや粗	良好	脚以下に焼付着
288	瓦質土器 羽釜	19.8 — 口径 25.8	斜内方へ内窪して伸びる体・口縁部。底部は内側する面を持つ。脚は短く上がりぎみに付く。底部は面を持つ。 外腹体部ヘラケズリ後ナデ、口縁部、脚上下ヨコナデ、内腹ナデ、口縁部ヨコナデ。	外腹灰褐色 内面・器内 淡褐色～淡灰色	密	良好	脚以下に焼付着

登録番号	基種	(cm) 法規 基準	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
289	土師器 小皿	6.7 1.4	水平な底部から鋸い縁を持つ後唇部を越して、斜上方へ内湾して伸びる口縁部に至る。 端部は先太となり巻き込むように丸く終わる。 指おさえ後外面部底へラケズリ・ナデ、口縁部ヨコナデ。内面ヨコナデ。	淡灰褐色	密	良好	
290	土師器 小皿	7.95 —	底部から鋸い縁を持ち、斜上方へ内湾みに伸びる口縁部をもる。端部はつまみ上げぎみとなり、外傾する丸みのある面を持つ。ヨコナデ。	乳褐色	密	良好	
291	土師器 小皿	8.8 1.0	底部から鋸い縁を持って一旦外反した後斜上方へ直線的に伸びる口縁部に至る。端部はつまみ上げぎみで、外に重複した面を持つ。 外面部底ナデ、口縁部ヨコナデ。内面ヨコナデ。	淡灰褐色	密	良好	
292	土師器 小皿	9.0 1.6	斜上方へ内湾して伸びる底部へ口縁部。端部は内へ巻き込み、外傾する丸みのある面を持つ。 外面部底ナデ、口縁部ヨコナデ。内面ヨコナデ。	淡灰褐色	密	良好	
293	土師器 小皿	9.05 1.3	外上方へ内湾して伸びる底部へ口縁部。端部は丸く終わる。 外面部底ナデ、口縁部ヨコナデ。内面ヨコナデ。	淡灰褐色	やや粗	良好	
294	土師器 小皿	9.1 1.05	水平な底部から鋸い縁を持って一旦外反した後斜上方へ内湾ぎみに伸びる口縁部に至る。 端部はつまみ上げぎみに丸く終わる。 外面部底ヘラケズリ後ナデ、口縁部ヨコナデ。内面ヨコナデ。	外面部暗褐色～淡灰褐色 内面部暗褐色	密	良好	
295	土師器 小皿	9.55 —	斜上方へ内湾して伸びる底部へ口縁部。端部は先細となって丸く終わる。 ヨコナデ。	乳褐色	やや粗	良好	
296	土師器 小皿	9.35 —	外上方へ内湾する底部から、わずかに外反する口縁部に至る。端部は丸く終わる。 指おさえ後外面部底ナデ、口縁部ヨコナデ。内面ヨコナデ。	乳黄色	やや粗 赤色氧化鉄 多く含む	良好	
297	土師器 小皿	9.6 1.4	底部から丸く立ち上がり、外反して外へ伸びる口縁部に至る。端部は内へ巻き込んで終わる。 指おさえ後外面部底ナデ、口縁部ヨコナデ。内面ヨコナデ。	淡緑色	粗良	良好	
298	土師器 小皿	9.6 1.45	外上方へ直線的に伸びる底基からわずかに外反する口縁部に至る。端部は巻き込むようにならへ終わる。 指おさえ後外面部底ナデ、口縁部ヨコナデ。内面底部一定方向のナデ、口縁部ヨコナデ。	外面部黃褐色～乳褐色 内面部淡褐色～乳褐色	やや粗	良好	煙心油痕あり

器種 区分	器種 名	(cm) 法量	口径 部	形態・調整等の特徴	色調	胎土	性成	備考
299 一三	瓦器 小皿	9.3 1.7	—	斜上方へ内側して伸びる底部から外に縁を持ち、斜上方へ外反きみに伸びる口縁部に至る。端部は外へつづり出される。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘラミガキは内面口縁部密な横方向、見込みは粗く乱れたジグザグ状。	黒灰色 器内灰白色	やや粗 器内灰白色	良好	
300	瓦器 碗	13.1	—	斜上方へ内側して伸びる体部から、直線的に伸びる口縁部に至る。端部は丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘラミガキは外面口縁部横方向に、内面体部密な横方向、見込みから粗くものか粗い平行線状のものが体部中位に認められる。	外面黒褐色 ～乳灰色 器内黑色 器内灰白色	密	良	
301	瓦器 碗	12.95	—	上外方へ内側きみに伸びる体部からわざかに外反する口縁部に至る。端部は器内を減じ丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘラミガキは外面体部粗い横方向、内面やや粗い横方向。	黒灰色 器内白灰色	やや粗 器内白灰色	良好	
303	瓦器 碗	14.3	—	斜上方へ内側きみに伸びる体部から縁を持った後器部を減じ、直線的に伸びる口縁部に至る。端部は尖りがみに終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘラミガキは外面体部粗い横方向、内面やや粗い横方向。	黒灰色～灰 色 器内白灰色	やや粗 器内白灰色	良好	
303	瓦器 碗	14.8	—	上外方へ直線的に伸びる体部から外に縁を持ち、斜上方へ外反する口縁部に至る。端部は器内を減じて丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘラミガキは外面やや粗い横方向、内面密な横方向。	灰黒色～乳 白色 器内乳白色	やや粗 器内乳白色	良好	
304	瓦器 碗	15.5	—	斜上方へ内側して伸びる体部からわざかに直線的に伸びる口縁部に至る。端部は外へ尖りがみに終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘラミガキは外面やや粗い横方向、内面密な横方向。	黒灰色 器内乳白色	密	良好	
305	瓦器 碗	15.6	—	斜上方へ内側して伸びる体部～口縁部。端部は丸く終わる。 指おさえ後外側体部ナデ、口縁部ヨコナデ。内面体部左縁のハケナデ、口縁部ヨコナデ。ヘラミガキは外側体部上半～口縁部や粗い横方向、内面体部粗い横方向。	黒灰色 器内灰白色	やや粗 器内灰白色	良好	
306	瓦器 碗	17.55	—	斜上方へ内側して伸びる体部～口縁部。端部は器内を減じて丸く終わる。 指おさえ後外側体部ナデ、口縁部ヨコナデ。内面体部右縁のハケナデ、口縁部ヨコナデ。ヘラミガキは外面、内面とも粗い横方向。	黒灰色 器内灰白色	やや粗 器内灰白色	良好	
307	瓦器 碗	13.0	—	上外方へ直線的に伸びる体部～口縁部。端部は丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘラミガキは外面体部と口縁部の間に横方向のもの2～3条、内面粗い横方向。	乳白色	やや粗 器内白灰色	良	炭素吸着不 良
308	瓦器 碗	13.0	—	上外方へ内側きみに伸びる体部～口縁部。端部は器内を減じて丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘラミガキは外面体部と口縁部の間に横方向のもの2～3条、内面粗い横方向。	黒灰色 器内白灰色	やや粗 器内白灰色	良好	

器種	(cm) 口径 法量 基準	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
309 瓦器 碗	15.65 —	斜上方へ直線的に伸びる体部から器肉を越して口縁部に至る。端部は丸く終わる。 指おさえ後体部ナダ、口縁部ヨコナダ。ヘラミガキは内面体部粗い横方向。	灰黒色 器肉灰白色	やや粗	良好	
310 瓦器 碗	13.8 —	斜上方へ直線的に伸びる体部からわざかに外反する口縁部に至る。端部は外へ尖りぎみに終わる。 指おさえ後体部ナダ、口縁部ヨコナダ。ヘラミガキは内面体部粗い横方向。	外面灰紫色 内面灰黑色～灰黑色 器肉淡灰色	やや粗	良好	
311 瓦器 碗	14.2 —	斜上方へ直線的に伸びる体部からわざかに外反する口縁部に至る。端部は先太となり、丸く終わる。 指おさえ後体部ナダ、口縁部ヨコナダ。ヘラミガキは内面体部粗い横方向。	黒灰色 器肉白灰色	やや粗	良好	
312 瓦器 碗	— 高台径 5.6 高台高 0.55	水平な底部に断面丸みのある逆V角形の高台が垂直に付く。 指おさえ後ナダ、高台周囲ヨコナダ。ヘラミガキは見込みに単位幅広く密なジグザグ状。	黒灰色 器肉白灰色	やや粗	良好	
313 瓦器 碗	— 高台径 5.2 高台高 0.6	水平な底部に断面逆V角形の高台が垂直に付く。 指おさえ後ナダ、高台周囲ヨコナダ。ヘラミガキは見込みに単位幅広く粗い格子状。	黒灰色 器肉白灰色	やや粗	良好	
314 須恵器 ねり鉢	28.75 —	底部から丸みを持った立ち上がり、斜上方へ直線的に伸びる体部から、内傾する口縁部に至る。端部は尖りぎみに終わる。 回転ナダ。	淡青灰色 口縁部黒灰色	粗	良好	重ね焼き痕 灰かぶり SK-2出土の破片と接合
—						

## SK-4

器種	(cm) 口径 法量 基準	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
315 土師器 小皿	9.4 1.8	丸みのある底盤から縁を持ち、斜上方へ外反ぎみに伸びる口縁部に至る。端部は外へつまみ出される。 指おさえ後底部ナダ、口縁部ヨコナダ。内面ヨコナダ。	乳黄色～淡 褐色	やや粗	良好	
316 土師器 小皿	9.4 1.5	外上方へ直線的に伸びる底部から丸く立ち上がり、斜上方へ直線的に伸びる口縁部に至る。端部は器肉を減じて外へ尖りぎみに終わる。 外面底部ナダ、口縁部ヨコナダ。内面ヨコナダ。	外面灰褐色 内面暗赤褐色	密	良好	外面に彫付 看
—						
317 土師器 小皿	9.65 1.4	水平に近い底盤から丸く立ち上がり、斜上方へ直線的に伸びる口縁部に至る。端部は器肉を減じて外へ尖りぎみに終わる。 指おさえ後表面底部ナダ、口縁部ヨコナダ。内面ヨコナダ。	乳白色～乳 灰色	密	良	

遺物番号 部類番号	器種	(cm) 口径 法量 基高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
318	土器器 中皿	13.8 2.45	外上方へ直線的に伸びる底盤から純い縁を持ち、斜上方へ外反ぎに伸びる口縁部に至る。端部は尖りぎみに終わる。 底盤ナデ。口縁部ヨコナデ。	乳白色	やや粗 赤色酸化鉄 多く含む	良	
319	土器器 中皿	16.4 —	外上方へ内湾ぎみに伸びる底盤から純い縁を持ち、斜上方へ直線的に伸びる口縁部に至る。端部は外傾する面を持つ。 外面部ナデ、口縁部ヨコナデ。内面ヨコナデ。	乳白色 器肉灰黑色	密	良好	
320	瓦器 碗	15.4 —	上方へ直線的に伸びた後斜上方へ外反する口縁部。端部は尖て終わる。 ヨコナデ。ヘラミガキは外側密な横方向。	乳白色	やや粗	良	炭素吸着不良
321	瓦器 碗	— 高台径 6.2 高台高 0.5	水平な底盤から外上方へ直線的に伸び、全体に至る。高台は断面三三角形で垂直に行く。 外面部ナデ後高台周囲ヨコナデ。内面ナデ後見込み格子状のヘラミガキ。体部密な横ヘラミガキ。	黒灰色 器肉灰白色	やや粗	良好	

## SK-5

遺物番号 部類番号	器種	(cm) 口径 法量 基高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
322	土器器 小皿	12.8 —	斜上方へ内湾して伸びる底盤から、直線的に伸びる口縁部に至る。端部は外に面を持つつまり上げぎみに終わる。 指おさえ後外側底部ナデ、口縁部ヨコナデ。内面ヨコナデ。	淡灰褐色	やや粗	良好	

## SK-6

遺物番号 部類番号	器種	(cm) 口径 法量 基高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
323	土器器 小皿	8.4 —	底盤から外に純い縁を持った後、斜上方へ内湾ぎみに伸びる口縁部に至る。端部は尖りぎみに丸く終わる。 外面部ナデ、口縁部ヨコナデ、内面ヨコナデ。	乳白色	密 赤色酸化鉄 多く含む	良好	
324	土器器 小皿	8.15 1.3	底盤から外に純い縁を持った後、斜上方へわずかに内凹ぎみに伸びる口縁部に至る。端部は内湾ぎみに立ち上がり、端部は巻き込むようにつまり上げられる。 外面部ナデ、口縁部ヨコナデ、内面ヨコナデ。	乳白色	密	良好	
325	土器器 小皿	8.7 —	底盤から丸く立ち上がり、斜上方へ直線的に伸びる口縁部に至る。端部は外傾する丸みのある面を持つ。 指おさえ後外側底部ナデ、口縁部ヨコナデ。内面ヨコナデ。	淡黄褐色	やや粗	良好	

遺物番号 出所記号	器種	(cm) 口徑 法量	底高	形態・調査等の特徴	色調	胎土	焼成備考
326	土師器 小皿	—	8.7 1.2	水平な底部から外に縁を持ち、斜上方へ外反する口縁部に至る。端部は器肉を減じて外へつり出される。 指おさえ後外面底部へラケズリ・ナデ、口縁部ヨコナデ。内面底部ナデ、口縁部ヨコナデ。	乳黄色	粗 石英・長石 粒多く含む	良好
327	土師器 小皿	—	9.2	外上方へ直線的に伸びる底部から外に縁を持ち、斜上方へ外反する口縁部に至る。端部は器肉を減じ、尖って終わる。 指おさえ後外面底部へラケズリ・ナデ、口縁部ヨコナデ。内面ヨコナデ。	乳黄色	粗 石英粒多く 含む	良好
328	土師器 小皿	—	9.1	外上方へ内湾する底部から外に縁を持ち、斜上方へ外反する口縁部に至る。端部は器肉を減じるようにつまみ上げられる。 指おさえ後外面底部ナデ、口縁部ヨコナデ。内面ヨコナデ。	灰褐色	やや粗	良好
329	土師器 小皿	—	9.3 1.4	外上方へ直線的に伸びる底部から丸く立ち上がり、斜上方へ直線的に伸びる口縁部に至る。端部は尖りざらに終わる。 指おさえ後底部ナデ、口縁部ヨコナデ。	乳白色	密	良好
330	土師器 小皿	—	9.5 1.8	水平な底部から丸く立ち上がり、斜上方へ内湾ざらに伸びる口縁部に至る。端部は尖りざらに丸く終わる。 指おさえ後底部ナデ、口縁部ヨコナデ。	乳灰色 器肉黒灰色	赤色酸化粒 含む	
331	土師器 中皿	—	14.85	底部から丸く立ち上がり、斜上方へ直線的に伸びる口縁部に至る。端部は内側する丸みのある面を持つ。 口縁部2段のヨコナデ。	乳白色～灰 黑色	密	良
332	土師器 中皿	—	15.2	斜上方へ内湾ざらに伸びる体部から、器肉を減じて上外方へ直線的に伸びる口縁部に至る。端部は丸みのある面を持つ。 指おさえ全体部ナデ、口縁部ヨコナデ。	乳白色	密 石英・赤色 酸化粒含む	良好
333	土師器 中皿	—	16.2	斜上方へ内湾ざらに伸びる体部から、角度を変えて上外方へ直線的に伸びる口縁部に至る。端部は内に凹溝状の段を持つ。外へ尖りざらに終わる。 指おさえ後外面底部ナデ、口縁部ヨコナデ。内面ヨコナデ。	外面灰褐色 内面灰褐色	密 赤色酸化粒 多く含む	良好
334	瓦器 小皿	—	10.95	底部から外に鋭い棱を持った後斜上方へ直線的に伸びる口縁部に至る。端部は内に凹溝状の段を持つ。外へ尖りざらに終わる。 指おさえ後底部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘリミガキは内面口縁部に狙い横方向。	灰灰色 器肉白灰色	やや粗	良好
335	瓦器 椀	—	14.95	半球形の体部から外に縁を持った後器内を減じ、上外方へ外反ざらに伸びる口縁部に至る。端部は外へ尖りざらに終わる。 指おさえ全体部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘリミガキは体部やや粗い円錐状。口縁部やや狙い横方向。	灰灰色 器肉灰白色	やや粗	良好

遺物番號	器種	(cm) 口径 基盤 寸法	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
336	瓦器 碗	14.8 — —	半球形の体部から斜上方へ外反して伸びる口縁部に至る。端部は外へつまみ出され、丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘラミガキは外面やや粗い横方向、内面体部密な横方向。	外曲灰黑色 内面墨灰色 器内灰白色	やや粗	良好	
337	瓦器 碗	15.3 — —	上外方へ直線的に伸びる体部から外に縁を持つて端肉を減じ、直線的に伸びる口縁部に至る。端部は上方へ尖りぎみに終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘラミガキは外面やや粗い横方向、内面密な横方向。	焦灰色 器内白灰色	やや粗	良好	
338	瓦器 碗	16.95 — —	上外方へ内凹して伸びるに端へ口縁部。端部は外へ尖りぎみに終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘラミガキは外面やや粗い横方向、内面密な横方向。	焦灰色 器内白灰色	粗	良好	
339	瓦器 碗	17.0 4.96 高台径 6.5 高台高 0.8	半球形の体部から外に縁を持つて上外方へ外反する口縁部に至る。端部は外へ尖る。高台は断面逆三角形で側面に付く。 指おさえ後体部ナデ、口縁部・高台周ヨコナデ。ヘラミガキは外面にやや粗い横方向、内面体部密な横方向。見込み密な一方向。	焦灰色～白 灰色 器内灰白色	やや粗	良好	
340	瓦器 碗	12.8 — —	上外方へ内凹ぎみに伸びる体部から外に縁を持つて上外方へ外反する口縁部に至る。端部は内面を減じ、外へ尖りぎみに終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘラミガキは外面体部に粗い横方向、内面やや粗い横方向。	灰黑色 器内灰白色	粗	良好	
341	瓦器 碗	14.35 — —	斜上方へ内凹する体部から外に純い縁を持ち、蓋肉を減じて内凹して伸びる口縁部に至る。端部は先太となり丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘラミガキは内面体部やや粗い横方向。	灰黑色 器内灰白色	粗	良好	
342	瓦器 碗	14.65 — —	斜上方へ内凹する体部から上外方へ外反ぎみに伸びる口縁部に至る。端部は丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘラミガキは外面部粗い横方向。内面密な横方向。	黑灰色 器内灰白色	やや粗	良好	
343	瓦器 碗	15.6 — —	外上方へ直線的に伸びる体部から上外方へわずかに外反ぎみに伸びる口縁部に至る。端部は丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘラミガキは内面口縁部粗い横方向。見込みから続くもののか細い平行線状のもの認められる。	灰黑色 器内灰白色	粗	良好	
344	瓦器 碗	15.5 — —	斜上方へ直線的に伸びる体部から斜上方へ外反して伸びる口縁部に至る。端部は密肉を減じ、外へつまみ出される。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘラミガキは内面体部粗い横方向。	口縁部黒灰 色 体部・器肉 灰白色	やや粗	良好	
345	瓦器 碗	— — 高台径 5.45 高台高 0.5	高台脇からわずかに張り出した後斜上方へ内凹して伸びる体部に至る。高台は断面逆三角形で裏蓋に行き。 指おさえ後体部ナデ、高台周ヨコナデ。ヘラミガキは断面粗い横方向、内面体部やや粗い横方向。見込みに格子状。	外面、墨灰 色～白灰色 内面、淡灰 色～白灰色 器内白灰色	やや粗	良好	

遺物番号 回収場所	器種	(cm) 口径 基高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
346	瓦器 瓶	— 高台径 6.7 高台高 0.6	水平な底部から一旦張り出し、外上方へ内 消して体部に至る。高台は断面逆台形で「ハ」 の字形に付く。 指おさえ後体部ナデ、高台周囲ヨコナデ。 ヘラミガキは外表面部に密な横方向、見込み に密な乱方向。	黒灰色 器内白灰色	やや粗	良好	
347	瓦器 瓶	— 高台径 6.7 高台高 0.85	外上方へ内消する底部～体部。高台は断面 逆台形で「ハ」の字形に付く。 指おさえ後体部ナデ、高台周囲ヨコナデ。 ヘラミガキは見込みに密な乱方向。	黒灰色 器内白灰色	やや粗	良好	
348	瓦器 瓶	— 高台径 7.0 高台高 0.75	水平な底部に断面U字形の高台が「ハ」の字 形に付く。 指おさえ後ナデ、高台周囲ヨコナデ。	黒灰色 器内淡灰色	やや粗	良好	
349	瓦器 瓶	— 高台径 5.8 高台高 0.95	底部から外上方へ内消して体部に至る。高 台は断面逆台形で「ハ」の字形に付く。 指おさえ後ナデ、高台周囲ヨコナデ。見込み にヘラミガキの痕跡あり。	外表面淡灰色 内面灰黑色 器内白灰色	やや粗	良好	
350	須恵器 鉢	25.4 —	上外方へ直線的に伸びる縁部から、器内を 隠して外反する口経部に至る。端部は外張す る面を持つ。 回転ナデ。	外面白縁部 黒灰色 他は青灰色	やや粗	良好	重ね燒き痕 あり

SK-7

遺物番号 回収場所	器種	(cm) 口径 基高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
351	上縁25 小皿	6.95 —	外上方へ直線的に伸びる底部から純い縁を 持ち、斜上方へ内消して伸びる口経部に至る。 端部は丸く終わる。 外表面部へテケズリ後ナデ。口縁部ヨコナ デ。内面ヨコナデ。	乳褐色 器内淡灰色	密	良好	
352	上縁器 小皿	7.3 0.9	水平に近い断面から丸く立ち上がり、上外 方へ伸びる丸い縁部に至る。端部は丸く終 わる。 指おさえ後外表面底部ナデ。口縁部ヨコナ デ。内面ヨコナデ。	乳褐色 外表面の一部 淡赤褐色	密	良好	
353	上縁器 小皿	7.5 1.3	外上方へ内消して伸びる底部から縁を持っ て立ち上がり、斜上方へ内消して伸びる口経 部に至る。端部はつまみ上げぎみに終わる。 指おさえ後外底部ナデ、口縁部ヨコナデ。 内面ヨコナデ。	淡灰褐色 器内淡灰色	密	良好	
354	土師器 小皿	8.6 1.3	底部から丸く立ち上がり、斜上方へ内消し て伸びる口縁部に至る。端部は外張る丸み のある面を持つ。 外表面底部ナデ、口縁部ヨコナデ。内面ヨコ ナデ。	淡黄色	密	良好	外面白縁部 に焼け跡

遺物番号 回収番号	器種	(cm) 口径 底径	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
355	土師器 小皿	8.3 1.0	底部から縦い棱を持ち、外上方へ直線的に伸びる。端部は上方へつまみ上げる。 外面部ナデ、口縁部ヨコナデ。内面ヨコナデ。	乳褐色	密	良好	
356	土師器 小皿	8.5 1.05	水平な底部から縦を持って立ち上がり、外上方へ内窪ぎに伸びる口縁部に至る。端部は上方へつまみ上げる。 指おさえ後外面部ナラケズリ・ナデ、口縁部ヨコナデ。内面部ナデ、口縁部ヨコナデ。	乳褐色	密	良好	
357	土師器 小皿	10.35 1.1	水平な底部から縦を持って立ち上がり、斜上方へ直線的に伸びる口縁部に至る。端部は丸く終わる。 指おさえ後外面部ナデ、口縁部ヨコナデ。内面ヨコナデ。	外面部褐色 内面部黄色 ～暗褐色	密	良好	
358	土師器 中皿	12.6 2.1	上方へ突出する底部から丸く立ち上がり、縦を持った浅斜上方へ外反窪みに伸びる口縁部に至る。端部は上方へ立ち上がり、外傾する面を持つ。 指おさえ後外面部ナデ、口縁部ヨコナデ。内面ヨコナデ。	外面部灰褐色 内面部灰褐色	密	良好	
359	土師器 中皿	13.05 —	底部との境に縦を持ち、斜上方へ直線的に伸びる口縁部に至る。端部は外傾する面を持つ。 指おさえ後外面部ナラケズリ・ナデ、口縁部ヨコナデ。内面部ナデ、口縁部ヨコナデ。	外面部灰色 内面部乳褐色	密	良好	
360	瓦器 小皿	10.8 1.65	底部から丸く立ち上がり、外に縦を持った後斜上方へ外反窪みに伸びる口縁部に至る。 端部は器肉を減じて外へ突いて終わる。 外面部ナデ、口縁部ヨコナデ。内面ヨコナデ。ヘラミガキは外面やや粗い斜方向、内面密な横方向。	乳白色 深灰褐色	密	良	炭素吸着不良
361	瓦器 機	14.6 —	斜上方へ内窪して伸びる体部～口縁部。端部は直立せずとなり、丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘラミガキは内面やや粗い横方向。	黒灰色 器肉灰褐色	やや粗	良好	
362	瓦器 機	— 高台径 5.2 高台高 0.4	やや丸みのある底部。高台は断面逆三角形で垂直に付く。 外面部ナデ、高台の周囲ヨコナデ。ヘラミガキは見込みに墨巻状。	黒灰色 器肉灰白色	密	良好	

## SP-2

遺物番号 内訳番号	器種	(cm) 口径 法量 容積	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
363	土師器 小皿	7.9 1.7	丸みのある底部分から斜上方へ漸傾的に伸びる口縁部に至る。端部はつまみ上げぎみとなり、外輪する唇を持つ。 外輪底部ナデ、口縁部ヨコナデ。内面ヨコナデ。	乳褐色	密	良好	
364	土師器 小皿	8.45 1.2	上方へわずかに突出する底部分から斜上方へ漸傾的に伸びる口縁部に至る。端部は丸く終わる。 指おさえ後外輪底部ヘラケズリ・ナデ、口縁部ヨコナデ。内面底部ナデ、口縁部ヨコナデ。	乳褐色	密	良好	外周口縁部に傷付有
一三							
365	土器 中皿	18.0 —	底部分から丸く盛山し、上外方へ外反ぎみに伸びる口縁部に至る。端部は内側ぎみとなり丸く終わる。 2段のヨコナデ。	淡灰色 器内黒灰色	密	良	

## SP-4

遺物番号 内訳番号	器種	(cm) 口径 法量 容積	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
366	土師器 中皿	13.9 —	外上方へ内側して伸びる底部分から上外方へ外反して伸びる口縁部に至る。端部は尖りぎみに丸く終わる。 底部ナデ、口縁部ヨコナデ。	乳黄色～淡 褐色	やや粗 石英・赤色 酸化鉄含む	良好	

## SP-5

遺物番号 内訳番号	器種	(cm) 口径 法量 容積	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
367	瓦器 碗	14.9 —	上外方へ内側ぎみに伸び、器内を盛じて外反する口縁部に至る。端部は丸く終わる。 体部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘラミガキは外輪用い横方向、内面密な横方向。	墨灰色 器内淡灰色	密	良好	

## 第3調査区包含層

遺物番号 内訳番号	器種	(cm) 口径 法量 容積	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
368	土師器 小皿	9.8 —	斜上方へ内側して伸びる底部分から盛山し、水平に伸びる口縁部に至る。端部は内に巻き込み。 指おさえ後外輪底部ナデ、口縁部強いヨコナデ。内面強いヨコナデ。	乳褐色	稍粗	良好	
369	土師器 小皿	8.0 1.8	丸みのある底部分から口縁部まで、斜上方へ内側して伸びる。端部は巻き込むように丸く終わる。 外輪底部ナデ、口縁部ヨコナデ。内面底部円周方向のハケ、口縁部ヨコナデ。	淡赤褐色～ 乳白色	密	良好	

遺物番号 図版番号	器種	(cm) 口径 法量	形態・調査等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
370	土師器 小皿	8.8 1.5	形態369に似るが器内薄い。 外面部・内面底部ナデ、口縁部ヨコナデ。	乳褐色～乳 橙色	密	良	一次焼成を うける
371	土師器 小皿	9.0 1.65	形態369に似るが口縁端部は器内を減じて 丸く終わる。 指おさえ後外面部底部ナデ、口縁部ヨコナデ。 内面底部一方向のハケ後口縁部ヨコナデ。	灰褐色 外面部の み乳橙色	密	良好	二次焼成を うける
—3							
372	土師器 小皿	9.2 2.2	底部から斜上方へ内側して伸びる深めの器 形。口縁部は斜上方へ直線的に伸びる。端部 は外へとまき出される。 指おさえ後外面部底部ヘラケズリ・ナデ、口 縁部ヨコナデ。内面ハケ状工具による内周方 向のナデ後口縁部ヨコナデ。	乳褐色	粗良	良好	
373	土師器 小皿	7.6 1.4	水平に丸く底部から丸く立ち上がり、上外 方へ直線的に伸びる口縁部に至る。端部は丸 く終わる。 底部ナデ、口縁部ヨコナデ。	淡灰褐色	密	良好	
374	土師器 小皿	8.0 1.65	上方へわずかに突出する底部から丸く立ち 上がり、斜上方へ直線的に伸びる口縁部に至 る。端部は丸く終わる。 指おさえ後外面部底部ナデ、口縁部ヨコナデ。 内面底部ナデ、口縁部ヨコナデ。	暗褐色～暗 灰褐色 器肉は赤褐 色	密	良	二次焼成を うける
—3							
375	土師器 小皿	8.4 1.4	底部から丸く立ち上がり、斜上方へ内側し て伸びる口縁部に至る。端部は丸く終わる。 指おさえ後底部ナデ、口縁部ヨコナデ。	灰褐色	密	良好	
376	土師器 小皿	8.4 1.6	上方へ突出する底部から丸く立ち上がり、 斜上方へ直線的に伸びる口縁部に至る。端部 は丸く終わる。 指おさえ後外面部ヨコナデ、内面底部 ナデ、口縁部ヨコナデ。	乳灰褐色	粗良	良好	
377	土師器 小皿	9.05 1.4	底部から斜上方へ内側して伸びる口縁部。 端部は器内減じて丸く終わる。 ヨコナデ。	乳褐色	粗良 赤色酸化粒 含む	良	
378	土師器 小皿	8.0 1.25	水平な底部から丸く屈曲し、上外方へ直線 的に伸びる口縁部に至る。端部は尖りぎみに 終わる。 底部ナデ、口縁部ヨコナデ。	淡茶褐色	密	良好	
379	土師器 小皿	8.15 1.4	上方へわずかに突出する底部から鋸い縁を 持つ屈曲し、上外方へ直線的に伸びる口縁 部に至る。端部は丸く終わる。 指おさえ後、底部ナデ、口縁部ヨコナデ。	淡灰褐色	密	良好	

遺物番号 測定番号	器種	(cm) 口徑 深さ	形態・調査等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
380	土師器 小皿	8.6 1.3	水平な底面から純い壁を持って屈曲し、斜上方へ直線的に伸びる口縁部に至る。端部は外傾する面を持つ。 底部ナデ、口縁部ヨコナデ。	外面淡灰褐色 内面淡青褐色～明褐色	密	良好	
381	土師器 小皿	8.45 1.15	形態380に似るが底内薄く、口縁部は丸く終わる。 指おさえ後底部ナデ、口縁部ヨコナデ。	淡灰褐色	密	良	
382	土師器 小皿	9.0 1.35	形態380に似るが口縁部丸く終わる。 底部ナデ、口縁部ヨコナデ。	淡灰褐色	密	良好	
383	土師器 小皿	7.5 1.15	水平に近い底部から壁を持って屈折し、斜上方へ外反ぎみに伸びる口縁部に至る。端部は外へつまみ出される。 底部ナデ、口縁部ヨコナデ。	淡灰褐色	密	良好	
384	土師器 小皿	7.5 1.2	水平な底部から純い壁を持って屈曲し、上方へ外反ぎみに伸びる口縁部に至る。端部は丸く終わる。 底部ナデ、口縁部ヨコナデ。	淡灰褐色	密	良好	
385	土師器 小皿	8.2 1.2	水平な底面から純い壁を持って屈曲し、斜上方へ内凹して伸びる口縁部に至る。端部は丸く終わる。 底部ナデ、口縁部ヨコナデ。	茶褐色～赤褐色	密	良好	燈心油痕あり
386	七輪器 小皿	8.1 1.1	水平な底部から純い壁を持って屈曲し、斜上方へ外反ぎみに伸びる口縁部に至る。端部は丸く終わる。 底部ナデ、口縁部ヨコナデ。	淡茶褐色 内面の一部乳白色	密	良	
387	七輪器 小皿	8.55 1.3	形態386に似るが器内厚く、口縁端部は外傾する面を持つ。 底部ナデ、口縁部ヨコナデ。	淡茶褐色	密	良好	
388	十輪器 中皿	12.75 2.7	水平な底部から外上方へ伸びた後純い壁を持って上外方へ内凹ぎみに伸びる口縁部に至る。端部は外傾する面を持つ。 指おさえ後外面底盤ヘラケズリ・ナデ。内面底盤一方向ナデ、口縁部ヨコナデ。	外面淡灰褐色 内面淡黄色	密	良好	外面底部に黒斑あり
一四	十輪器 中皿	13.8 3.2	底部から丸く開曲し、外反ぎみに伸びる口縁部に至る。端部はつまみ上げ、外に垂肉な凹面を持つ。 底部ナデ、口縁部ヨコナデ。	淡灰褐色～ 淡黃褐色	密	良好	

遺物番号 出土地名	器種	(cm) 口径 法算 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
390	土師器 中腹	12.0 —	外上方へ直線的に伸びた後斜上方へ内向き みに伸びる口縁部。端部は尖りぎみに終わる。 口縁部のヨコナデの他不明。	淡灰褐色～ 淡黄色	密	良	
391	土師器 中腹	12.6 —	斜上方へ内側して伸びる口縁部。端部は尖 りぎみに丸く終わる。 ヨコナデ。	淡灰褐色～ 乳褐色	粗	良好	
392	土師器 中腹	13.1 2.2	水平に近い底部から丸く屈曲し、斜上方へ 直線的に伸びる口縁部に至る。端部は丸みの ある面を持つ。 底部ナデ、口縁部ヨコナデ。	淡褐色～淡 灰褐色	密	良好	
393	土師器 中腹	13.8 —	外上方へ直線的に伸びる口縁部。端部は立 ち上がりぎみとなって丸く終わる。 ヨコナデ。	淡褐色	密	良好	
394	土師器 中腹	7.5 1.8	底部から丸く屈曲し、外上方へ外反ぎみに 伸びる口縁部に至る。端部は上方へ尖りぎみ に終わる。 ヨコナデ。	淡褐色	密 2mm前後の 石英含む	良好	
395	土師器 中腹	14.9 —	外上方へ直線的に伸びる口縁部。端部は唇 肉を減じて外へつまみ出される。 底部ナデ、口縁部ヨコナデ。	淡黄褐色～ 灰褐色	密	良好	二次焼成を うける
396	瓦器 柄	12.7 —	半球形を呈する体部～口縁部。口縁部は器肉 を減じて斜上方へつまみ出され。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。 ハラミガキは外面、内面ともに常に 施されるが不明瞭。	暗灰色 器内灰色	粗	良好	
397	瓦器 柄	14.3 5.45 高台径5.45 高台高0.65	半球形を呈する。口縁部は上方へわざかに 外反して伸び、端部は尖って終わる。高台は 断面U字形で垂直に付く。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。 ハラミガキは外面不明、内面体部密 な横方向、見込み衝な一方向。	外面灰黑色 ～白灰色 内面墨灰色 器肉白灰色	やや粗	良	外面表皮剥 離
398	瓦器 柄	14.4 —	浅めの半球形を呈する体部。口縁部は器肉 を減じて端部は丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。 ハラミガキは外面やや横方向、内面体部や や粗い横方向、見込み衝な格子状？。	黑灰色 器肉灰白色	やや粗	良好	
399	瓦器 柄	14.7 —	上外方へ内側して伸びる体部～口縁部。口 縁部はわざかに先太となり、端部は丸く終 わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。 ハラミガキは外面やや横方向、内面体部や や粗い横方向、見込み衝な格子状？。	黑灰色 器肉灰白色	やや粗	良好	

登録番号 同梱品番	器種	(cm) 口縫 法幅	形態・調整等の特徴	色調	胎土	養成備考
400	瓦器 輪	16.4 — 高台径 — 高台高 —	半球形を呈する体部から縁を持って外反し た後、斜上方へ直線的に伸びる口縫部に至る。 端部は丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縫部・高台上方ヨコナデ。ヘラミガキは外側やや粗い斜方向。 内面体部窪み内凹状、口縫部窪み横方向。	黒灰色 器内白灰色	やや粗 良好	
401	瓦器 輪	14.0 4.1 高台径 5.9 高台高 0.4	中央が膨らむ底部から外上方へ直線的に伸びる体部～口縫部。端部は丸く終わる。高台は 断面台形で「ハ」の字形に付く。 指おさえ後体部ナデ、口縫部・高台上下ヨコナデ。ヘラミガキは内面口縫部・体部下位にやや粗い横方向。見込みに窪み平行線状。	灰黒色 器内灰白色	やや粗 良好	
一四						
402	瓦器 輪	13.8 —	斜上方へ直線的に伸びる体部～口縫部。端部は丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縫部ヨコナデ。ヘラミガキは内面体部粗い横方向。見込み粗い平行線状。	外面灰黑色 内面灰黑色 器内灰白色	やや粗 良	
403	瓦器 輪	14.1 —	外上方へ内溝して伸びる体部から、斜上方へ直線的に伸びる口縫部に至る。端部は丸く 終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縫部ヨコナデ。ヘラミガキは内面体部粗い横方向。見込み粗い 平行線状。	黒灰色 器内灰白色	やや粗 良好	
404	瓦器 輪	14.5 —	外上方へ内溝する体部から斜上方へ外反さ みに伸びる口縫部に至る。端部は丸太となり 丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縫部ヨコナデ。ヘ ラミガキは内面やや粗い横方向。	灰黒色 器内灰白色	やや粗 良好	
405	瓦器 輪	14.4 —	外上方へ内溝する体部から斜上方へ直線的 に伸びる口縫部に至る。端部は丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縫部ヨコナデ。ヘ ラミガキは内面体部下部に粗い横方向。	灰黒色～暗 灰色 器内灰白色	やや粗 良好	
406	瓦器 輪	15.8 —	斜上方へ内溝する体部～口縫部。端部は丸 く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縫部ヨコナデ。ヘ ラミガキは内面粗い横方向。	黒灰色～灰 白色 器内灰白色	やや粗 良好	
407	瓦器 輪	11.0 —	外上方へ直線的に伸びる体部から縁を持ち 外上方へ外反する口縫部に至る。端部は丸く 終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縫部ヨコナデ。ヘ ラミガキは内面口縫部横方向に2条認められ る。	外面灰黑色 ～灰白色 内面灰黑色 器内灰白色	やや粗 良	
408	瓦器 輪	14.1 —	斜上方へ直線的に伸びる体部～口縫部。端 部は尖りぎみに丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縫部ヨコナデ。ヘ ラミガキは内面粗い横方向。	暗灰色～灰 白色 器内灰白色～ 灰白色	やや粗 良	
409	瓦器 輪	14.06 —	斜上方へ直線的に伸びる体部から縁を持ち 外上方へ外反して伸びる口縫部に至る。端部 は丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縫部ヨコナデ。ヘ ラミガキは内面粗い横方向(過急状?)。	黒灰色 器内白灰色	やや粗 良好	

遺物番号 回数番号	器種	(cm) 口径 法量	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
410	瓦器 碗	14.4 —	斜上方へ内溝する体部から、上外方へ直線的に伸びる口縁部に至る。端部は先太となり丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘラミガキは内面体部中位に粗い横方向のものをまとめて施す。	黒灰色～灰 色 器肉灰白色	やや粗	良好	炭素吸着や や不均
411	瓦器 碗	15.0 —	上外方へ直線的に伸びる体部～口縁部。端部は丸く終わる。 指おさえ後体部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘラミガキは内面やや粗い右上り斜方向。	黒灰色 器肉灰白色	やや粗	良好	
412	瓦器 碗	— 高台径 5.7 高台高 0.6	断面逆三角形の高台が「ハ」の字形に付く。 ナデ、高台周囲ヨコナデ。ヘラミガキは見込みに格子状。	外面暗灰色 ～白灰色 内面墨灰色 器肉灰白色	密	良好	外面表皮剥離
413	瓦器 碗	— 高台径 5.35 高台高 0.5	中央部がわざかに探し底部から外上方へ直線的に伸びる。高台は断面逆三角形で「ハ」の字形に付く。 ナデ、高台周囲ヨコナデ。ヘラミガキは見込みに粗い平行線状。	外面暗灰色 内面墨灰色 器肉灰白色	密	良好	外面表皮剥離
414	瓦器 碗	— 高台径 4.1 高台高 0.35	水平に近い底部に断面逆三角形の底い高台 が垂直に付く。 ナデ、高台周囲ヨコナデ。ヘラミガキは見込みに単位幅の狭いジグザグ状。	黒灰色 器肉灰白色	やや粗	良好	
415	瓦器 碗	— 高台径 4.9 高台高 0.8	水平に近い底部から外上方へ内溝して伸びる。 高台は断面逆三角形で底く垂溝に付く。 指おさえ後ナデ、高台周囲ヨコナデ。ヘラミガキは見込みにきわめて粗い平行線状か？ 体部に横方向のものも1条認められる。	黒灰色 器肉灰白色	やや粗	良好	
416	瓦器 碗	— 高台径 4.4 高台高 0.25	水平に近い底部から斜上方へ内溝して伸びる。 高台は底平で不規則。 指おさえ後ナデ、高台周囲ヨコナデ。ヘラミガキは見込みに單位幅狭く不規則な平行線状。	灰色 器肉灰白色	粗	良	炭素吸着不良
417	瓦器 碗	— 高台径 3.7 高台高 0.15	水平に近い底部から外上方へ内溝して伸びる。 高台はきわめて低く、高台の後削を果たしていない。 指おさえ後ナデ、高台周囲ヨコナデ。ヘラミガキは見込みに平行線状。	灰白色～乳 白色	密	良	炭素吸着不良
418	瓦器 碗	— 高台径 5.1 高台高 0.25	水平な底部から外上方へ直線的に伸びる。 高台はきわめて低く、高台の後削を果たしていない。 ナデ、高台周囲ヨコナデ。ヘラミガキは粗い溝巻状か。	灰色 器肉灰白色	やや粗	良	炭素吸着不良
419	瓦器 碗	— 高台径 3.6 高台高 0.2	半球形を呈する底部～体部。高台は断面逆三角形で小型、垂溝に付く。 指おさえ後ナデ、高台周囲ヨコナデ。ヘラミガキは内面体部横方向、見込み連絡状。	黒灰色 器肉灰白色	やや粗	良好	

遺物番号 出典あり	器種	(cm) 法縫 厚高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
420	瓦器 小皿	8.8 —	外上方へ内窪する底盤から角度をえめて上外方へ外反ぎみに伸びる口縁部に至る。端部は内方する丸みのある面を持つ。 指おさえ後底部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘラミガキは内面口縁部密な横方向、見込み單位幅狭く密な平行線状。	黒灰色 器内灰白色	やや粗	良好	
421	瓦器 小皿	8.6 —	外上方へ内窪して伸びる底部～口縁部。端部は外へつまみ出される。 指おさえ後底部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘラミガキは外面部い横方向、内面密な横方向。	黒灰色 器内灰白色	粗	良好	
422	瓦器 小皿	8.45 1.95	外上方へ内窪する底盤から斜上方へ外反ぎみに伸びる口縁部に至る。端部は外へつまみ出される。 指おさえ後底部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘラミガキは内面口縁部密な横方向。	黒灰色 器内灰白色	粗	良好	
423	瓦器 小皿	8.6 —	浅い半球形を呈する底部～口縁部。端部は内へ巻き込むよう丸く終わる。 指おさえ後底部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘラミガキは内面単位幅狭いジグザグ状。	黒灰色 器内灰白色	やや粗	良好	
424	瓦器 小皿	10.0 2.3	水平な底盤から丸く立ち上がり、斜上方へ直線的に伸びる口縁部に至る。端部は外へつまみ出される。 指おさえ後底部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘラミガキは外面部口縁部相い横方向、内面口縁部密な横方向、見込みやや粗い平行線状。	黒灰色 器内灰白色	やや粗	良好	
一四	瓦器 小皿	8.0 2.0	浅い半球形の底盤から外に縦を持ち、斜上方へ外反して伸びる口縁部に至る。端部は丸く終わる。 指おさえ後底部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘラミガキは見込みに単位幅狭く粗い平行線状。	黒灰色 器内灰白色	やや粗	良好	
426	瓦器 小皿	8.4 1.8	外上方へ直線的に伸びる底盤から外に縦を持ち、外上方へ外反する口縁部に至る。端部は先太となり、丸く終わる。 指おさえ後底部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘラミガキは内面口縁部に横方向のもの2～3条認められる。	灰黑色 器内灰白色	粗 石英粒多く含む	良好	
427	瓦器 小皿	8.8 1.85	外上方へ直線的に伸びる底盤から外に縦を持ち、上外方へ外反する口縁部に至る。端部は外へつまみ出される。 指おさえ後底部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘラミガキは内面口縁部に横方向のもの1条のみ認められる。	暗灰色 器内灰白色	やや粗	良好	
428	瓦器 小皿	9.2 1.3	水平に近い底盤から丸く立ち上がり、斜上方へ内窪ぎみに伸びる口縁部に至る。端部は丸く終わる。 底部ナデ、口縁部ヨコナデ。ヘラミガキは内面口縁部に粗い横方向。	灰黑色 器内灰白色	粗 長石・石英 粒多く含む	良好	
429	瓦器 小皿	8.6 1.2	水平に近い底盤から外に縦を持ち、斜上方へ外反する口縁部に至る。端部は先細となり外へつまみ出される。 指おさえ後底部ナデ、口縁部ヨコナデ。	灰色	やや粗	良好	摸索収着不良
一四	瓦器 小皿						

遺物番号 回収場所	器種	(cm) 口徑 法量 鉢径	口縁 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎 土	焼成	備考
430 一四	瓦器 羽釜	8.8 1.5		きわめて浅い半球形の底部から外に縁を持ち、斜上方へ外反する口縁部に至る。端部は丸く終わる。 指おさえ後ノナデ、口縁部ヨコナデ。ヘラミガキは内面不塗いな平行線状。	黒灰色 器肉灰褐色	やや粗	良好	
431	土師器 羽釜	22.9 — 鉢径 30.65		斜内方へ内湾して伸びる端部から丸く外反する口縁部に至る。端部は器内を減じて丸く終わる。時は水平に伸びる。 外面頭部ナデ、口縁部・鉢上下ヨコナデ。内面頭部ナデ、口縁部ヨコナデ。	外面部褐色 内面淡赤褐色～黄褐色	粗	良好	外面全体に焼付着
432	土師器 羽釜	25.95 — 鉢径 37.7		斜内方へ直線的に伸びる端部から器内を増して直立する口縁部に至る。時はやや下がりぎみに付き、器肉厚い。 外面頭部ナデ、口縁部・鉢上下ヨコナデ。内面頭部ナデ、口縁部ヨコナデ。	淡赤褐色	粗	良好	鉢下面以下に焼付着
433	土師器 羽釜	28.4 — 鉢径 33.4		斜内方へ内湾して伸びる端部から「く」の字形に屈曲し、外上方へ直線的に伸びる長めの口縁部に至る。端部は器内を減じて丸く終わる。時は基部を残して欠損する。 外面頭部ナデ、口縁部・鉢上下ヨコナデ。内面頭部ナデ、口縁部ヨコナデ。	淡赤褐色～乳白色	粗	良好	鉢下面以下に焼付着
434	土師器 羽釜	30.6 — 鉢径 39.3		上内方へ内湾して伸びる端部から「く」の字形に屈曲し、外上方へ直線的に伸びる口縁部に至る。端部は尖りぎみに終わる。時は水平に付き、中位でくびれ、端部は丸く終わる。 外面頭部ナデ、口縁部・鉢上下ヨコナデ。内面頭部ナデ、口縁部ヨコナデ。	淡赤褐色	粗	良好	鉢下面以下に焼付着
435	土師器 羽釜	34.4 — 鉢径 44.0		上内方へ直線的に伸びる端部から丸く屈曲し、外上方へ直線的に伸びる口縁部に至る。端部は尖りぎみに終わる。時は水平。 外面頭部ヘラケズリ（左→右）後ナデ。口縁部・鉢上下ヨコナデ。内面頭部ナデ、口縁部ヨコナデ。	外面部褐色 内面赤褐色	粗	良好	外面全体に焼付着
436	土師器 羽釜	— — 鉢径 44.2		上内方へ内湾して伸びる端部から「く」の字形に屈曲して口縁部に至るが、端部を欠損する。時はやや下がりぎみに付く。 外面頭部ナデ、口縁部・鉢上下ヨコナデ。体部はヘラケズリか？内面頭部ナデ。口縁部ヨコナデ。	淡赤褐色～黑褐色	粗	良好	外面・内面に焼付着
437	瓦器 羽釜	19.15 — 鉢径 23.6		内傾して伸びる口縁部。端部は器内を増して内傾する面を持つ。時は断面台形で、下がりぎみに付く。 ヨコナデ。	灰黑色 器肉淡褐色	粗	良	
438	瓦器 羽釜	18.05 — 鉢径 22.0		上内方へ内湾して伸びる口縁部。端部は丸く終わる。時は断面三角形。 ヨコナデ。	灰白色	やや粗	良	
439	瓦器 羽釜	18.0 — 鉢径 23.6		斜内方へ内湾して伸びる口縁部。端部は内傾する面を持つ。時は断面台形。 ヨコナデ。	灰黑色 器肉淡灰色	やや粗	良好	

通号	器種	(cm) 口径 底高	形態・調整等の特徴	色調	胎上	焼成備考
440	土器器 皿	27.0 —	上方へ内湾して伸びる口縁部。端部は器肉を増して内に巻き込む。 ヨコナデ。	白灰色	密	良好 内面に炭化物付着
441	土器器 皿	36.8 —	体部から一旦直立し、斜上方へ内湾して伸びる口縁部に至る。端部は内側する丸みのある面を持ち、外へまみがみに終わる。 ヨコナデ。	暗褐色 器内淡褐色	やや粗	良好
442	瓦質上器 皿	29.05 —	体部から直立し、斜上方へ外反して伸びる口縁部に至る。端部は上方へ丸く肥厚し、下方へ抵抗し、外に面を持つ。 外面右上りタタキ後口縁部ヨコナデ。内面ヨコナデ。下位は不明。	灰白色	やや粗	良 内面下半表皮剥離
442	須恵器 すり棒	19.9 —	斜上方へ内湾ぎみに伸びる口縁部。端部は下方へ抵抗し、凹面を持つ。 外面回転ナデ。内面ナデ。	淡灰色	やや粗	良好
444	須恵器 すり棒	24.6 —	上方へ直線的に伸びる口縁部。端部は下方へ抵抗し、凹面を持つ。 外回転ナデ。内面ナデ。	淡青灰色	やや粗	良好
445	白磁 合子	3.0 1.75	突出する上げ底状の底部から、上外方へ内湾して伸びる体部へ至る。受部は体部から器肉を増して継ぎ、立ち上がりは幅く内傾する。 体部は輪花状を呈する可能性あり。	白、淡緑青 色透明 光沢あり	白灰色 緻密	良好 外面受部端 以下0.5cm まで、内面 施釉
446	白磁 瓶	— 高台径 6.6 高台高0.85	開込みの浅い高台底部、直立する高台側面から斜上方へ伸びる体部に至る。見込みに沈線。 外側・高台内にカンナ削り。	白、白灰色 光沢あり	灰白色 者 黒色粒含む	良好 内面施釉
一四						

## 第5章 まとめ

今回の調査では、平安時代後期と鎌倉時代後期に比定される遺構・遺物を検出した。ただ、調査区が分散している関係で、しかも、調査区を基にして遺構の帰属時期が違うため、平面的な広がりの内で遺跡の推移を考えることは困難である。一方、第1調査地の南約100m地点では、昭和56年4月～5月に八尾市教育委員会が発掘調査を実施しており、平安時代末期～鎌倉時代初頭に比定される井戸を検出している。これらの資料を含めて考えれば、平安時代後期から鎌倉時代末期に至る間、この地域一帯で集落が連続と営まれていたことがわかる。

なお、I番柵A遺跡発掘調査概要の報文中で作成した八尾市域内の瓦器縮編年試案に従って各遺構の在統時期を示せば、以下の通りになる。

第1調査区のSK-1（II-1期）、第3調査区のSK-2（III-3）・SK-3（II-3・4）・SK-6（II-2・II-4）・SE-2（IV-1）・SE-3（III-3・4）に区别でき、各遺構の在統時期の一時期を知ることができる。





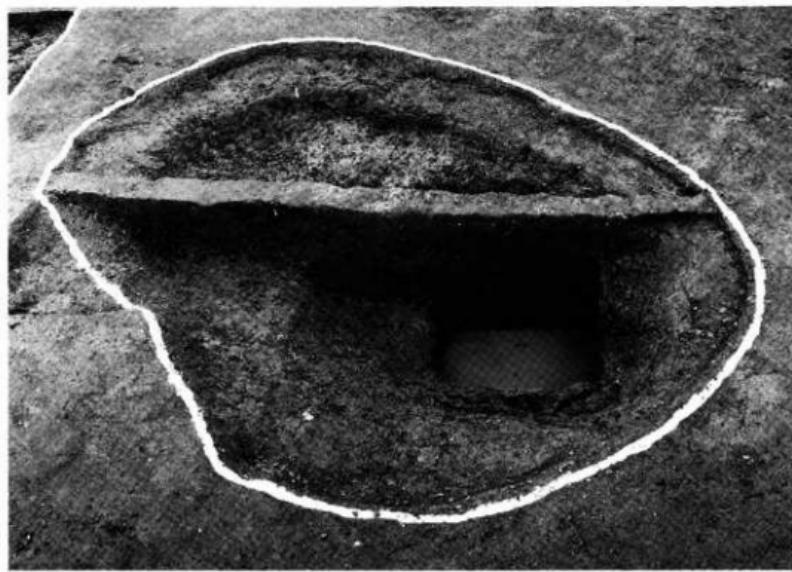
第1調査区全景（北から）



SK-1（北から）



第2調査区全景（北から）



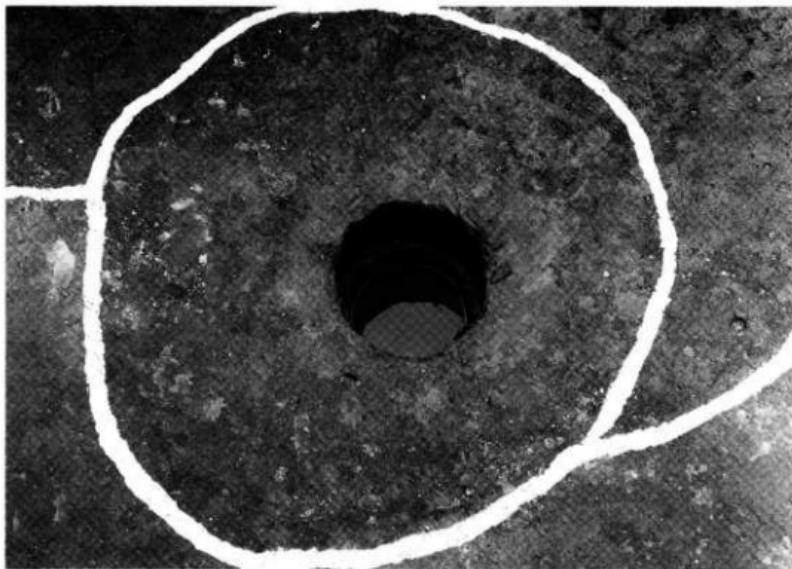
SE-1（北から）



第3調査区全景（西から）



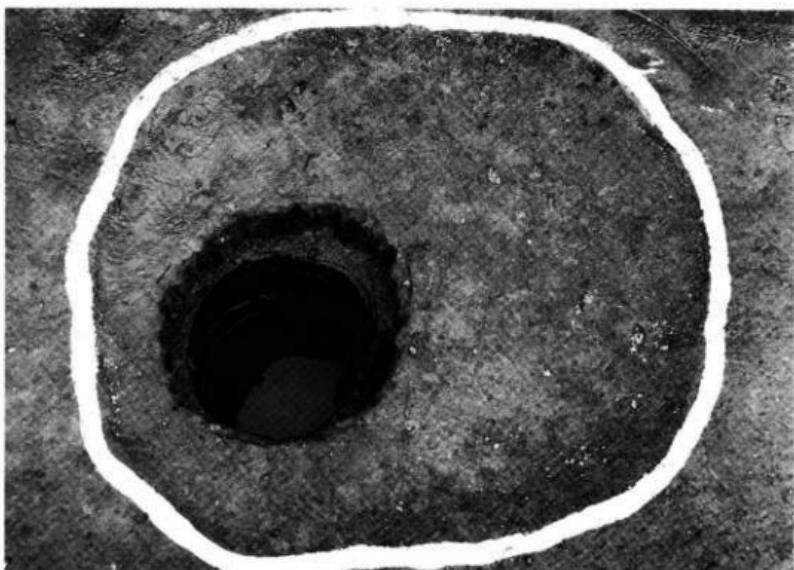
SK-3（南から）



S E - 2 (南から)



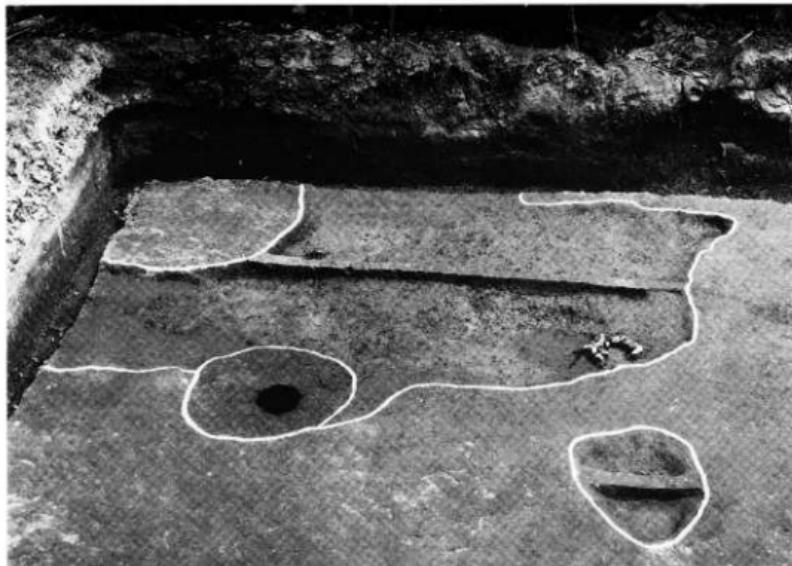
同上 断面 (南から)



S E - 3 (西から)



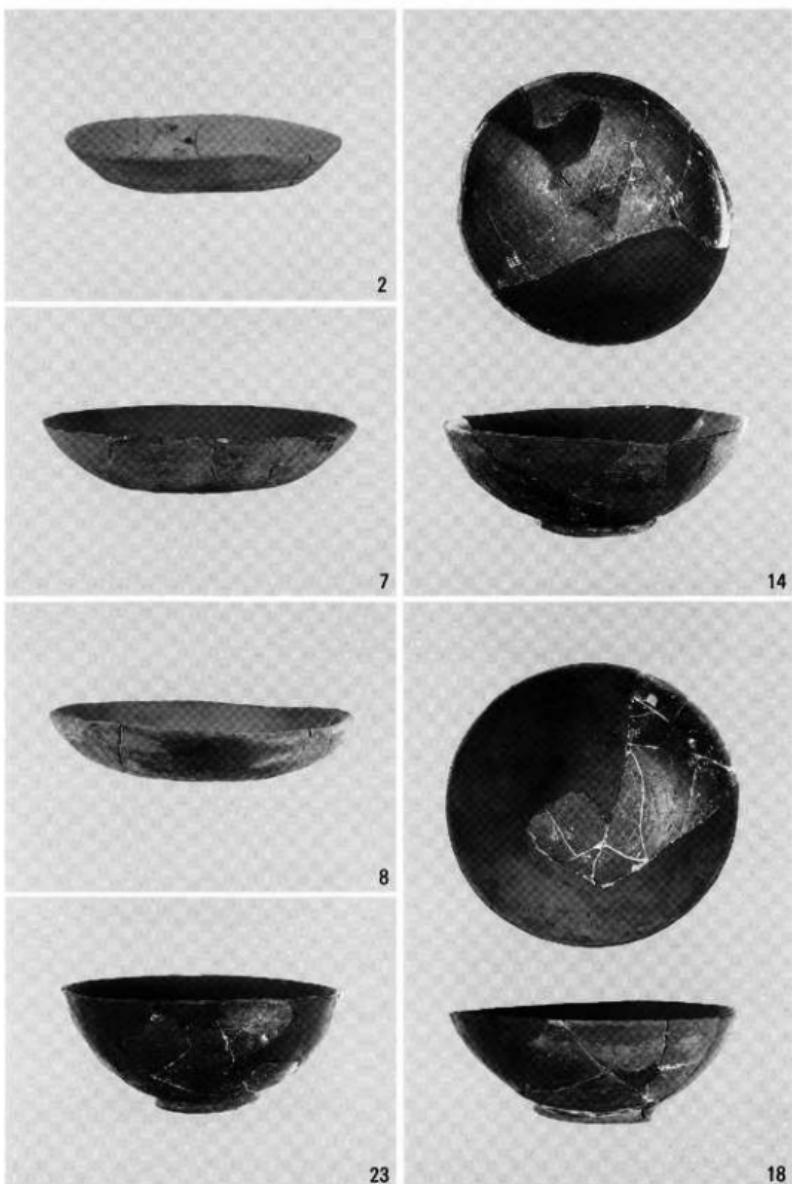
同上 断面 (南から)

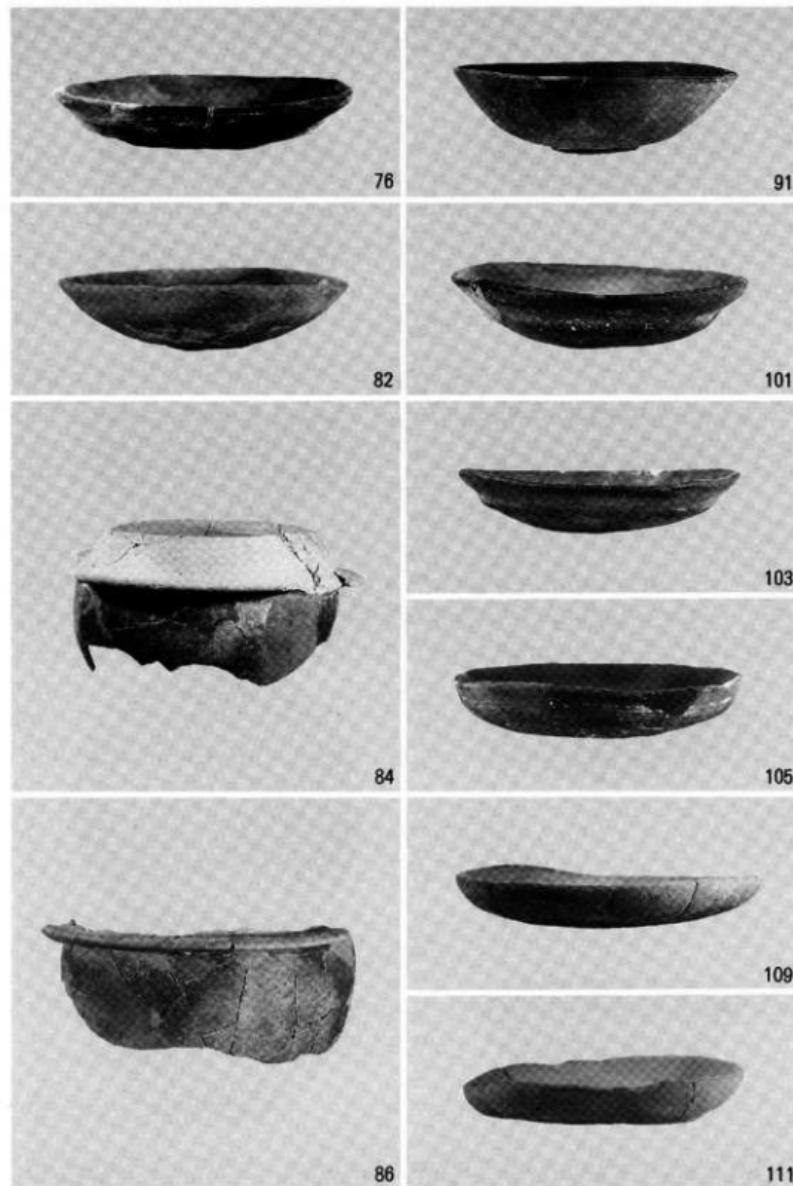


SK-2・SK-5・SE-2 (西から)

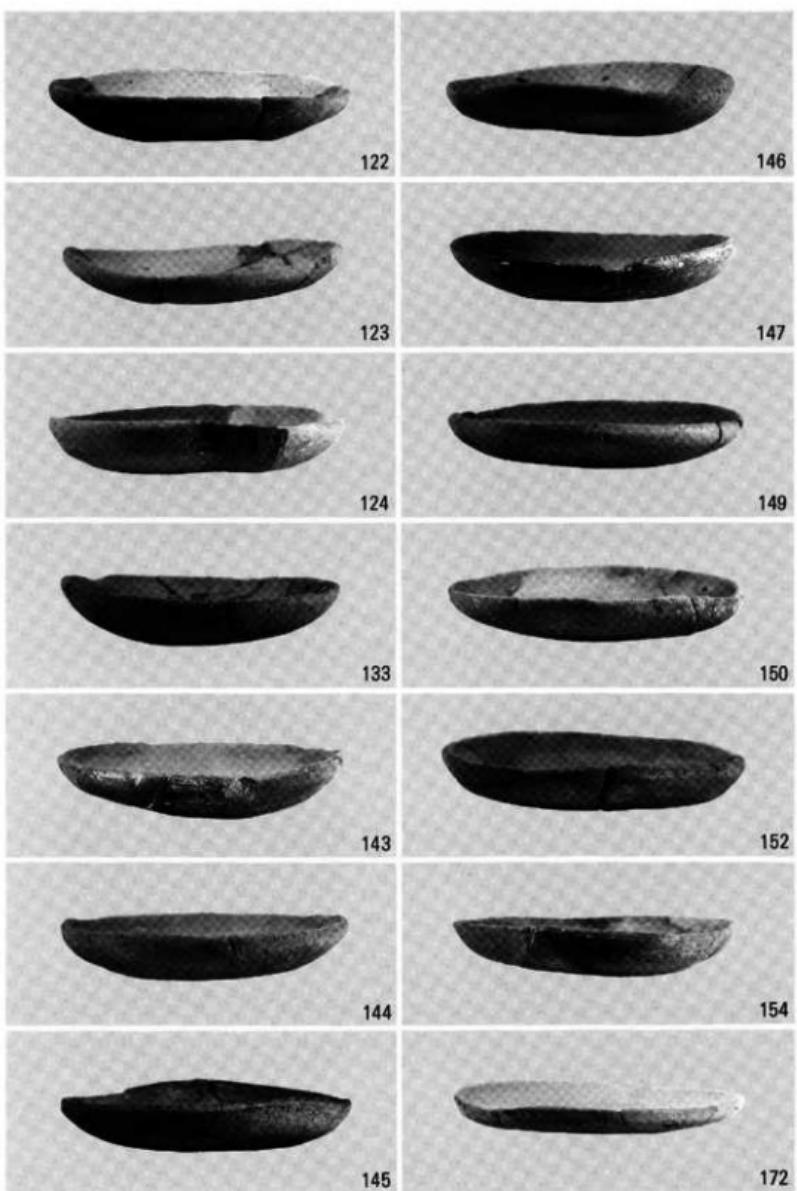


SK-2 土器集積 (西から)

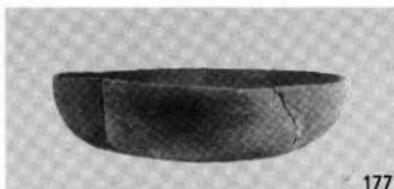




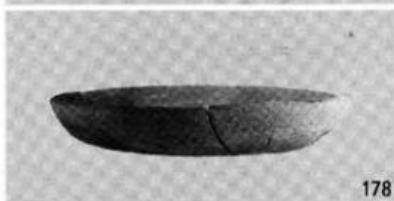
SE-2 (76~86) • SE-3 (91~111) 出土遺物



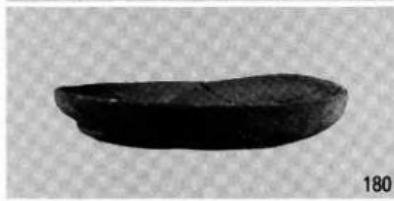
SK-2 出土遺物 1



177



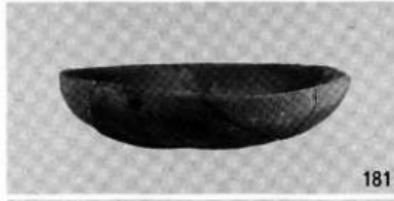
178



180



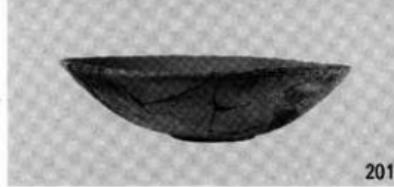
195



181



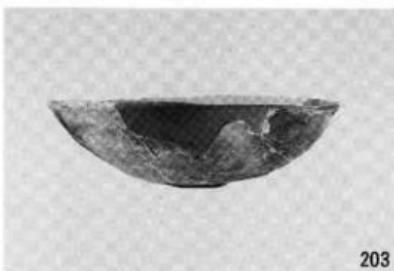
200

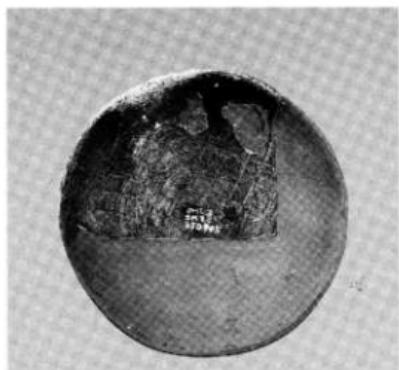


201



199

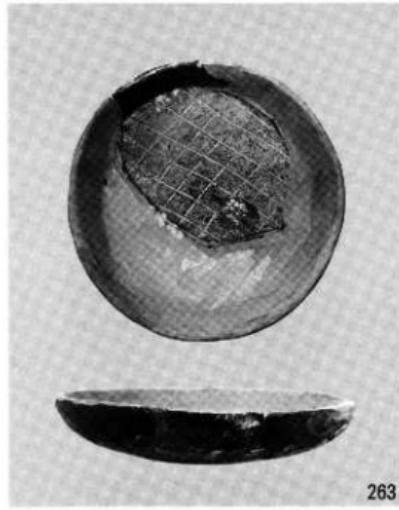




260



266



263



277



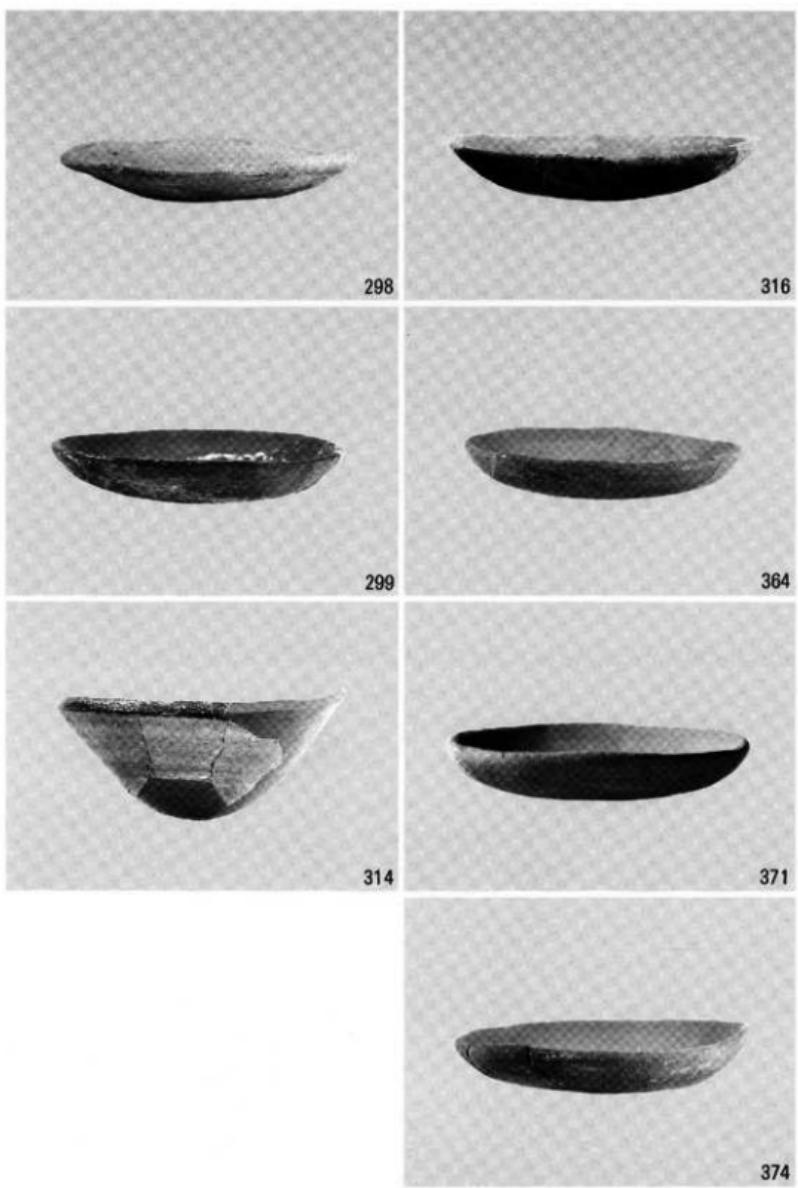
278



273



285



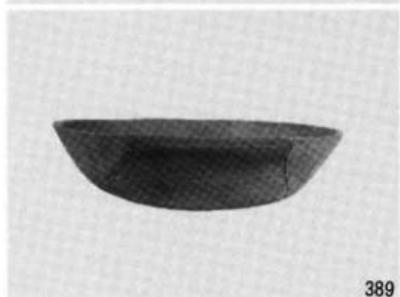
S K - 3 (298~314) • S K (321) •  
S P - 2 (364) • 第 3 調査区包含層 (371~374) 出土遺物 1



388



424



389



429



401



430



446

第3調査区包含層出土遺物 2

III 東郷遺跡(第20次調査) 発掘調査概要報告

## 例　　言

- 1、本書は、八尾市光町2丁目40他で実施した市立文化会館建設に伴う発掘調査の概要報告である。
- 1、本書で報告する東郷遺跡（第20次調査）の発掘調査業務は、財團法人八尾市文化財調査研究会が八尾市企画調整部から委託を受けて実施したものである。
- 1、現地調査は昭和60年10月29日から昭和61年3月10日にかけて、原田昌則を担当者として実施した。なお、調査においては相松隆・麻田優・岩森久晃・上辻よしえ・岡崎英雄・長野琢磨・南艸良彦・前田芳嗣・益本浩・山口ひろみが参加した。
- 1、内業整理は、現地調査終了後実施し昭和62年3月31日で完了した。
- 1、本書作成に関する業務は、遺物実測・図面レイアウト一原田、図面トレース一成海佳子、遺物写真撮影一原田、浄書一山内千恵子が参加した。
- 1、本書の執筆は原田が担当した。
- 1、全体の編集構成は原田が行った。

## 本文目次

第1章 調査に至る経過.....	247
第2章 地理・歴史的環境.....	248
第3章 調査概要.....	251
第1節 調査方法と経過.....	251
第2節 基本層序.....	251
第3節 検出遺構・出土遺物.....	252
1) 検出遺構.....	252
2) 出土遺物.....	274
第4章 出土遺物観察表.....	277
第5章まとめ.....	284

## 挿図目次

第1図 調査地周辺図.....	247
第2図 基本層序模式図.....	252
第3図 調査区設定図および地区割図.....	253
第4図 検出遺構平面図.....	255・256
第5図 SX-1・SX-2・SX-3 平断面図.....	257・258
第6図 SX-1・SX-2・SX-3 出土遺物実測図.....	260
第7図 SX-4 平断面図.....	261
第8図 SX-5 平断面図.....	262
第9図 SX-6・SX-7 平断面図.....	264
第10図 SX-4・SX-5・SX-6 出土遺物実測図.....	265
第11図 土壙墓出土遺物実測図.....	266
第12図 土壙墓平断面図.....	267

第13図	土器棺墓1・2 平断面図	268
第14図	土器棺1・2 実測図	269
第15図	S K-1 平断面図	270
第16図	S K-4 山土遺物実測図	270
第17図	S E-1 平断面図	272
第18図	包含層出土遺物実測図1	274
第19図	包含層出土遺物実測図2	275
第20図	包含層出土遺物実測図3	276

## 図 版 目 次

- 図版 一 調査区全景
- 図版 二 調査区北部遺構  
調査区南部遺構
- 図版 三 S X-1  
S X-1 南周溝内遺物出土状況
- 図版 四 S X-1 周溝内土層堆積状況
- 図版 五 S X-2  
S X-2 東周溝内遺物出土状況
- 図版 六 S X-3  
S X-3 内遺物出土状況
- 図版 七 S X-4 北周溝  
S X-4 北周溝内遺物出土状況
- 図版 八 S X-5 東周溝内遺物出土状況  
同上 遺物
- 図版 九 土壙墓  
S K-1
- 図版一〇 土器棺墓1  
土器棺墓2
- 図版一一 S E-1  
同上 断面
- 図版一二 S E-4

S E - 6 • S E - 7

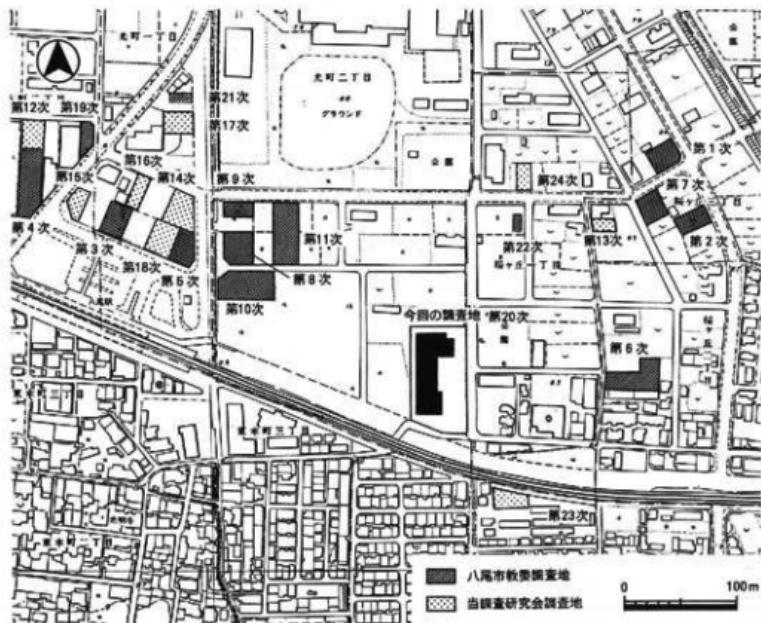
図版一三 SX-1 • SX-2 • SX-3 • SX-4 出土遺物

図版一四 SX-3 • SX-4 • SX-5 • 土壙墓 • 土器棺墓 1 • 土器棺墓 2 出土遺物

## 第1章 調査に至る経過

東郷遺跡は、行政区画上八尾市北本町・東本町・光町・桜ヶ丘一帯に存在している。当遺跡推定範囲内では、昭和55年以降、近鉄八尾駅の移動に関連した開発が継続的に行われており、開発に伴う事前発掘調査が今日まで19次に亘って実施されてきている。それらの調査成果を総合すると、当遺跡は弥生時代中期から鎌倉時代に至る複合遺跡であることが窺える。なかでも、当遺跡内で活発に集落が営まれるのは古墳時代前期（庄内式期・布留式期）であったようで、集落を構成する居住域と墓域が確認されており、この時期の集落のあり方を考えるうえで、当遺跡が重要な遺跡の一つとして認識されるようになってきた。

このような情勢下、八尾市企画調整部から、八尾市光町2丁目40番地他において文化会館を建設する旨の計画書が、文化財保護法57条の3に基づいて、八尾市教育委員会に提出された。



第1図 調査地周辺図

これら一連の計画書を受けた八尾市教育委員会は、当該地が周知の遺跡内で、しかも建物の基礎杭構築深度が遺構面に達することが予想されるため、文化財保護法98条の2に基づき、試掘調査が必要であると判断し、事業者へその旨を通告した。

昭和60年8月9日・10日、建物建築予定地内の4箇所で企画調整部立会の上、八尾市教育委員会文化財室が試掘調査を実施した結果、中世の土器片を包含する土層が確認された。以上の結果から、建物の基礎工事によって遺構が破壊されることが判明したため、八尾市文化財保存に係る事務取扱い要綱に基づき、記録保存に必要な資料を作成する目的で事前に発掘調査を実施することが、二者間で了解された。

発掘調査は、財団法人八尾市文化財調査研究会が主体になって実施することが、八尾市教育委員会・八尾市企画調整部・財団法人八尾市文化財調査研究会の三者間で決定され、契約締結後現地調査に着手した。なお、調査面積は当初1,200m<sup>2</sup>であったが、調査途中古墳時代前期の遺構を検出したことから、一部それらの遺構の広がりを追求する目的で465m<sup>2</sup>を拡張したため、最終の調査面積は1,665m<sup>2</sup>を測る。発掘調査の期間は、昭和60年10月29日から昭和61年3月10日までである。

## 第2章 地理・歴史的環境

東郷遺跡は、行政区画上八尾市北本町・東本町・光町・桜ヶ丘一帯に存在する弥生時代中期から縄文時代に至る複合遺跡である。

東郷遺跡の位置する河内平野については、近畿自動車道に伴う一連の発掘調査により、人類史の時代に入ってもなお地形的変遷が顕著であったことが明らかになってきた。なかでも、河内平野内部を北流する恩智川・玉串川・楠根川・長瀬川・平野川を中心とする中小河川の沖積作用による土砂の堆積は、河内平野の形成に多大な影響を及ぼしていたようである。河内平野内部では、このような地形的制約に左右されながらも基本的には、上記の5水系を核とした集落が営まれてきた。これらの水系がもたらす大量の水は、水稻耕作に適した肥沃な土壌を提供する反面、ときには集落の存続を瞬時に停止させると言った相反する機能を備えていた。人々は、このような地理的条件を持つ低位冲積地に積極的にに対応し、自然堤防上および微高地に居住域、低湿地に生産域である水田、さらに居住地の近くには墓域を設けることで集落を構成していたようである。東郷遺跡は上記の水系で区別すれば、楠根川と長瀬川に挟まれた地域に当たり、既述した地理的条件に符号した集落構成であったことが過去の調査成果で確認されている。

以下、東郷遺跡内で実施してきた過去の調査成果を踏まえて、周辺遺跡との関係を概観し

てみる。

東郷遺跡で集落が営まれ始めるのは弥生時代中期（畿内第Ⅲ様式）であったよう、遺跡範囲の南西部で土坑が検出されている。この時期の遺跡は、北方に位置する瓜生堂遺跡付近で集落が出現しており、南に続く巨摩廃寺遺跡・若江北遺跡・山賀遺跡をも含めて拠点的な大集落が形成されている。一方、生駒山西麓部から恩智川流域にかけては、水越遺跡・恩智遺跡で集落が営まれている他、南西方には龜井遺跡・長原遺跡、さらに南方には東弓削遺跡・弓削遺跡で集落の存在が認められている。後期になると遺跡の中心は当遺跡の南に近接する成法寺遺跡にあったよう、この時期の遺構・遺物は当遺跡の範囲内では希薄である。古墳時代前期〔正内式期・布留式期〕になると、当遺跡推定範囲のはば中央部で竪穴住居・掘立柱建物を中核とする居住域と墓域が検出されており、この時期に集落の形成が活発であったことが窺える。これらの現象は周辺の遺跡でも同じであったよう、西岩田遺跡・美園遺跡・萱振B遺跡・成法寺遺跡・小阪台遺跡・矢作遺跡・中田遺跡・東弓削遺跡で集落が検出されており、当遺跡と同様の条件下でこの時期に爆発的に集落が増加する傾向が指摘される。古墳時代中期になると当遺跡の居住地の中心は、遺跡範囲の北東部に移動したようである。なお、北東に隣接する萱振B遺跡の南西部で若干の上飾器と子持勾玉が出土したことが報ぜられていることから、この時期の集落の中心をその付近一帯に求められよう。周辺ではこの時期の集落が西岩田遺跡・小阪台遺跡・中田遺跡で確認されている。後期にならぬまでも遺跡の状況は中期と同様であったようである。周辺では成法寺遺跡・友井東遺跡で居住地が確認されている。なお、美園遺跡・萱振A遺跡・友井東遺跡・巨摩廃寺遺跡・山賀遺跡・萱振B遺跡では中期から後期に比定される古墳が検出されており、平野部に於ける古墳の存在が明らかになってきた。続く奈良時代になると、近接する成法寺遺跡で居住地が確認されている程度で、東郷遺跡推定範囲内では包含胎から奈良時代に比定される遺物が少量出土している程度であるが、明瞭な遺構は検出されていない。続く平安時代・鎌倉時代においても遺跡の状況は奈良時代と同様であったらしく、一部で散発的に遺構が検出される程度である。室町時代以後は居住地としては顧みられることも無く、耕作地としてのみ利用されていたようである。

註1 大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 「瓜生堂」近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書 1980

註2 大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 「巨摩・瓜生堂」近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書 1981

註3 (財)大阪文化財センター 「若江北」近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書 1983

註4 (財)大阪文化財センター 「山賀(その3)」近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書 1984

- 註5 〔財〕八尾市文化財調査研究会「水越遺跡発掘調査概要報告」「八尾市埋蔵文化財発掘調査概要報告56・57年度」〔財〕八尾市文化財調査研究会報告3 1983
- 註6 風生堂遺跡調査会「風智遺跡I・II・III」1980・1981
- 註7 〔財〕大阪文化財センター「龜井」近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書 1983
- 註8 長原遺跡調査会・〔財〕大阪市文化財協会「大阪市平野区長原遺跡発掘調査報告」1982.3改訂
- 註9 八尾市教育委員会「東弓削遺跡」八尾市文化財調査報告3 1976
- 註10 〔財〕八尾市文化財調査研究会「弓削遺跡(第1次調査)」「昭和59年度事業概要報告」八尾市文化財調査研究会報告7 1985
- 註11 〔財〕八尾市文化財調査研究会「成法寺遺跡」1983
- 註12 大阪府教育委員会・〔財〕大阪文化財センター「西岩田」近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書 1980
- 註13 〔財〕大阪文化財センター「美園」近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書 1985
- 註14 大阪府教育委員会「菅原遺跡発掘調査概要」1983
- 註15 〔財〕八尾市文化財調査研究会「小板合遺跡(第3次調査)」「昭和58年度事業概要報告」〔財〕八尾市文化財調査研究会報告5 1984
- 註16 八尾市教育委員会「矢作遺跡発掘調査概要」「八尾市内遺跡昭和61年度発掘調査報告書」：八尾市文化財調査報告15 1987
- 註17 八尾市教育委員会「中田遺跡」1975
- 註18 広瀬雅信「寶鏡遺跡調査概報」「八尾市文化財紀要」八尾市教育委員会 1984

## 第3章 調査概要

### 第1節 調査方法と経過

調査にあたっては、八尾市教育委員会文化財室に試掘成果に従って、現地表下1.6mまでの土層を機械掘削によって除去した。以下の土層については、土層葉理に従って人力掘削を実施し、試掘調査で確認された中世の遺物包含層と構造の関係を追求した。人力掘削を0.5m実施したところで、試掘結果に該当する土層の存在を確認した。さらに、その土層を取り除くと耕作に関連した小溝の他に、古墳時代前期に比定される方形周溝墓7基を検出した。この結果、以上の調査状況を中間報告としてすみやかに八尾市教育委員会文化財室に報告し、以後の適切な処置を行政判断に委ねた。その結果、方形周溝墓の広がりを追求する目的で調査面積を465m<sup>2</sup>拡張する旨の指示を得た。したがって、当初の調査面積である1,200m<sup>2</sup>を1,665m<sup>2</sup>に変更した。

なお、調査区の設定にあたっては、南北軸を磁北に合わせて基準とし、それに東西軸を直交させる形をとった。設定した1区割単位は10m四方で、東西方向は西から東へアルファベット(A~E)・南北方向は北から南へ算用数字(1~10)を付せて、それぞれ1A地区・2A地区……と付称した。

### 第2節 基本層序

ここでは、普遍的に存在した土層10層を基本層序とした。以下、各層を概説する。

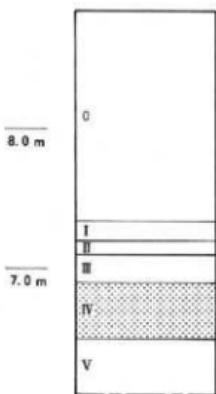
**第0層：**現代の盛土である。層厚150~160cm。地表面の標高は8.80~8.90mを測る。

**第I層：**旧耕土、暗灰色砂質土、層厚10~15cm。水田耕土に該当する土層で、調査区全域でほぼ水平に堆積している。

**第II層：**灰色~灰緑色の色調で、土質は砂質~シルト質である。とくに南部はシルト質が優勢な層相を示している。層厚5~15cm・床上の層相を示す土層で全体に酸化鉄・マンガン等の斑点が散見して認められる。層中に、中世末期~近代に比定される遺物を少量包含している。

**第III層：**灰色の色調で、土質は砂質~粘質である。層厚10~30cm。安定した土層で調査区全域で普遍的に認められた。第II層同様酸化鉄・マンガン等の斑点が顕著である。層中に古墳時代前期から中世末期に比定される遺物を包含するが、出土量は少い。

**第IV層：**この土層上面で古墳時代前期と中世末期~近世時期に比定される遺物を検出した。なお、第IV層上面においては一部河川の氾濫を示す層相が認められており、基本的な層序も3層(A~C)に区別できる。なお、河川の氾濫に起因するものと考えられる粗砂層(C層)からは、弥生時代後期に比定される土器片が少量出土している。



I 緙灰色	砂質
II 淡灰~灰褐色	砂質・シルト
III 灰色	砂質・粘質
IV A灰~灰褐色	粘質
B淡灰色~灰茶色	シルト
C淡灰色	粗砂・礁
V 淡青灰色	粘質・粘土・シルト

第2図 基本層序模式図

A 層：灰色～灰黄色粘質土。層厚10～40cm。粘性が弱く粗砂が散見される土層で、下部に行くにしたがってシルト質がやや優勢する層相を示す。調査区北部一帯および西部一帯に広がっている。方形周溝墓1～方形周溝墓5がこの土層上面を構築面としている。

B 層：淡灰青～灰茶色の色調で土質はシルトである。層厚30cm以上。調査区南部一帯に広がる土層で、方形周溝墓6・方形周溝墓7がこの土層上面を構築面としている。

C 層：淡灰色の色調で土質は上面付近は粗砂であるが、下部へ行くにしたがって硬が散見される。層厚50cm以上。調査区中央の東部一帯に広がっている。井戸2～井戸7がこの土層上面を構築面としている。

第V層：淡青灰色の色調で上層には粘質土・粘土・シルトがある。層厚20～40cm。層中には、弥生時代中期に比定される土器片を少量包含している。ただ、調査区中央東部には第IV C層が堆積しており、第V層に該当する土層はなかった。

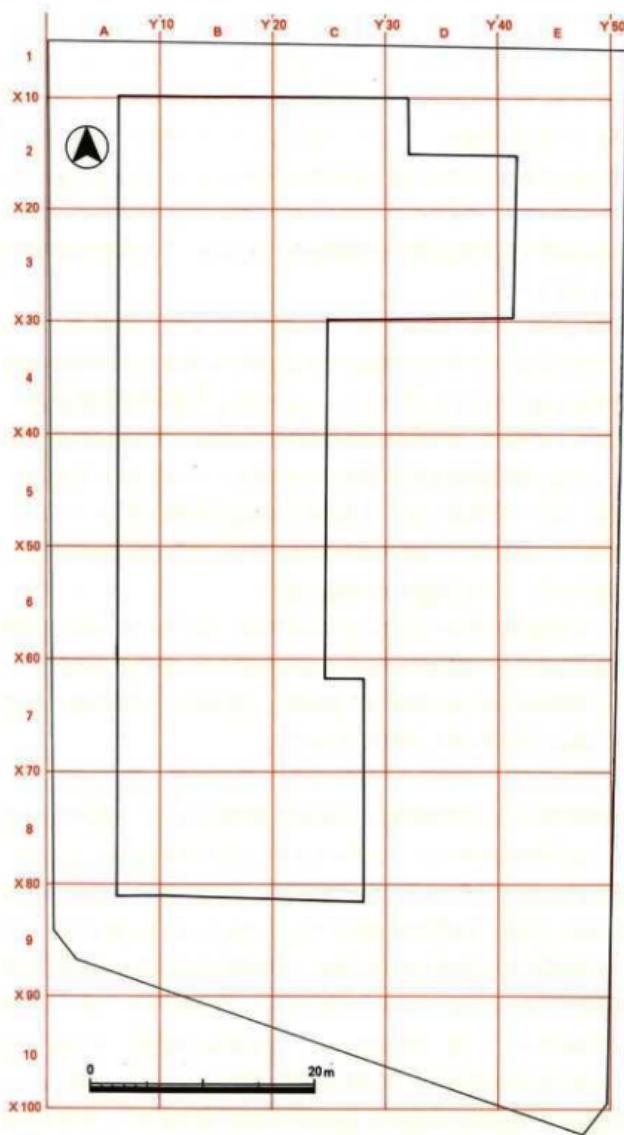
### 第3節 検出遺構・出土遺物

#### 1) 検出遺構

検出した遺構は、古墳時代前期の方形周溝墓7基（SX-1～SX-7）・土壙墓1基・土器棺墓2基・土坑4基（SK-1～SK-4）、中世末期以降の耕作に関連した溝8条（SD-1～SD-8）の他、近世の井戸7基（SE-1～SE-7）である。時期幅があるにもかかわらず、すべて第IV層上面で検出した。これらの事柄は、旧耕土以下約50cmたるまで古墳時代前期の遺構面を検出した事実が示すように、古墳時代前期までの調査地一帯の冲積作用が緩慢であったことが一番の成因であったものと考えられる。以下、遺構ごとに概観する。

#### 方形周溝墓（SX）

7基（SX-1～SX-7）を検出した。方形周溝墓を検出した第IV層上面一帯は、粗砂・シルトの平面的な広がりから、過去に河川の氾濫を受けた土地であることが判明した。したがっ



第3図 調査区設定図および地区割図

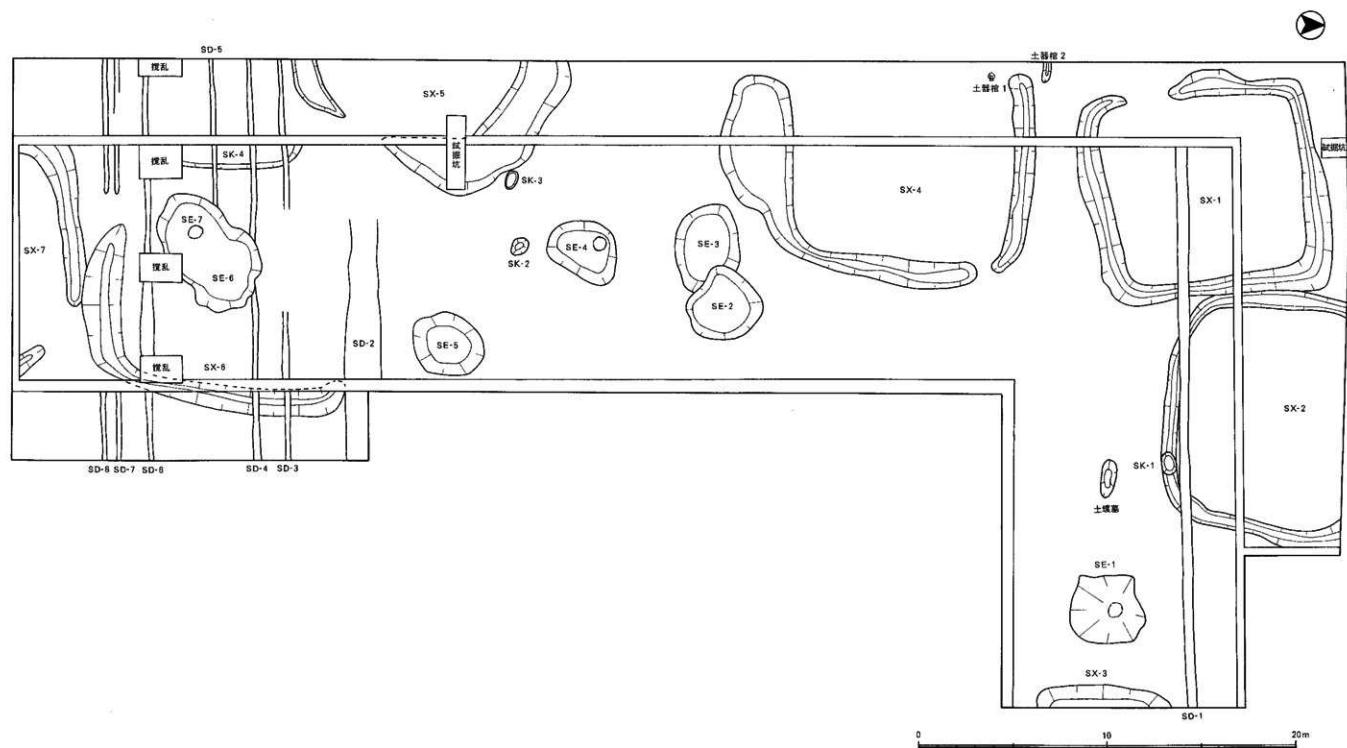
て、検出した7基の方形周溝墓の構築面の土質は一様ではなく、SX-1・SX-2・SX-3・SX-4・SX-5が第IV A層（灰色～黄灰色粘質土）、SX-6・SX-7が第IV B層（淡灰青～灰茶色シルト）に区別される。とくに、調査区中央の東部一帯は、南西方向から北東方向にかけて第IV C層（淡灰色粗砂）の堆積が顕著で、西侧に位置するSX-4・SX-5はこの粗砂の広がりを避けて構築していることが窺える。さらに、SX-6の北周溝が開掘されていない事実は、被葬者の集落内における地位等が反映したものと考えるよりは、粗砂という土質が構築に不向きであったと考えたほうが正しいようである。なお、第IV C層中には、わずかではあるが畿内第V様式に比定される土器類が含まれており、この土層がこの時期に堆積形成されたものと推定される。

方形周溝墓の平面形は、SX-6を除けばすべて方形を呈しており、一辺10～11.5mを測る。主軸は、SX-5・SX-7以外はほぼ磁北を指すものが多い。周溝は、断面U字形またはV字形を呈しており、幅1.0～4.0m・深さ0.1～0.3mを測る。周溝内部の堆積土層は、基本的には3層ないし4層である。各方形周溝墓の周溝の最下層には、一様に地山に近い土質が堆積していることから、構築当初は無水状態が保たれているようである。なお、SX-1・SX-2とSX-6・SX-7が周溝を共有する関係にある他、陸橋部はSX-1・SX-4・SX-5・SX-7で確認できた。盛土および埋葬主体部は、中世末期以降の開発に伴って完全に削平を受けており、まったく遺存していない。

遺物は、すべて周溝の最下層から出土したが、出土状況から推定すれば、当初から周溝内に埋納されたとは考えがたく、構築後の比較的早い段階に墳丘上から転落したものと考えるのが妥当であろう。周溝内から出土した遺物には、庄内甕・二重口縁壺・大型直口壺・砥石等があり、時期的には概ね庄内式期の新しい時期に比定される。

#### SX-1

調査区の北西部で検出した方形周溝墓で、墳丘西辺に陸橋部を有する。墳丘の平面は方形を呈しており、一辺の規模は東西9.5m・南北10mを測る。方向は南北軸に対してN-5°-Wを示す。墳丘は完全に削平を受けており、主体部の痕跡および盛土はまったく遺存していない。周溝の断面は、U字形またはV字形を呈しており、幅1.0～1.5m・深さ0.25～0.3mを測る。ただ、東周溝は1.0mと幅狭であることから、先に構築されたと考えられる方形周溝墓SX-2を意識して、溝幅が狭められたものと推定される。周溝内の堆積土層は、基本的には上層より第1層茶灰色シルト・第2層灰黄色シルト・第3層黒灰色粘質土・第4層灰黄色粘土の4層からなるが、第2層灰黄色シルトが欠損する部分が認められた。なお、最下層の土層からみて、周溝内での、帶水は認められない。遺物は、西周溝で甕1個（1）、南周溝で甕1個（2）が検出されている。遺物の出土土層は、いずれも最下層の第4層灰黄色粘土層である。



第4回 検出遺構平面図

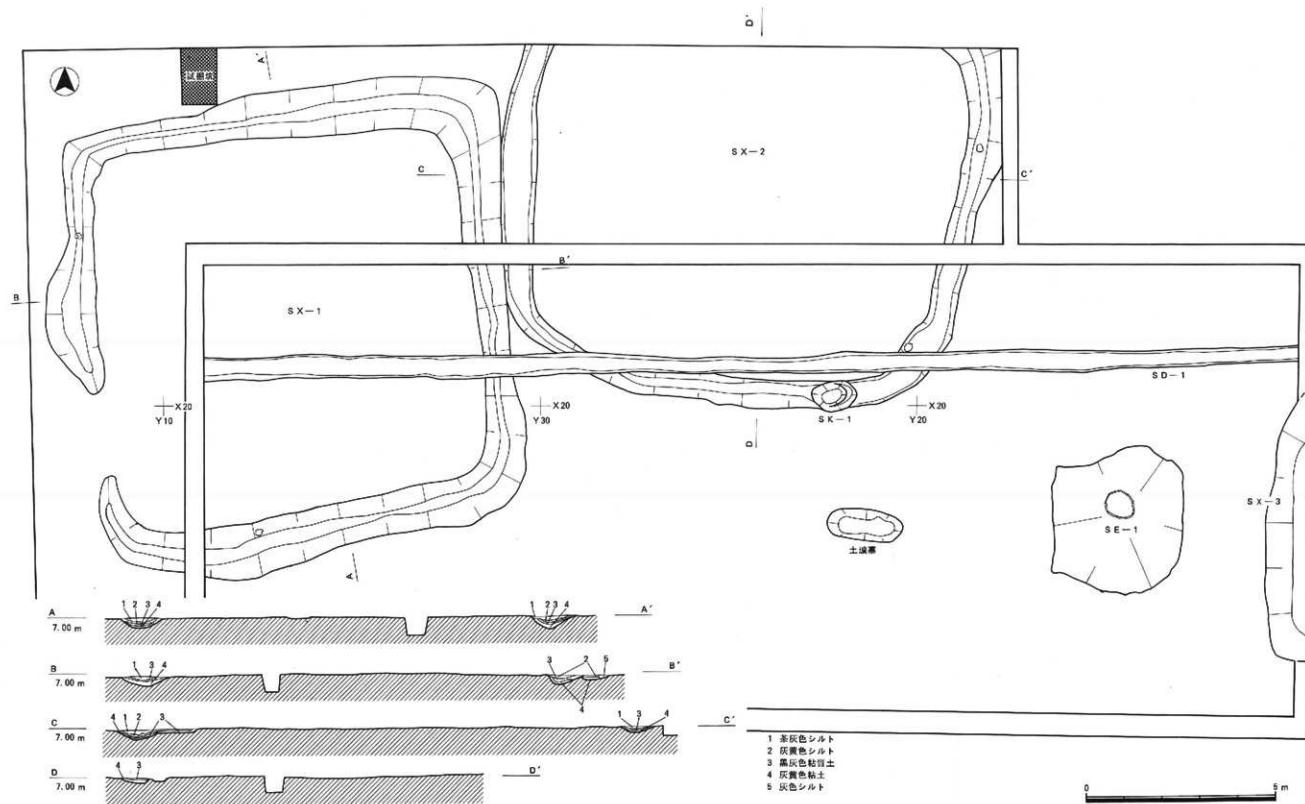


図5 SX-1・SX-2・SX-3断面図

**SX-2**

調査区の北部で検出した。方形周溝墓SX-1の東側に位置するもので、調査区外に至る北周溝を除いた3方で周溝を検出した。墳丘の平面は隅丸方形を呈しており、墳丘の規模は西端を検出した南辺で11mを測る。方向は南北軸に対してN-3°-Eを示す。周溝は方形周溝墓SX-1に比して遺存状態が悪く、幅1m前後深さ0.1~0.2mが残存していた。周溝底の標高は方形周溝墓SX-1より0.15m前後高いことが指摘できる。周溝内部には、上層より茶灰色シルトと灰黄色粘土が堆積しており、遺物は下層の灰黄色粘土から庄内甕(5)が1点出土している。出土地点は、南東隅の周溝内である。なお、南周溝内には、土坑SK-2が存在している。

**SX-3**

調査区の北東隅で検出した方形周溝墓であるが、大半が調査区外へ至るため、規模等の詳細は不明である。周溝内最下層から庄内甕2点(7・8)が出土している。

**SX-4**

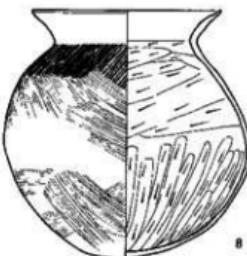
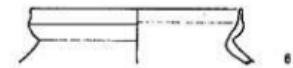
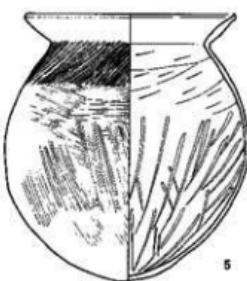
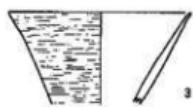
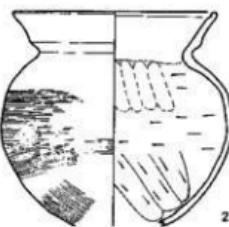
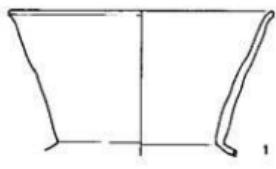
方形周溝墓SX-1の南側で検出した。南西部を除いて、ほぼ全容を知ることができる。墳丘の平面形は南北にやや長い方形を呈するもので、北東隅に陸橋部を有する他、西周溝が存在しないタイプの方形周溝墓である。方向は、南北軸に対してN-3°-Eを示す。周溝は、南周溝以外は断面U字形を呈する。周溝幅は、南周溝が4mを測るが、他は0.5~1.0mである。深さは0.25m前後を測る。周溝内には、第1層茶灰色シルト・第2層黒灰色粘質土・第3層灰黄色粘土・第4層淡灰色粘土・第5層灰色シルトの5層が堆積している。遺物は、方形周溝墓SX-1・SX-2と同様、最下層に堆積する第3層灰黄色粘土から、南周溝で広口甕(10)・北周溝で二重口縁甕(12)が出土した。なお、北西隅には土器棺墓1が位置している。

**SX-5**

調査区の南西部で約2分の1を検出した。西側は調査区外に至るため全容は不明であるが、東辺の中央部に陸橋部を有する方形周溝墓である。墳丘の規模は、両端を検出した東辺から推定すると、一辺約11m前後を測るものと考えられる。方向は、方形周溝墓SX-1・SX-4とは主軸を異にしており、南北軸に対してN-35°-Eを示す。周溝は、幅1.5~3.0mで、周溝底は水平な面を呈している。深さは0.2m前後を測る。周溝内部には、上層より第1層茶灰色シルト・第2層黒灰色粘質土・第3層灰黄色粘土が堆積している。遺物は、周溝内の北東隅で二重口縁甕(16)が最下層の灰黄色粘土から出土した他、庄内甕・砥石(17)等が黒灰色粘質土から出土している。

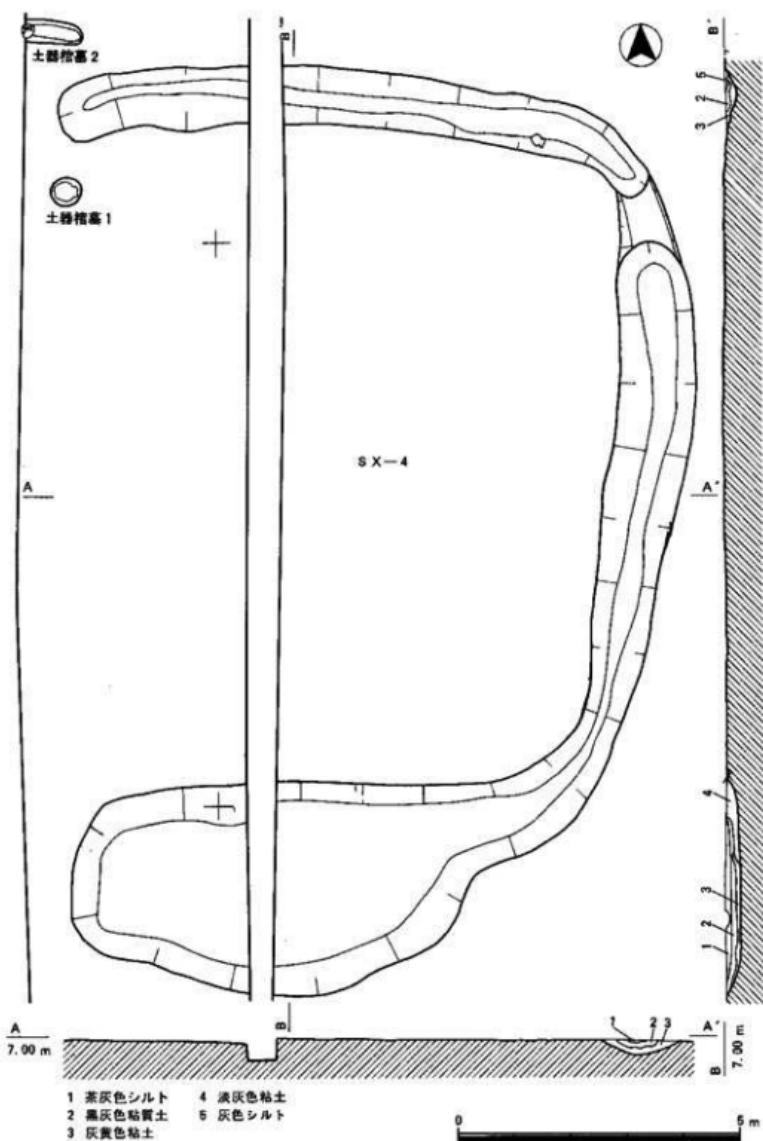
**SX-6**

調査区の南部で検出した方形周溝墓で、北周溝と西周溝の存在は認められない。墳丘上には、

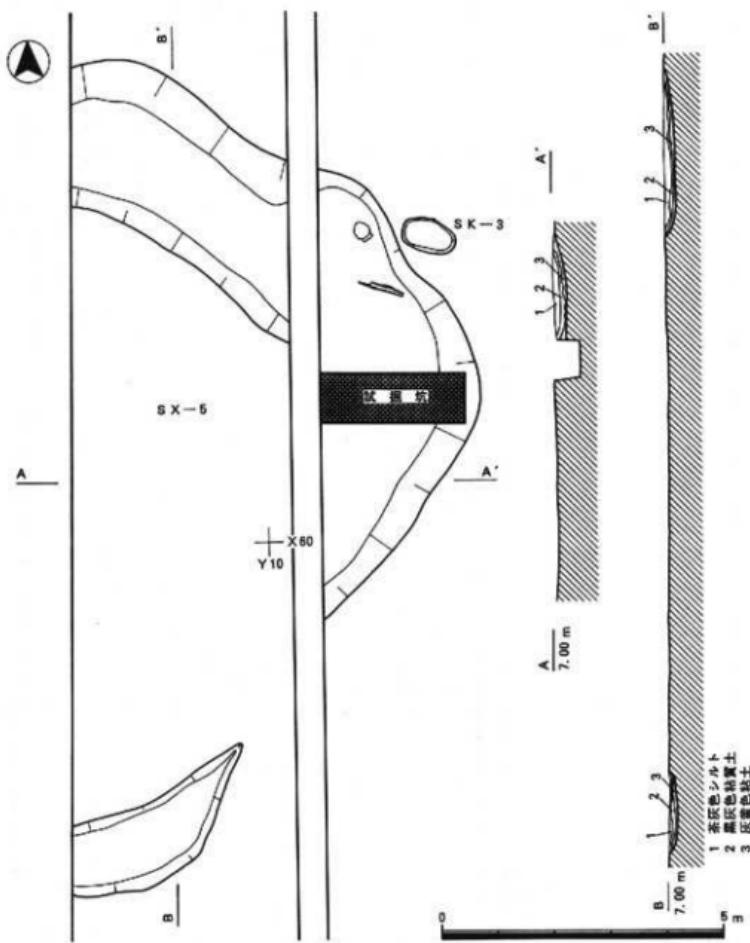


0 10 20 cm

第6図 SX-1 (1・2)・SX-2 (3~5)・SX-3 (6~8) 出土遺物実測図



第7図 SX-4 平断面図

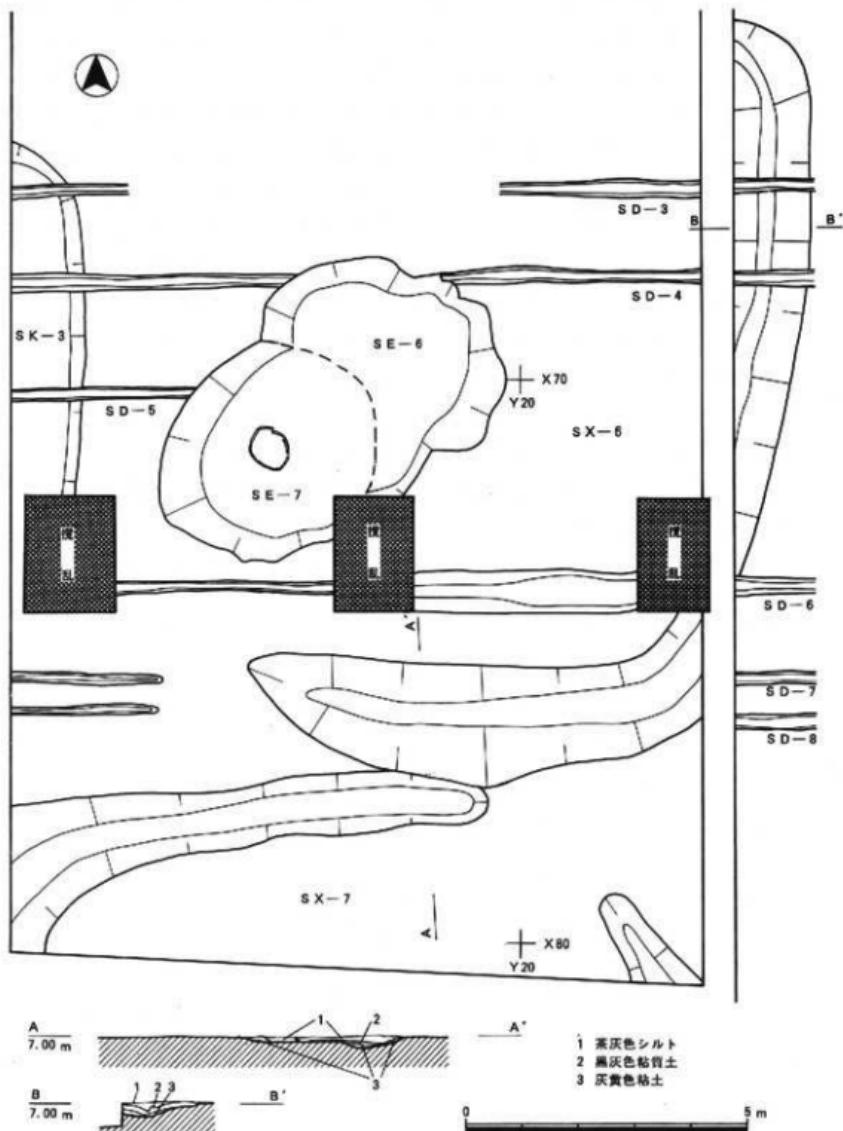


第8図 SX-5 平断面図

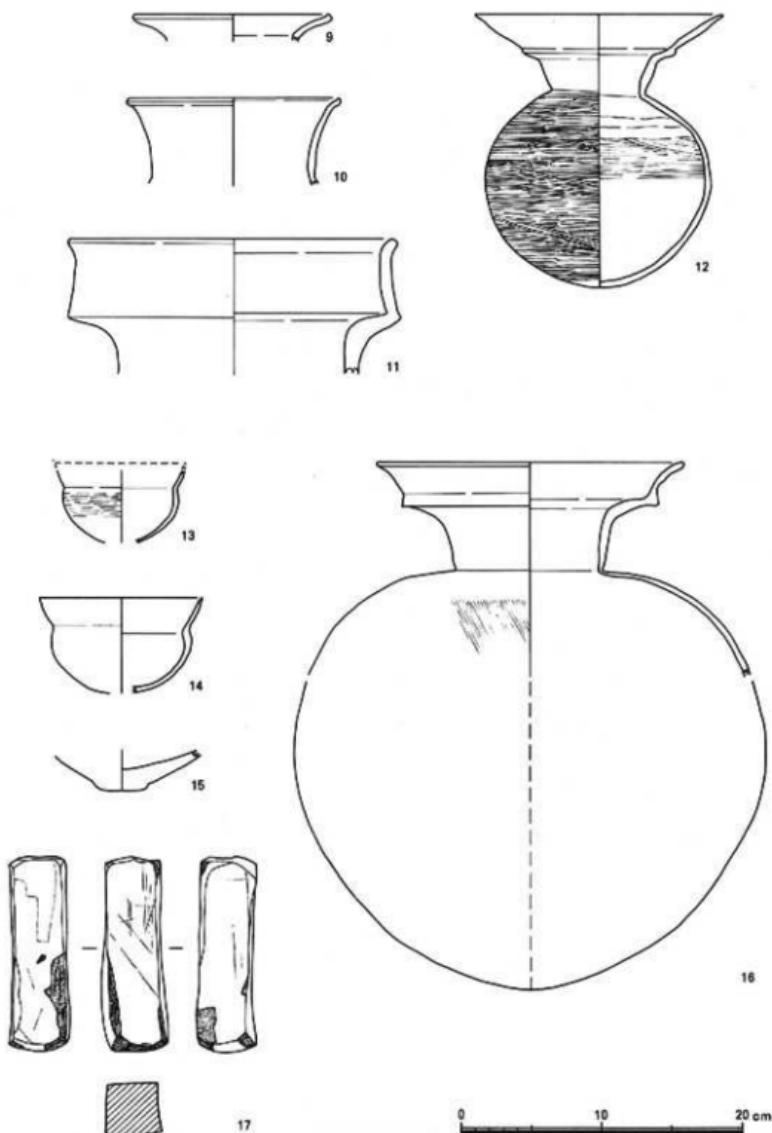
コンクリート基礎や近世の井戸SE-6・SE-7の他、農耕に関連する小溝が多数遺存しており、とくに墳丘の西部が不明瞭である。調査中、土坑SK-3がこの方形周溝墓の西周溝にあたると考えたが、調査の結果からは積極的に周溝とは認めがたく、別遺構とした。方向は南北軸に対してN-10°-Eを示す。方形周溝墓SX-7と共有関係にある南周溝は、内部の堆積状況からみれば、方形周溝墓SX-6が方形周溝墓SX-7を切る関係であることが指摘できる。したがって、この部分を占地する方形周溝墓SX-6がL字形を呈しているのは、方形周溝墓の構築時期の前後関係と、北側に粗砂が広がっているといった地質的な制約に左右された結果と考えられる。周溝幅は、方形周溝墓SX-7と共有する部分が1.94mと幅広であるが、他は1.2m前後で、深さは0.2mを測る。周溝内には、上層より第1層茶灰色シルト・第2層黒灰色粘質土・第3層灰黄色粘土が堆積している。遺物は、第3層灰黄色粘土から庄内甕の細片が少量出土している。

#### SX-7

調査区の南隅で検出した。北周溝と東周溝の一部を検出したが、大半が調査区以外のため全容は不明である。規模は検出した北辺で10mを測り、北東隅に陸機部を有する。周溝の断面は皿形状を呈し、底部はほぼ平坦で幅0.5~2.0m・深さ0.1mを測る。内部堆積土は、茶灰色シルト・灰黄色粘土の2層からなり、遺物は茶灰色シルトから庄内甕の細片が少量出土している。



第9図 SX-6・SX-7平面面図



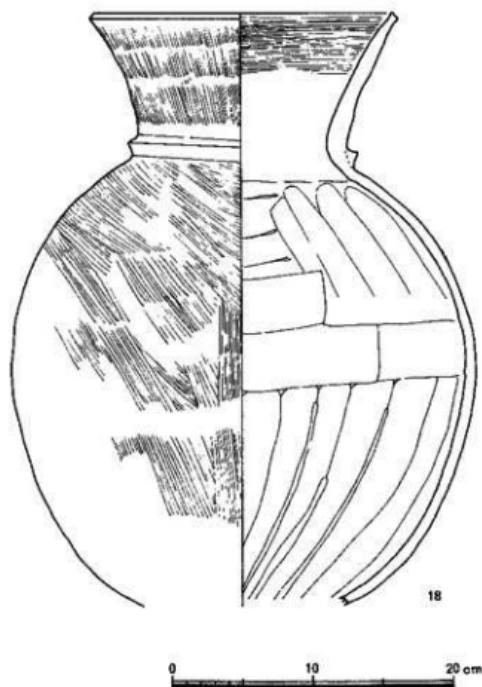
第10図 SX-4 (9~12)・SX-5 (13+14+16+17)・SX-6 (15) 出土遺物実測図

## 土壤墓

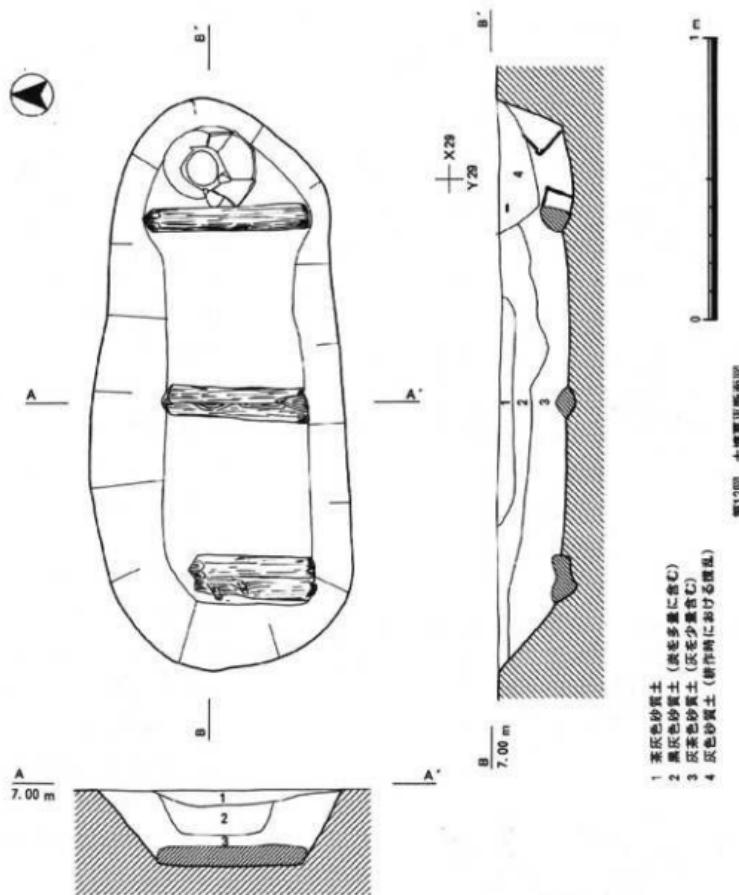
調査区の北東部で検出した。上面の形状は東西方向に長い橢円形を呈するもので、東西2.04m・南北0.9m・深さ0.25mを測る。ほぼ平坦な墳底には、ほとんど未加工の木片3本（西から東に向ってK1～K3と付称）が土壤の長軸に対して直交する形で置かれて、さらにK3の東側には口縁部を下に向けた大型直口壺（18）が置かれていた。木片の数値は、K1が幅0.15m・長さ0.45m、K2が幅0.11m・長さ0.52m、K3が幅0.08m・長さ0.58mで、各木片間の間隔は、K1・K2間が0.47m、K2・K3間が0.54mを測る。墳底に設置されている3本の木片は、すべて墳底よりさらに掘り深めて木片の半分近くを埋める形を取っていたようで、この際木片を固定化するとともに、K1・K2の上面のレベルをほぼ水平に保つことも同時に行われたものと考えられる。以上の結果から推定して、この3本の木片は木棺を置くための棺台であると考えてみたが、堆積土層からは木棺を示す土層は確認できなかった。なお、3本の木片の

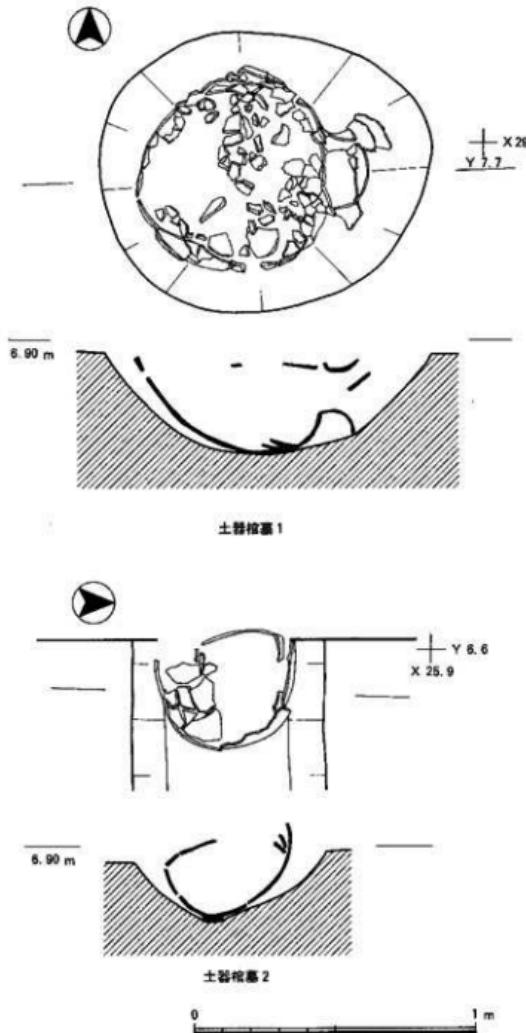
中でレベル高を異にし、形状が枕状を呈するK3に注目すれば、頭位を東に持つ埋葬形態が考えられなくもないが、いずれも積極的に検証する資料に乏しい。

内部堆積土は、第1層茶灰色砂質土・第2層黒灰色砂質土・第3層灰茶色砂質土・第4層灰色砂質土が堆積しており、なかでも第2層には多量の炭を含んでいることが指摘できる。さらに、東隅に堆積する第4層は中世末期の耕作土と同質の土層である。したがって、復元した大型直口壺（18）の体部の半分が欠損している事実は、中世末期の耕作に伴う開墾によるものと理解できる。遺物は、東隅で検出したこの壺以外に、土師器



第11図 土塚墓出土遺物実測図





第13図 土器棺墓1・2 平断面図

の細片がごく少量出土したのみである。

なお、大型直口壺(18)を復元したところ、器高は0.4mを超えることが判明した。したがって、埋置当方が完形であったと考えた場合、上墻の検出深度は0.25m前後であることから、さらに埋上を含めて考えれば、少くとも検出面より0.15m以上の位置が構築面であったと考えられる。

#### 土器棺墓1

A-3地区で検出した。方形周溝墓SX-4の北周溝西端の南側に位置する。掘形の上面形状は、東西方向に長い椭円形を呈する。東西幅0.59m・南北幅0.5m・深さ0.17mを測る。この掘形内に、器高0.37mを測る大型広口壺(19)の口縁を東にして横向きにして埋置している。大型広口壺(19)は、検出時点では体部下半の一部が欠損していたが、他は比較的遺存状態が良好であった。

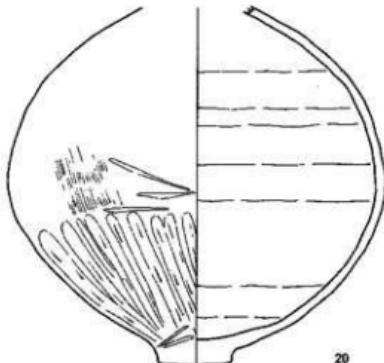
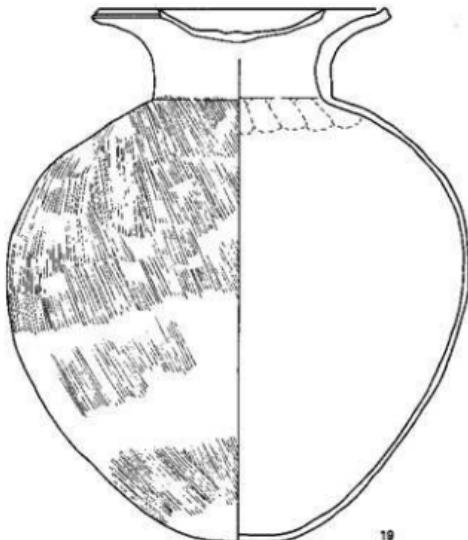
なお、口縁部の一部は三日月状に割れており、埋置時に意識的に打ち欠いたようである。壺内部から遺物は出土しなかった。

**土器棺墓 2**

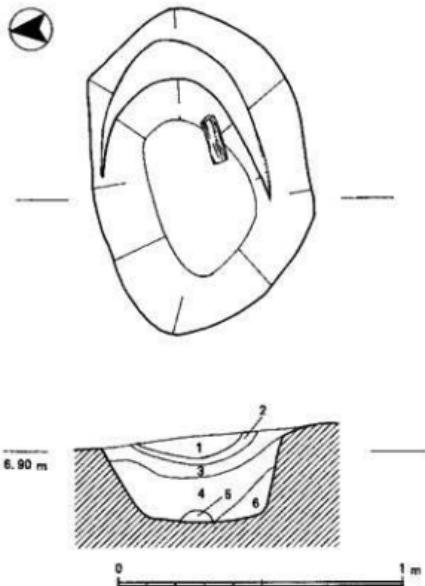
A 3 地区で検出した。方形周溝墓 SX-4 の北周溝西端の北西側に位置する。底部が突出する壺(20)を正立させて土器棺としているが、検出した位置が調査地西壁部分と重複する為、詳細は不明瞭である。したがって、掘形の規模や東側に広がる溝状遺構との関係は判然としない。壺(20)についても上部が削平を受けており、全体の形態は不明である。内部から遺物は出土しなかった。なお、土器棺墓としたが、性格については再考が必要であろう。

**土坑 (SK)****SK-1**

方形周溝墓 SX-2 の南周溝内の南東部で検出した。東西方向に長い楕円形を呈し、東西1.14 m・南北0.74 m・深さ0.3 mを測る。内部には、土層より第1層茶灰色砂質土・第2層黒灰色シルト・第3層灰黒色シルト・第4層灰色粘質土(炭を含む)・第5層灰色粗砂・第6層灰色粘土が堆積している。遺物は、最上層の茶灰色砂質土から庄内甕の細片が少量出土している。な

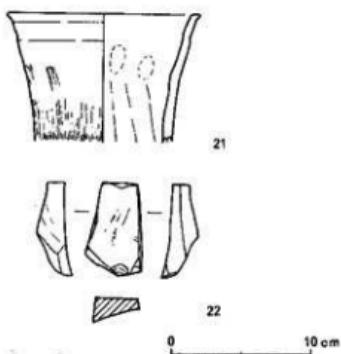


第14図 土器棺 1・2 施測図



- 1 茶灰色砂質土（遺物を若干含む）
- 2 黒灰色シルト
- 3 灰褐色シルト
- 4 灰色粘質土（灰を含む）
- 5 灰色粗砂
- 6 灰色粘土

第15図 SK-1 平断面図



第16図 SK-4 出土遺物実測図

お、周溝内の土坑であることから、土壤墓であった可能性も考えられようが、調査では確認し得なかった。遺物は出土しなかった。

#### SK-2

B 6 地区で検出した。方形周溝墓 SX-5 の北周溝に近接している。上面は南北に長い楕円形を呈し、東西0.72m・南北0.96m・深さ0.1mを測る。内部堆積土は、茶褐色粗砂の一層である。層中から土器の片断が出土したが、器種は不明であった。

#### SK-3

B 6 地区で検出した。方形周溝墓 SX-5 の北周溝に近接している。上面は東西に長い楕円形を呈し、東西0.69m・南北0.6mを測る。断面は浅い逆台形状で、深さ0.05m前後を測る。内部には、方形周溝墓 SX-5 の周溝最上層の土層と同質の茶灰色シルトが堆積している。遺物は出土しなかった。

#### SK-4

方形周溝墓 SX-6 の西部で検出した。上面は南北に長い溝状を呈する土坑で、南端はコンクリート基礎・西側は測溝部分にあたるため全容は不明である。検出部で東西1.3m・南北6.3mを測る。坑底はほぼ平坦で、深さは0.07mを測る。内部堆積土は、上層から黒灰色粘土・灰黄色粘土である。遺物は、灰黄色粘土層から直口壺（21）・庄内甕・砥石（22）等が出土している。

**井戸 (SE)**

7基検出した。井戸SE-1を除いては、すべて第4C層を構築面とするもので、機能的には灌溉用井戸であったことが窺える。井戸の時期は、出土遺物が少量のため明確にしがたいが、他資料からみて、およそ近世末期～近代初頭に比定されよう。

**SE-1**

調査区北東部で検出した。木枠+瓦枠井戸で、第4C層上面を構築面としている。掘形の上面は不定形を呈し、東西3.45m・南北3.9mを測るが、下部は粗砂でしかも湧水が著しいため、掘形の形状や深さ等は明確でない。掘形の中央部よりやや北側に桶を2段に重ねた後、最上段に瓦枠を1段置き、井戸側としている。下段の桶は径0.64m・高さ0.9m、上段の桶は径0.7m・高さ0.9mを測る。瓦枠は1段9枚で一周しており、径は0.75mを測る。瓦枠用の瓦は、厚さ3cm・幅25cm・高さ25cmで、凸面には一単位が楔形を呈する叩き目を1段ごとに角度を変え、4段施文している。なお、井戸内部から瓦枠用の瓦が出土していることから、瓦枠は2段以上存在した可能性が高い。遺物は瓦枠用瓦の他、磁器碗の細片が少量出土した。

**SE-2**

B5地区で検出した井戸で、西側は井戸SE-3を切っている。掘形の上面は円形状を呈し、東西3.8m・南北4.1mを測る。なお、掘形中央部付近からは瓦枠用の瓦が数点出土していることから、井戸SE-1と同様、木枠+瓦枠井戸であったと考えられる。

**SE-3**

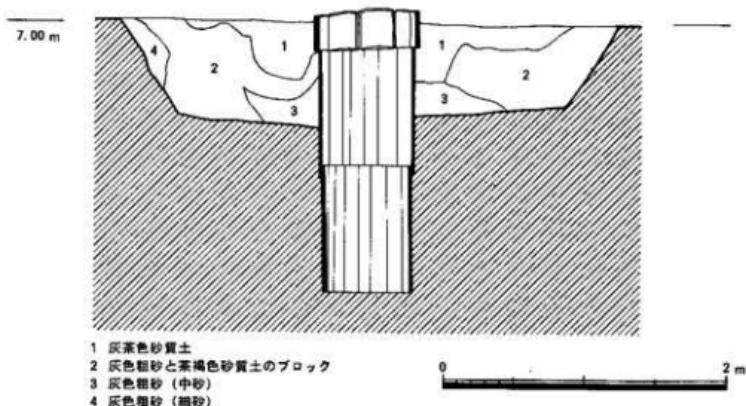
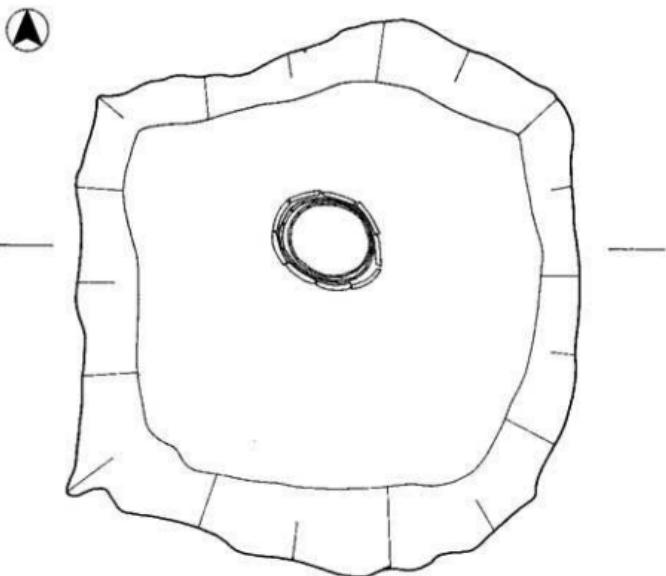
B5地区で検出した井戸で、東部は井戸SE-2によって切られている。掘形の上面は東西方向に長い楕円形を呈するもので、東西4.2m（推定）・南北3.4mを測る。調査では1m程度掘り下げたが、井戸側等を検出するには至らなかった。

**SE-4**

B5・B6地区で検出した。掘形の上面は三角形を呈し、東西3.0m・南北3.5mを測る。掘形の北隅に桶を3段重ねた井戸側を構築している。最下段の桶は径0.56m・高さ0.59mで、その上に径0.58m・高さ0.59mを測る桶を重ねている。さらに最上段には上径0.57m・下径0.64m・高さ0.37mを測る桶が重ねられており、井戸側の深さは1.4mを測る。井戸内部から、陶器の細片が少量出土した。

**SE-5**

B6地区で検出した。掘形の上面は楕円形を呈しており、東西3.1m・南北3.6mを測る。ただし、深さは0.6mと浅く、しかも井戸側の施設を伴わないことから、土坑と考えるのが正しいかもしれない。遺物は出土しなかった。



第17図 SE-1平面図

**SE-6**

B 7・B 8 地区で検出した井戸で、西肩は井戸 SE-7 の構築の際に切られており、明確でない。掘形の上面は不定形を呈し、南北4.2mを測る。調査では1.2mまで掘削を実施したが、井戸側等は検出できなかった。

**SE-7**

B 7・B 8 地区で検出した木枠+瓦枠井戸で、東部は井戸 SE-6 を切る関係にある。掘形の上面は楕円形を呈し、東西3.8m（推定）・南北3.9mを測る。掘形のほぼ中央部に桶を2段に重ねた後、最上段に瓦枠を2段置き、井戸側としている。下段の桶は径0.68m・高さ0.9m、上段は径0.71m・高さ0.9mを測る。瓦枠は1段9枚で一周しており、径は0.74mを測る。2段めの瓦枠構築に際しては、1段めの瓦枠のつなぎ目に2段の瓦枠を重ねることで、瓦枠の強度を高めている。瓦枠用の瓦は、厚さ3cm・幅25cm・高さ30cmである。

**溝（SD）**

8条を検出した。すべて東西方向に走る溝である。溝 SD-1・SD-2 以外は、幅0.1m前後・深さ0.03mと平均しており、しかも断面の形状がU字形を呈することから、犁による痕跡と推定される。構築時期は、出土遺物が少量でしかも細片であるため明確でないが、包含層中に瓦器碗が含まれていないことから、中世末期以降と推定される。

**SD-1**

調査区の北部で検出した。東西方向に直線的に伸びる溝で、方形周溝墓 SX-1 の東周溝と方形周溝墓 SX-2 の南周溝を切る関係にある。幅0.4~0.5m・深さ0.2~0.9mを測るが、流路方向は明確でない。内部堆積土は茶褐色砂質土1層で、内部から土師器羽釜・屋瓦・陶磁器の細片が少量出土している。

**SD-2**

A 7・B 7・C 7 地区で検出した溝で、東西方向に伸びる。断面の形状は逆台形状を呈し、幅1.4~1.9m・深さ0.04m前後を測る。内部堆積土は茶褐色砂質土1層で、内部から土師器羽釜・須恵質鉢等の細片が少量出土している。

**SD-3**

A 7・B 7・C 7 地区で検出した。東西方向に伸びる溝で、一部は土坑 SK-3 を切っている。断面の形状は浅いV字形を呈し、幅0.2m・深さ0.03m前後を測る。内部堆積土は黒灰色シルト1層で、内部から土師質小皿等の細片が少量出土している。

**SD-4**

A 7・B 7・C 7 地区で検出した。東西方向に伸びる溝で、土坑 SK-3 の一部を切り、井戸 SE-6 に切られる関係にある。断面の形状はU字形を呈し、幅0.2~0.3m・深さ0.07

m前後を測る。内部堆積土は黒灰色シルト1層である。遺物は出土しなかった。

#### SD-5

A 8・B 8地区で検出した。東西方向に伸びる溝で、東端は井戸SE-7によって切られている。幅0.15~0.2m・深さ0.05m前後を測る。内部堆積土は黒灰色シルト1層である。遺物は出土しなかった。

#### SD-6

A 8・B 8・C 8地区で検出した。東西方向に伸びる溝で、4箇所はコンクリートの基礎によって切られている。幅0.2~0.8m・深さ0.1mを測る。内部堆積土は黒灰色シルトである。遺物は出土しなかった。

#### SD-7

A 8・B 8・C 8地区で検出した。東西方向に伸びる溝で、一部は方形周溝墓SX-6を切っている。幅0.2m・深さ0.01~0.04mを測る。内部堆積土は黒灰色シルト1層である。遺物は出土しなかった。

#### SD-8

A 8・B 8・C 8地区で検出した。東西方向に伸びる溝で、溝SD-7同様、方形周溝墓SX-6を切っている。幅0.1~0.3m・深さ0.03mを測る。内部堆積土は黒灰色シルト1層である。遺物は出土しなかった。

### 2) 出土遺物

調査の結果、当調査地では古墳時代前期の墓域と、中世から近世に至る水田を検出した。したがって、方形周溝墓の周溝から出土した遺物以外は、細片が多く量も多い。方形周溝墓の周溝内から出土した遺物は、概ね庄内式新相に位置付けられよう。一方、包含層出土の遺物には古墳時代後期から近世に至る雑多な遺物があるが、全て細片で、ローリングを受けたものが大半を占めた。遺物の時期別では、古墳時代後期に比定されるものが僅かに含まれる程度で他は中世以降に比定されるものが多い。



ガラス製小玉（第18図）は、C 3地区の第IV層（古墳時代前期遺構



検出面）上面で検出した。青色を呈し、径4mm、孔径1mm強を測る。

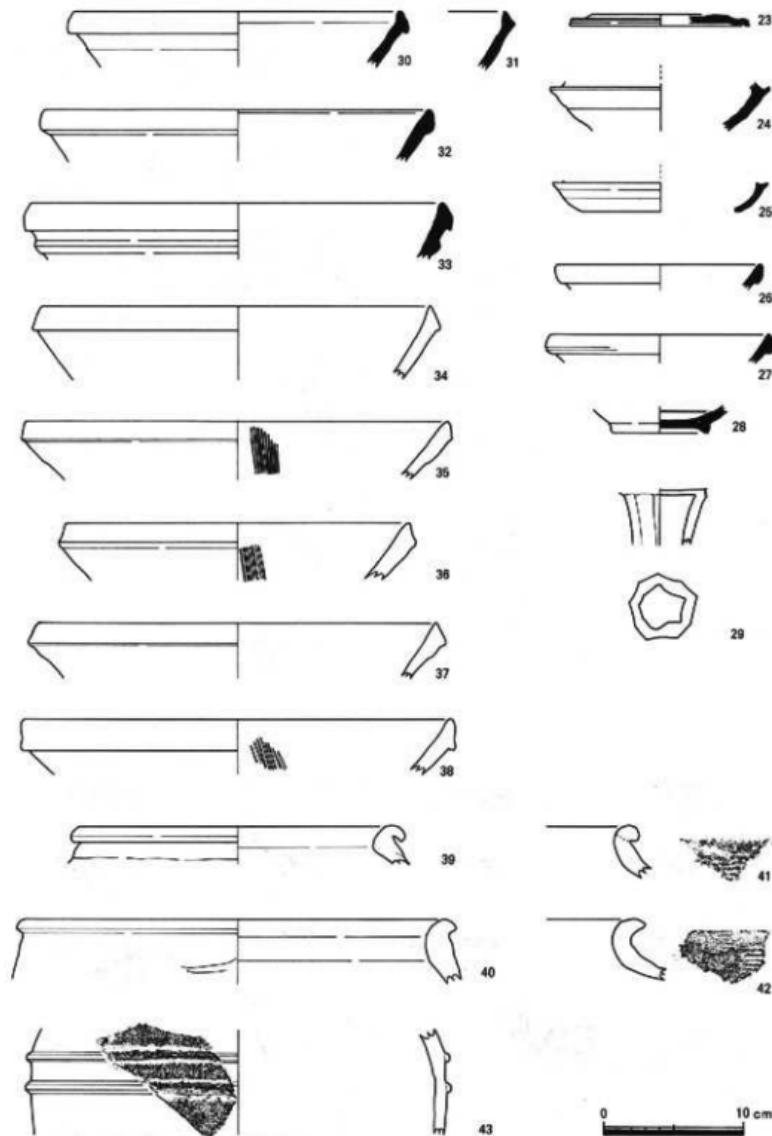
0

2 cm

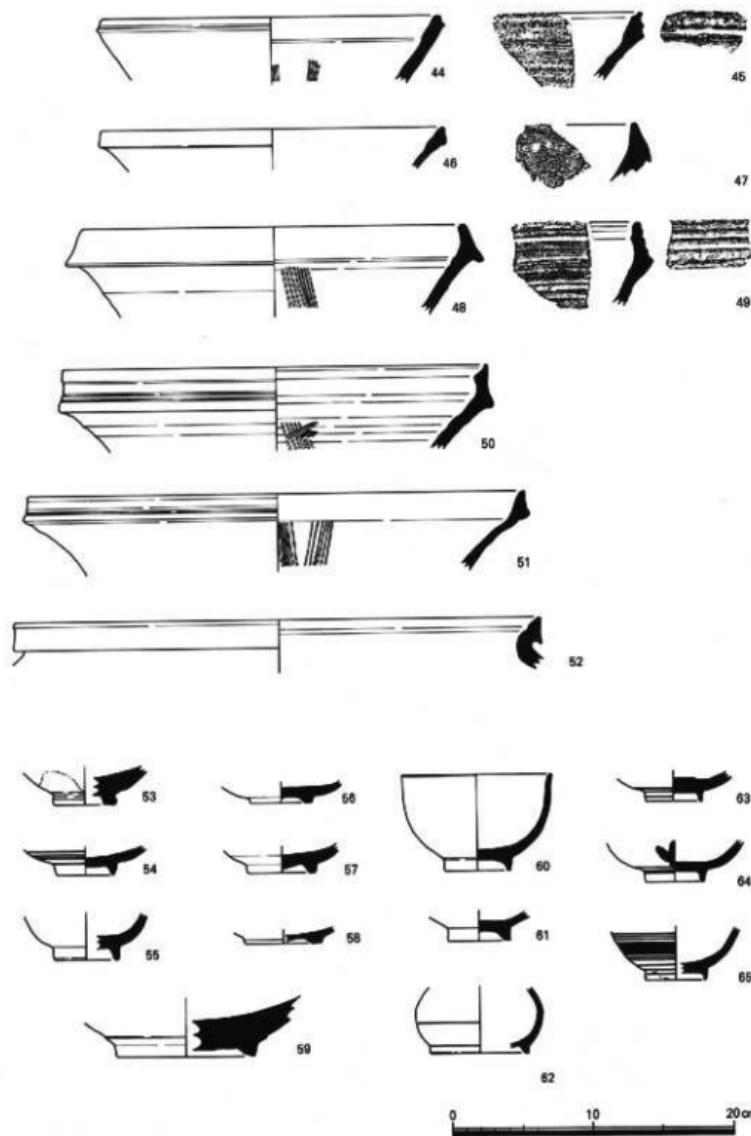
検出した位置は方形周溝墓SX-2の南周溝の中央部より南約2m付

近に当り、後世の掘削によって原位置から移動したものと推定される。

第18図 包含層出土  
遺物実測図1



第19図 包含層出土遺物実測図2



第20図 包含層出土遺物実測図 3

## 第4章 出土遺物観察表

遺物番号 出土地点	器種 法量 器高	口径 幅	形態・調査等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1 直口壺	—	16.4	体部から「く」の字形に屈曲し、上外方へ直線的に伸びる口縁部。端部近くでは外反ぎみとなり、端部は丸く終わる。 ヨコナデ。	茶褐色	長石・雲母 角閃石を含む	良好	
一三 SX-1	—	—					
2 壺	—	14.1 15.6	や上方で彎る球形に近い体部から丸みを持って屈曲し、斜上方へ内側した後直線的に伸びる口縁部に至る。端部は内へ巻き込む。 外曲体部ハケナデ(9本／1cm)、口縁部ヨコナデ。内面体部指おさえ・指ナデ後ハラケズリ、口縁部ヨコナデ。	淡赤褐色	0.5~1mm 程度の長石 を多量に含む	良好	表皮剥離
一三 SX-1	—	—					
3 直口壺	—	12.7	上外方へ直線的に伸びる口縁部。端部は器内を減じて尖り込んで終わる。 外曲面ハラミガキ。内面ヨコナデ。	淡赤褐色	1mm程度の 長石が散見 される	良好	表皮剥離
一三 SX-2	—	—					
4 壺	—	16.0	上方で彎る体部から「く」の字形に屈曲した後直立する口縁部に至る。端部は丸く終わる。 口縁側面には7条の複数輪が確認。 外曲体部板状工具によるナデ、口縁部ヨコナデ。内面体部ヘラケズリ後一部にナデ、口縁部ヨコナデ。	外曲黒褐色 内面乳灰色	0.1~0.5mm 程度の長石 を多量に含む	良好	外曲面付着
SX-2	—	—					
5 壺	—	14.5 18.9	張りの少い丸底の体部から「く」の字形に屈曲し、外反ぎみに伸びる口縁部に至る。端部は外に面を持ち、つまみ上げられる。 外曲肩部右上ヒタキ(7本／cm)、以下ハケナデ(9本／cm)、口縁部ヨコナデ。内面体部ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。	茶灰色	長石・角閃 石を大量に 含む	良好	
一三 SX-2	—	—					
6 壺	—	14.8	体部から「く」の字形に屈曲した後、器内を減じて直立する口縁部に至る。端部は尖りぎみに終わる。 外曲ヨコナデ。内面体部ヘラケズリか?	淡褐色	長石を含む	良好	表皮剥離
SX-3	—	—					
7 壺	—	14.1 19.6	体部中位に最大径を持つ尖り底の体部から「く」の字形に屈曲し、外反ぎみに伸びる口縁部に至る。端部は丸みを持ち、つまみ上げられる。 外曲部右ヒタキ(7本／cm)、以下ハケナデ(8本／cm)、口縁部ヨコナデ。内面体部ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。	茶灰色	角閃石を大 量に含む	良好	外曲面下半に 焼付苔
一三 SX-3	—	—					
8 壺	—	13.2 17.5	球形に近い体部から「く」の字形に屈曲し、外反ぎみに伸びる口縁部に至る。端部はつまみ上げられる。 外曲部右ヒタキ(8本／cm)、以下ハケナデ(11本／cm)、口縁部ヨコナデ。内面体部ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。	淡黒灰色	長石・角閃 石を含む	良好	黒斑あり
一三 SX-3	—	—					
9 壺	—	13.5	体部から「く」の字形に屈曲し、斜上方へ外反ぎみに伸びる口縁部に至る。端部は外に面を持ち、つまみ上げぎみに終わる。 ヨコナデ。	茶褐色	長石・角閃 石を含む	不良	焼付苔 表皮剥離
SX-4	—	—					

遺物名	器種	高さ (cm)	口径 法量 容積	形態・調査等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
10	広口壺	14.8	—	体部から丸みを持って屈曲し、直立した後上外方へ伸び、端部近くで斜上方へ外反する口縁部。端部は外に面を持ち、つまみ上げる。	淡褐色	長石を含む 貝	良	風化著しい
一三	SX-4							
11	二重口縁壺	22.7		直立する頸部から水平近くに屈曲した後、外に梗を持ち、内傾ぎ方に直立する口縁部に至る。端部近くでは外反ぎとなり、端部は丸みのある面を持つ。	赤褐色	0.1~1mm 程度の長石 を大量に含む	良	表皮剥離
一三	SX-4			ヨコナダ。				
12	二重口縁壺	17.5 19.3		球形の体部から上外方へ直立した後水平近くに屈曲し、斜上方へ直線的に伸びる口縁部に至る。端部は器肉を減じて尖りぎみに終わる。	乳灰色~明 褐色	精良	良好	
一四	SX-4			外面口縁部ヨコナダ、体部直線ハラミガキ。内面口縁部ヨコナダ、体部中位ハケナダ、船はナダ。				
13	小型壺	(9.2)		半球形を呈する体部から内に鈍い縦を持ち斜上方へ内凹して伸びる口縁部に至る。端部は欠損する。	乳灰色	0.1mm程度 の長石を含む	良好	黒斑あり
	SX-5			外面体部ハラケズリ後上位ハラミガキ、口縁部ヨコナダ。内面体部ナダ。口縁部ヨコナダ。				
14	小型壺	11.5 6.8		深めの半球形を呈する体部から内に縦を持ち、上外方へ内湾ぎみに伸びる口縁部に至る。端部は尖りぎみに終わる。	淡茶色	精良	良好	
	SX-5			外面体部ハラケズリ後ハラミガキ? 体部上半ヘ口縁部ヨコナダ。内面体部ナダ。口縁部ヨコナダ。				
15	壺	— 3.1		体部からわずかに突出する平底の底部。ナダ。外面底部周縁に工具痕あり。	外面淡褐色 内面乳灰色	精良	良好	
	SX-6							
16	二重口縁壺	21.6 37.1		強く張った肩部から上外方へ直立した後、強く外反し直線的な段を有し、さらに上外方へ外反して口縁部に至る。口縁部内外面ヨコナダ。外面肩部ハケナダ。	淡灰黄色	0.1~1mm 程度の長石 を含む	不良	一個体分を 検出したが 体部以下は 風化が著しく で復元が不 可能であった
	SX-5							
18	直口壺	20.8 42.3		長円形の体部から「く」の字形に屈曲し、外に突き出された後上外方へ直線的に伸びる口縁部に至る。端部はわずかにつまみ上げる。	淡茶色	0.1~1mm 程度の長石 を散見する	良好	外面体部 横付着
	土器縁			外面ハケナダ(4本/cm)後口縁部・突起周囲ヨコナダ。内面体部ハラケズリ後ナダ、口縁部ハケナダ後ヨコナダ。				
19	広口壺	19.8 37.4		張りの強い瓶形の体部から屈曲し、外側にて直立した後外上方へ外反する口縁部に至る。端部はつまみ上げられ、外に凹窪が残る。	乳白色~赤 灰色	精良	良好	口縁部打ち 欠き
一四	土器縁 1			外面体部ハケナダ(5本/cm)口縁部ヨコナダ。内面体部ハラケズリ後ナダ、口縁部ヨコナダ。				
20	壺	— 底径	5.1	球形の体部に突出する平底が付く。	茶褐色	長石・貝母 角閃石を含む	良好	
一四	土器縁 2			外面体部下半板状工具によるナダ、上半ハケナダ。内面体部下間にハケナダ? 上半は粘土接合痕跡に残る。				

遺物番号	器種 出土地點	(cm) 法量 高さ	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
21	直口壺	13.2 —	上方へ直線的に伸びる口縁部。上方では凹縫状の無い段が2条通り、端部は外へ丸く上面は平坦に終る。	乳白色 —	0.1~0.5mm程度の長石を多量に含む	良好	
一四	SK-3		内面ハケナデ(5本/cm)の後ヨコナデ。内面シボリ。指おさえ後ヨコナデ。				
23	須恵器 杯茎	12.7 —	水平に伸びる天井部から屈曲し、斜下刀へ伸びる短い口縁部に至る。口縁部側面には凹縫状の痛みが一箇所する。 外面回転ナデ。内面天井部静止ナデ、口縁部ヨコナデ。	淡灰色	精良	堅緻	口縁部上面 灰かぶり
24	須恵器 杯身	— —	斜上方へ直線的に伸びる底部から斜上方へ伸びる受部に至る。立ち上がりは斜内方に伸びるが上部を欠損する。 外面受部端1.5cm以下回転ケズリ、以上回転ナデ。内面回転ナデ。	灰色	精良	堅緻	
25	須恵器 杯身	— —	斜上方へ内削して伸びる底部から外上方へ短くつまみ出される受部に至る。立ち上がりは上内方に伸びるが上部を欠損する。 外面受部端1.5cm以下回転ケズリ、以上回転ナデ。内面回転ナデ。	灰色	精良	堅緻	
26	白磁 碗	14.2 —	玉縁状の口縁部のみ遺存。	淡灰青色	精良	堅緻	
	C 8 地区 第Ⅱ層						
27	白磁 碗	15.2 —	玉縁状の口縁部のみ遺存。口縁部下位に凹縫状の痛みが残る。	淡灰青色	精良	堅緻	
29	土師器 高杯	— —	八角形に面取りされた脚柱状部上方のみ遺存する。 外面ヘラ状工具による面取り後ナデ。内面しづり付遺存。	淡赤灰色	精良	良好	
30	須恵質土器 瓶体	— —	斜上方へ直線的に伸びる口縁部。端部はつまみ上げられ、外傾する面を持つ。 外面回転ナデ。内面静止ナデ、回転ナデ。	灰青色 口縁部外面 暗青灰色	精良	堅緻	重ね焼痕
31	須恵質土器 瓶体	20.9 —	斜上方へ内削ぎみに伸びる口縁部。強いナデによって外面上には凹凸が認められる。端部は外傾する丸みのある面を持つ。 回転ナデ。	淡灰色 口縁部外面 暗青灰色	精良	堅緻	重ね焼痕
32	須恵質土器 瓶体	23.0 —	斜上方へ直線的に伸びる口縁部。端部は上下に膨張し、外傾する面を持つ。 回転ナデ。	灰青色	精良	堅緻	
	B 6 地区 第Ⅲ層						

遺物番号 区分番号	器 出土地点	(cm) 口径 法縫 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
33	須恵質土器 縁鉢  B 8 地区 第二層	26.9 —	斜上方へ外反ぎみに伸びる口縁部。端部は上端つまみ上げ。下端は肥厚し、丸みのある面を持つ。 同軸ナデ。	淡灰色 口縁部外面 灰色	精良	堅焼	重ね燒痕 内面器表剥離する
34	土師質土器 縁鉢  B 8 第二層	27.2 —	上方へ内湾ぎみに伸びる口縁部。端部は下端肥厚し、外傾せる面を持つ。 外軸ナデ、口縁端部ヨコナデ、一部にハケナデ。内面ナデ。	淡灰色	精良	良	
35	土師質土器 縁鉢  C 3 第二層	29.8 —	斜上方へ直線的に伸びる口縁部。端部は外傾する面を持つ。 外面ヘラケズリ後ヨコナデ。内面ヨコナデ。 描日は14本／2.5 cm。	赤茶色	0.5～1 mm 程度の長石 を含む	良好	
36	瓦質土器 縁鉢  B 8 地区 第五層	23.9 —	斜上方へ内湾ぎみに伸びる口縁部。端部は外傾する凹面を持つ。 外面ナデ、口縁部ヨコナデ。内面ヨコナデ。 描日は7本／1.3 cm。	淡灰色～黒 灰色	精良	良好	
37	瓦質土器 縁鉢  C 7 地区 第五層	27.9 —	斜上方へ直線的に伸びる口縁部。端部は器肉を増し、外傾する凸面を持つ。 外面ナデ、口縁端部ヨコナデ。内面ヨコナデ。	淡灰色	精良	良	表皮剥離 内面煤付着
38	瓦質土器 縁鉢  B 3 第三層	30.0 —	斜上方へ内湾ぎみに伸びる口縁部。端部下方は肥厚し、垂直な凹面を持つ。 外面ナデ、口縁端部ヨコナデ。内面ナデ。 描日は8本／1.8 cm。	淡灰色	精良	良好	内面煤付着
39	瓦質土器 縁  C 8 地区 第三層	22.5 —	体部から「く」の字形に屈曲し、強く折り返す口縁部に至る。 ナデ。	乳白色	1～2 mm程 度の長石を 散見する	良	
40	瓦質土器 縁  B 3 第二層	29.5 —	上方に伸びる体部から丸く屈曲し、丸く終る短い口縁部に至る。 外表面体部タキミ、口縁部ヨコナデ。内面ナデ。	白灰色～淡 灰黑色	1 mm程度の 長石を含む	良好	
41	瓦質土器 縁  B 1 第二層	—	斜内方に伸びる体部から丸く屈曲し、丸く終る短い口縁部に至る。 体部ナデ、口縁部ヨコナデ。	淡灰黑色	1 mm程度の 長石を含む	良好	
42	瓦質土器 縁  B 4 第三層	—	上内方へ伸びる体部から角度を変えた後丸く屈曲し、斜上方へ外反ぎみに伸びる口縁部に至る。端部は丸く終る。 外表面体部タキミ(3本/cm)、口縁部ヨコナデ。内面体部ナデ、口縁部ヨコナデ。	淡灰色	0.1～0.5 mm 程度の長石 を含む	良好	全体に風化

出土地点	層	(cm) 口径 法量	器形	形態・調査等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
43 瓦質土器 火鉢	C 2 地区 第 1 層	— —	— —	体部に 2 本の凸線が走り、凸線間に文をスクンブしている。 内外面ナデ。	淡灰黒色	精良	良好	
44 丹波燒 擂鉢	D 3 地区 第 2 層	23.5 —	— —	斜上方へ直線的に伸び、内に段を持って端部に至る。端部は外傾し、沈線状の隈みが一周する。 外圈静止ナデ後回転ナデ。内面回転ナデ。 擂目は 4 本/cm 2 単位。	茶褐色	精良	堅緻	
45 陶器 擂鉢	D 3 地区 第 2 層	— —	— —	斜上方へ直線的に伸び、器肉を増して直立する口縁部は至る。上端部は斜上方へつまみ出され、側面に 2 条の回線が走る。 回転ナデ。擂目 9 本/2.2cm 2 単位遺存。	淡茶色	精良	堅緻	产地不明
46 陶器 擂鉢	B 4 地区 第 5 层	24.1 —	— —	斜上方へ外反ぎみに伸び、口縁部に至る。 端部は下部の肥厚し、外傾する面を持つ。 回転ナデ。	淡茶色	精良	堅緻	产地不明
47 鐵前焼 擂鉢	C7-C8 地区 第 II - V 層	— —	— —	斜上方へ内高ぎみに伸びる口縁部。端部は上部は拵強し、下部が肥厚し、外傾する広い面を持つ。 ヨコナデ。擂目は 5 本/1.2cm。	赤茶色	1 mm 程度の 長石を含む	堅緻	
48 鐵前焼 擂鉢	B 4 地区 第 5 层	26.9 —	— —	斜上方へ直線的に伸びる体部へ口縁部。端部は上内方に伸び、上端は丸く、下端は面を持ち、内傾する広い面を持つ。 回転ナデ。すり目は 8 本/2.1cm。	灰色～赤茶 色	精良	堅緻	
49 鐵前焼 擂鉢	C 4 地区 第 3 层	— —	— —	斜上方へ外反ぎみに伸びた後上方へ拵張する口縁部。上端は段を有し、側面には 3 条の回線状の隈みを持つ。 回転ナデ。擂目は 4 本/1 cm。	赤茶色	精良	堅緻	
50 青釉焼 擂鉢	D 3 地区 第 1 层	29.9 —	— —	斜上方へ外反ぎみに伸びた後上方へ拵張する口縁部。上端はつまみ上げられ、側面には 2~3 条の回線状の隈みを有する。 回転ナデ。擂目は 6 本/1.5cm 3 単位遺存。	赤茶色	精良	堅緻	
51 信楽焼 擂鉢	D 3 地区 第 5 层	34.8 —	— —	斜上方へ外反して伸びた後上方へ拵張する口縁部。端部上方は丸く下方は肥厚し、側面は回面となり、2 条の沈線状の隈みを有する。 回転ナデ。擂目は 6 本/1.5cm 2 単位遺存。	黄茶色	0.2~1 mm 程度の長石 を多量に含む	堅緻	
52 京洛焼 要	B 3 地区 第 1 层	37.1 —	—	体部から丸みのある「く」の字形に彎曲し、口縁部に至る。端部は上下を抵張りし、広い外傾する面を持つ。口縁上面には沈線が附る。 回転ナデ。	茶色	1 mm 程度の 石粒を散見 する	堅緻	内面自然釉

遺物番号 出土地点	器種 (cm) 口径 法量 器高	形態・調整等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
53 唐津燒 碗? C 8 地区 第五回	— 高台径 4.3 高台高 0.8	球形に近い底部に高台が垂直に付く。高台 は幅広で低く、竹の節状を呈する。 カンナ割り。 底部から高台内露胎(胎なだれ)	青灰色	精良	堅焼	細かい貫入
54 朝毛目唐津 碗 C 8 地区 第五回	— 高台径 4.0 高台高 0.9	垂直に下る高台、腹の張りはやや強い。 体部にカンナ割りの段焼。 内面底部にドーナツ形に胎をかきとる。疊 付露胎。	暗茶色	精良	堅焼	疊付に陶枕 2個残存
55 伊万里燒系 碗 C 4 地区 第五回	— 高台径 4.5 高台高 0.9	水平な底部から斜上方へ内側して伸びる。 高台は断面U字形で高く、垂直に付く。 疊付露胎。	乳白色	精良	堅焼	二次焼成
56 唐津燒 皿? A 2 地区 第五回	— 高台径 4.4 高台高 0.5	水平に近い底部に高台が垂直に付く。高台 は幅広でさわめて低く、竹の節状を呈する部 分が認められる。 カンナ割り。 疊付のみ露胎。	乳白色	精良	堅焼	見込み・疊 付に陶枕 3 個残存
57 唐津燒 皿 C 5 地区 第五回	— 高台径 4.7 高台高 0.6	外上方へ直線的に伸びる底部に高台がほぼ 垂直に付く。高台内は突出する兜形高台、腰 に縁を持つ。 カンナ割り。疊付露胎。 陶枕 2個残存。	灰色	精良	堅焼	
58 唐津燒 皿 C 4 地区 第五回	— 高台径 5.4 高台高 0.4	きわめて浅い底部に断面逆台形の低い高台 が垂直に付く。高台内はわずかに突出する。 カンナ割り。疊付～高台内露胎。 陶枕 1個残存。	乳白色	精良	堅焼	
59 唐津燒 大皿 (絵唐津) C 7 地区 第五回	— 高台径 9.7 高台高 0.9	水平に近い底部から徐々に外上方へ伸びる。 高台の割り出しは浅い。 カンナ割り。 外面露胎。	暗灰青色	精良	堅焼	
60 京燒 碗 B 4 地区 第五回	10.6 6.8 高台径 4.7 高台高 1.0	張りの少い腰から直立ぎみに立ち上がり、 わざりに外反ぎみの口縁部に至る。端部は器 肉を減らし尖りざみに終る。高台は垂直に下る。 体部内位以下にカンナ割りの段焼。 疊付のみ露胎。	黄灰色	精良	堅焼	疊付に陶枕 2個残存 細かい貫入
61 京燒 碗 B 4 地区 第五回	— — 高台径 4.3 高台高 0.9	垂直に下る高台、疊付は幅広。高台内中央 部わずかに突出する。 疊付のみ露胎。	黄灰色	精良	堅焼	細かい貫入
62 伊万里燒系 碗 B 8 地区 第五回	— — 最大径 9.0 高台径 6.9 高台高 0.5	底面から外方へ内側して伸びる。高台は 断面U字形で低く垂直に付く。 疊付・内面露胎 体部に文様あり、腰 1 条・高台際 1 条の圖 案。	白青色	精良	堅焼	

遺物番号 出土地点	器種 法量 高台径 高台高	(cm) 口徑 断面	形態・調整等の特徴	色調	胎上	焼成	備考
63 伊万里燒系統 A 2 地区 第二層	— — 高台径 4.0 高台高 0.7	— — —	水平に近い底部から外上方へ内湾して伸びる。高台は断面U字形で薄く垂直に付く。 縁付窓、見込みにドーナツ形の袖のかきとり。縁に1条・高台縁に2条の圈線。	白青色	精良	堅緻	
64 伊万里燒系統 D 3 地区 第二層	— — 高台径 4.1 高台高 0.8	— — —	水平に近い底部から斜上方へ内湾して伸びる。高台は断面U字形で薄く垂直に付く。 縁付窓。 体部鉛文、縁に1条・高台縁に2条の圈線。	白青色	精良	堅緻	
65 伊万里燒系統 B 8 地区 第二層	— — 高台径 4.4 高台高 0.8	— — —	水平に近い底部から丸く屈曲した後、上外方へ直線的に伸びる。 縁付窓(高台縁に輪なだれ) 外側体部3条・幅広1条・2条、縁1条・ 高台縁2条・高台内1条の圈線。	白青色	精良	堅緻	

## 第5章 まとめ

今回の東郷遺跡第20次調査では、庄内式新相～布留式古相に比定される方形周溝墓7基・土壙墓1基・土器棺墓2基を検出し、当遺跡内で新たに墓域が存在することが確認できた。当遺跡内では、本調査以降も当調査研究会および八尾市教育委員会により発掘調査が行なわれており、昭和62年6月1日の時点で24次に亘る調査が実施されている。このように、当遺跡では、調査件数の増加に伴って弥生時代中期～鎌倉時代に至る数多くの資料が蓄積されており、八尾市域の遺跡のなかでも比較的実態が明らかな遺跡と言える。ここでは、今回の調査成果および既往調査成果をもとに、当遺跡内での各時期ごとの推移を考えてみたい。

### 弥生時代中期（畿内第Ⅲ様式～第Ⅳ様式）

この時期の遺構は、遺跡推定範囲の南西部に位置する第15次調査地で土坑2基が検出されている他、第10次・第11次・第14次・第20次調査地でこの時期に比定される土器片が少量出土している程度で、遺跡の詳細は不明である。

### 弥生時代後期（畿内第Ⅴ様式）

第13次調査地で土坑、第24次調査地で遺物包含層を確認しており、遺跡推定範囲の北東部一帯にこの時期の集落が存在していたようである。また、今回の第20次調査地ではこの時期に埋没した自然河道を検出している。

### 古墳時代前期（庄内式古相）

この時期の集落の中心は、遺跡推定範囲の西部に集中する傾向を示している。居住域は、第5次・第9次・第14次・第19次調査地付近にあったようで、第5次・第14次調査地では竪穴住居4棟・掘立柱建物2棟を検出している。墓域は、第17次・第21次調査地で方形周溝墓2基・土器棺墓3基が検出されており、居住域に近い位置に墓域を設定している。なお、第3次・第4次・第5次・第18次調査地の南部付近より南側は沼沢地が広がっていたことが確認されている。以上のことから、この時期の集落の景観を復元すれば、沼沢地の周辺に居住域を設け、その北側に墓域を設定していたことが推定できる。ただ、生産域である水田は現時点では検出されていない。

### 古墳時代前期（庄内式新相～布留式古相）

この時期の集落は前代と同様遺跡推定範囲の西部にあったようで、第4次・第5次・第8次・第11次・第14次・第16次調査地で遺構・遺物を検出している。居住域の中心は第8次・第11次調査地で、ここでは竪穴住居8棟・掘立柱建物12棟を検出している。居住域内の建物数の増加が示すように、この時期は前代に比して集落規模を拡大しており、周辺に存在する同時期の集

落の推移と符合した結果を示している。この時期の墓域は、居住域の南東部に位置する今回の第20次調査地で、方形周溝墓7基・土壙墓1基・土器棺墓1基を検出している。

#### 古墳時代中期

この時期の集落の中心は遺跡推定範囲の東部に移動したようで、第1次・第2次・第13次調査地で土坑等が検出されている。なお、第21次・第24次調査地では、包含層から円筒埴輪が出土しており、付近一帯に古墳が存在した可能性が高いと考えられる。

#### 古墳時代後期

この時期の遺構は、第1次・第6次・第7次調査地で検出されている。集落の中心は第6次調査地一帯にあったようで、前代の集落よりやや南側へ移動したことが指摘できる。以後平安時代に至るまでの遺構は検出されていない。

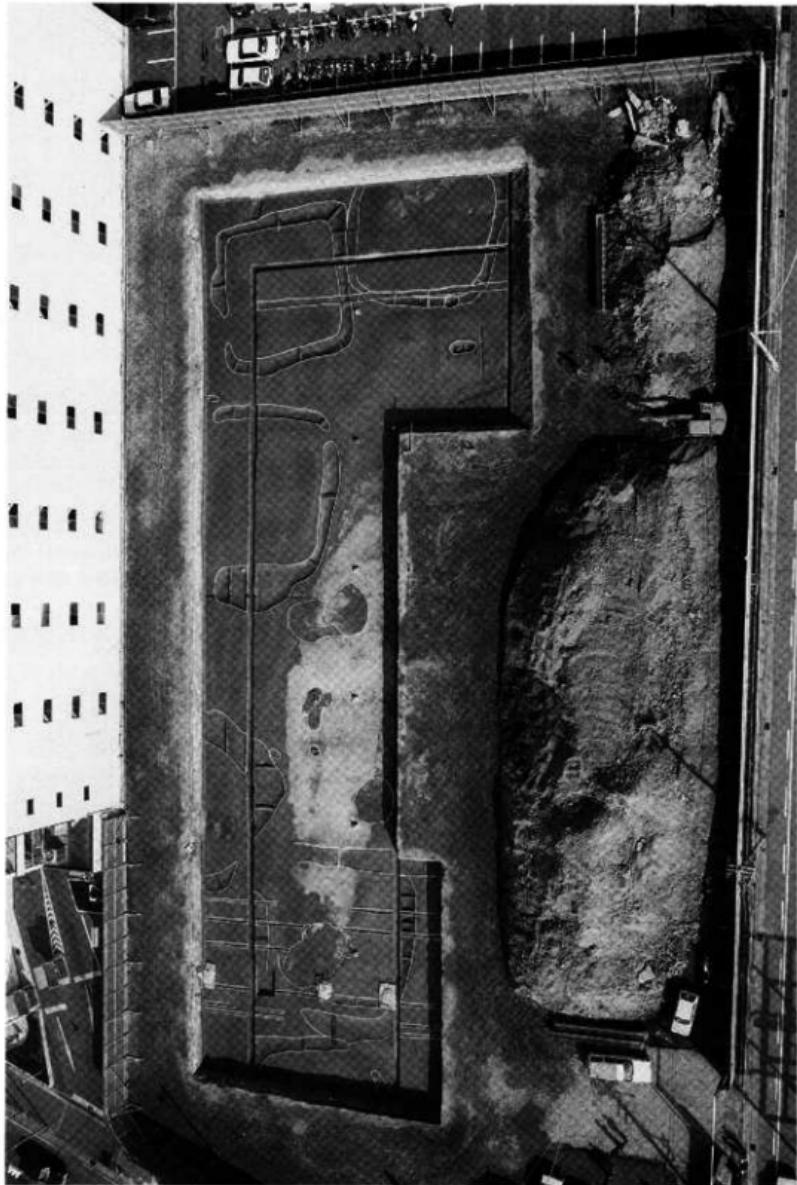
#### 平安時代

平安時代の遺構は、前期と後期に2分できる。前期の遺構は、遺跡推定範囲の東部に位置する第1次調査地で、掘立柱建物1棟と井戸1基を検出している。後期の遺構は、遺跡推定範囲の西部に集中する傾向で第14次・第21次調査地で、井戸・土坑・小穴・溝等が検出されている。

#### 鎌倉時代

この時期の遺構は、第3次・第4次・第15次・第16次・第18次調査地で水田を検出している。さらに、第5次・第8次・第9次・第10次・第20次調査地では、古墳時代前期の遺構を削平して東西・南北方向に延びる小溝を検出しており、この時期以降条畠区割に規制された土地利用が実施されていたことが窺える。一方、遺跡推定範囲東部の第1次・第2次・第6次・第7次・第24次調査地では、厚さ30~60cmにわたる整地層の存在が認められ、この時期に大規模な開発が実施されていたことが推定される。





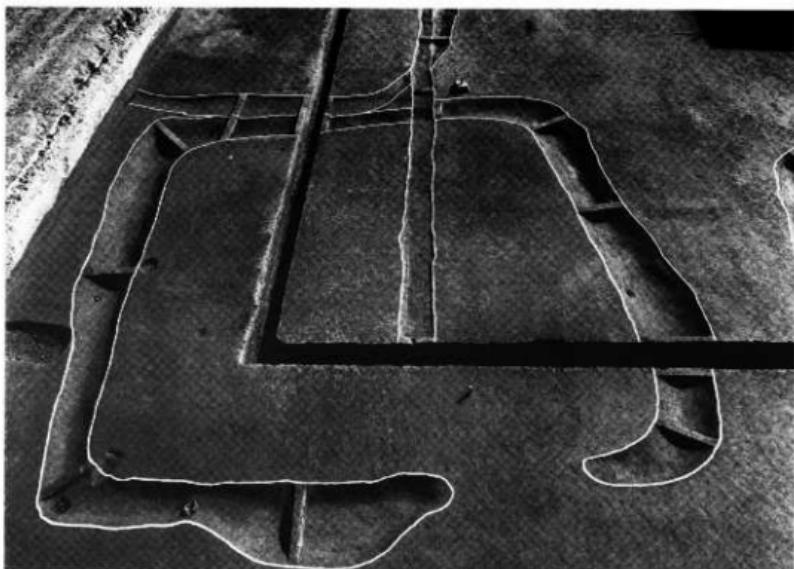
調査区全景 但し、調査地の拡張に際して調査区北東隅を埋め戻したため S X-3 は写っていない。



調査区北部遺構（南から）



調査区南部遺構（南から）



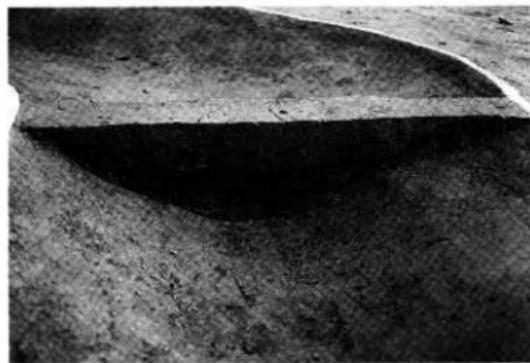
S X-1 (西から)



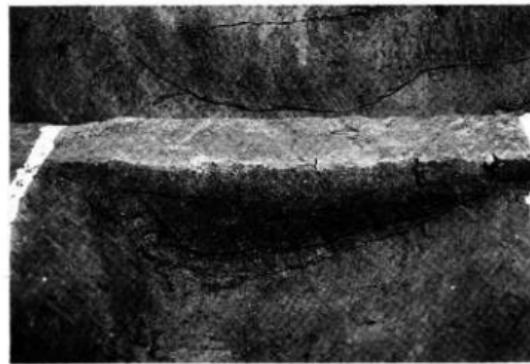
S X-1 南周溝内遺物出土状況 (東から)



東周溝（南から）



南周溝（西から）



S X-1 周溝内土層堆積状況 南周溝（東から）